[illegible]

中

久曾神藏書

奥義鈔序

歌はあめつちのひらけしよりおこれるか○乃今よ
はしまれりくにのならはしのことなるか故に和(ヤハラク)
をさめしおしへをなかつむかれるか故に歌を名と次
五帝本紀注云歌ハ長言(ナカクイフ)なり
ひとつの詠之詠とあるをいひしるへし是によりて歌とは云
詩にもとこゝろしのゆく之所ハ我国のことの葉にて
も同しからす類をおもひしるへきにもあらす一雑歌ハ賦
なり長歌ハ五七言詩旋頭歌ハ江南曲混本
歌ハ越調(エツテウ)詩連歌ハ聯句之廻文まてもそなはれは
ありとよろつのことにこよろ是なれ事おほし歌
のみちくはしくしるされたるものなしおほし千早振
神代よりはしまりて今の人も見るにかたかるへし其思ひて

さてうたは須佐之男の尊の出雲八重垣よりぞくみ
ちはやぶる神代より哥は三十ちひともじにさだまれ
しかれどもことばかくさへなつく言葉うつね
かりはみくいろ(?)ことわり是よりさかくのもと
あんくの名はろへらいてきこれとも今の世と
哥はあそびれとそわらはかされきことくみすつい
りへるを見んとてしらゆるわるもなくけれとひかりをやて
らひとあこのおほはのてまふ
文殊の忍ひとふかりて聖徳太子に奉れる哥
いかるかやとみの小川のたえはこそ我大君の御名を忘
め
神とかくらをとわらしあまれ給ひこてこたまふ
平城のみかと位を春宮に譲り給ふ時の御哥

神かへるとみれは住吉の岸の姫松幾代へぬらん
神わうかれあるぎさまいく
天皇とおもへはおもとやこゝのへの名を代々におもひ初てき
あまつ人と見えしは僧てたくひまし乃かは
浄御原天皇吉野川にて琴をひきたまふ時
神女天降て舞哥
しを女子かをとめさひすもからたまををとめさひすも其
其曲あかりふしを五節といふのことさらあそて
まりあいはかおこなひ事へ
とて君かみとしかくみなとのおほとこしき
天平感宝元年陸奥国より金を奉りし時詔書反
哥大伴家持作

すめろきのみよさかへむとあつまなるみちのく山にこかね花さく

おほきなれはねかひをとこいのれ

傳教大師中堂建立乃時の哥

阿耨多羅三藐三菩提の佛達我立杣に冥加あらせたまへ

祈人民の為れ乃みことゝもいへと

延喜御時衍値に蔵人下参ける哥

いつくともきけ日のかけはわかれまくおもひやる山に雪のふる

おもふ人にしこゝろをとゝむとなるらむ

静範なかされ侍ける河邊房綱上にてよみてかへ

さゝく哥

大月やこゝろにすむ海の都なる人こそわれをこゝろのうちに

ゆくらむいつとなくこそ

大隅守桜嶋忠信郡司乃罪をしらむとしけるに

よみてゆるされし哥

おい果て雪の山をはいたゝけとしもとみるにそ身はひえにける

かしこまりてもとをとをとをそてをと

空也聖人乃哥

ひとたひも南無阿弥陀佛といふ人の蓮の上にのほらぬはなし

まけさらのくゐもなりけり

平貞盛かめしに陣にありとて将門にさね

とられける河の哥

いつくともしらぬのなかれおもふ子故なれは我のやみにい

たのもしき人のみにしあひもとなる也とおもて

いかにせむこともかのゆきやこゝろに標是なりよ

なしこことなし（ここまでは哥の序の ことわりをいふ）此哥人のこころなれ
かくなれは雨の降て時にあひてところところへ行
今の哥をいはへよむ物なれはむかしをしらぬ
古今序にいふくらゐことは雲のおよくくものことに
やまとなつかしとはいふ三みなてすくれたる
てうの花ひらきさかりの光をとり見れにてしゐしをいひ
御たいふことかしおそらく哥の御ミ式は光たのみ
まに参議藤原朝臣成（ハニ）須みちとのみさいをしるり
て作る哥式をしいは石見女髄（スイ）脳（ナウ）をいひて家
くのたくひてつくりて集はおほつきをいはむかし
此萬葉集とさらして拾遺をとりいは金葉
集はをえらひしせしえそいは後にこそくみは山上憶（ヲク）

良加類聚哥林より新撰萬葉集（天神の撰 号菅家）
萬葉集樹下集（法橋深（眼イ）貫撰）とはすそれおもとひくの
まさまけくらゐこのなついはるる乃集柿下山邊の式を
ちかて海人（ノテ）古良（コラ）（仲成大納言）豊蔭（一条摂政集）盧主集（僧喜撰）
らはをとやすみていくらもくられかれのたくひをかきかすさ
こ源大そんの尾張のおもすかれおけくれをさねくか
しるさはとやむれいへはかくかことにあやれもさせまれ
とあとはあるの式乃おもたさらにもあして今の世
おとのおかにしたのおはれてかれにおなりさ
あはえむしをなけいいをもりなくらんやいてそのあへ乃
くさうにおもれむれは二三人のふるあさからのなとそ
かみれさくひりおれのふへ句ちちそれまくにあつをと

て奥義抄といふことは深きをみくたしおきて
くひせむ後とあさからむ人にとゝめてあたへ
りおもふへしといへり

奥義抄上　式

前和歌得業生柿下朝臣撰

一六義　二六躰　三三種躰
四八不　五畳句　六連句
七隠題　八誹諧　九譬喩
十相聞哥挽歌　十一戯咲　十二無心所着
十三廻文　十四四病　十五七病
十六八病　十七避病事　十八詞病事
十九秀歌躰　廿九不　廿一十躰
廿二盗古歌　廿三物異名 月十二月名　廿四古歌詞
廿五所名

一和歌六義

一風　二賦　三比　四興　五雅　六頌

一曰風　古今にはそへ歌といへり云

疏ノ毛詩は小さきやうなる義にはかはりて(?)はそへ歌といへり

毛詩云上ハ以風化下ヲ下ハ以風刺上ヲ注云風化風

刺皆謂譬喩不斥言也

今案ずるに周書云風ハ諷也とも云ふとも

そへハ譬ともいふことはにて義をさとらしむる

歌ゆへ故風をそへ歌といへり

此歌ハ大鷦鷯天皇をみことをそへたてまつれり位を

ゆづりて三年まで位につき給はさりけれはそへ

て見けるつゐに正月に位につき給ふ

此歌は新羅の王仁が奉れる歌也梅の花なり

みかどをそへたてまつれり このはなといふは梅

花ちるを二つのことわりにて位につき給へるを見

まつりけるにやことぶきしといふ也

或書云春ハ梅花之初発故号花也

二曰賦　古今にはかぞへ歌といへり云

咲花におもひつくみのあぢきなさ身にいたつきの入もしらずて

正義云賦之言鋪直鋪陳今之政教善悪

今案ずるに賦は鋪也ことくはしくのべたる也

心につくしてかぞへ文をかぞへてはつるゆへ

そへてや故賦をかぞへ歌といへり

三曰比　古今になずらへ歌といへり云

君がはかりしれぬ恩のおもきをいはゞいはれぬさまにたとへなすべく

正義云比見今失不敢斥言取比類以言之

今案ずるに比はなずらへつくる物なり似たれば故比を

なずらへ歌なりと云

四曰興　古今にはたとへ歌となれり云

神意は心にもふことをつゝみてわれともらさず物の名によせていひあらはすを

正義云興見今之美嫌於媚諛取善事以喩

勧之　今案ずるに興はたとへといふ毛詩にはよろこびとあるなど

色もいふはよろこびをもとゝして先ほむる心のあれば之故興

をたとへ歌と云

五曰雅　古今にはたゞこと歌となり云

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし

毛詩云言天下之事形四方之風謂之雅雅

者正也政有小大故有小雅焉有大雅焉

今案ずるに雅は正なりたゞしきことを正しくまことにいふ

くまなくいふはいつはりのまことなきとの心なり

まことをたゞしくいふ故雅をたゞこと歌と云

六曰頌　古今にはいはひ歌と云

このとのはむべもとみけりさき草のみつはよつはに

毛詩云頌者美盛徳之形容以其成功告於神

明者正義云頌之言誦也容也誦今之徳廣以

美之

今案ずるに頌は誦也稱讃の義也祝はいはふ心也

故頌をいはひ歌と云　或説云風雅頌者異體賦

此與著異詞以彼詞成此二形云

二

一和哥六躰

一長哥　二五三七　合卅一字之

八雲たつ出雲八重垣つまこめに八重垣つくるその八重かきを

此哥今書入本哥六文殊の地にあとのまわ

二短哥　五七五七　多少任意

人丸の高市親王に奉る哥

かけまくも　ゆゝしきかも　いはまくも

あやにかしこき　わたりの原に　ゆゝしかりけり

ひさかたの　あまつみかとを　かしこくも

さためたまひて　神さふと　いはかくれます

ゆきの河　ところ山おして　わかおほきみ

そゆかましく　あかの来る　さえん見に来て

またれし

五七五之躰

望病着婦女浄詠之無常哥

ありかたき　ささめてとりて　あはれとして

河きみの　よのなかは　たえ人の世を

あさきさの　なかし時と　ささの数にし

さかゆくさ　ゆふくさえた　ひととろへなは

わかひかし　ひとつおもひに　ななの枝を

ねくさなかの　よひをわかして　ねさめの夜

くさゆくら　よのなかのねを　ふみとわかの

うきなくて　其のひさしも　きをひきて

わかくさをすり　つましまは　かすかまむを
おもひ作く　わかれしとを　まつけれて
うた梅の　うらをくてまひ　つ緑さ川と
ゆあめおと　いととまりしく　なりけとて
かくみまよ　みえひきつしあ　すさなけ哉
おそのうらよ　よもきれあところの　あさきねして
まえけしと　わすれまうるを　見てさく川く
たましかこ乃　みなゆきそれに　こえ絶を
わかくさの　川まとにて　さゆまひね
みなこのよ　わかれし行のみを　つきえぬ哉
まのうけくう　あまりとつくのあき
乱句躰　此卷式今来入之

うきよの乃　ひにの行乃　かくらなまて
むきのまれて　まへうらくにあて　なつまてしらう
さくかてなつに　卯乃花の　さけ哉乃よわ
思ひのわ　きなれとも　ま花まりしの
花まいひらし　思ひそまをす　まけいこくよし
まひは情人　思ひさゆきそ　わの庭にまん
花ちらちりよ　まみわすれしよわ
三旋頭哥　此外加一句　余腰號入七字又字任之
山上憶良並華寄云
まつの花をよめしくをあてをし　二乃まれしを存七
まく梅わうる庵わさらりのき
是ハ胸七字くハへたるをけくあ此卷式今書入之

樵貞樹納下の歌ハ句ゟかなよむ哥
あそのわらしかうきまけなりとかくれともわ
まくらみえりなれわかみかくへく
是ハ腰の字く以へちきれたるわ
小町哥云
夢路にハあしもやすめすかよへとも
うつゝにひとめ見しことハあらす
四 混本哥 常哥の句みさ之七字文字ほ意
是ハ混七字ゝ是へる
安部清行朝臣哥云
あさかほの夕かけまたすちりやすき花のよそかし
又五句躰あり
三 廻文哥云
いゝのえゆ 祢られ松の元 よのこよう
おもふおもろ あれちとめと
五 折句哥 五字あれハ句毎の上ニをくへし
小町か人におくれる哥云
おものとを 花ハなれとハ たのまなん
まつハ見よかし へてハちれやと
ことはたまへとよめる
六 沓冠折句哥 十字あれハ句毎の上下ニをくへし
仁和御製
あふさかも はてハ行きゝの せきもゐす
たつねてとひこ きなハかへさし
あはせたきものすこしとよめる

已上出喜撰式

三和歌三種躰

一求韻　二査躰　三雅躰

求韻哥別有二種

一長哥　次中ノ云句終字ト下句終字ト一韻ハ中句ノ終字ト二韻ヘ傳之

二短哥　次中ノ云句終字ト韻ハ中ノ句終字ト終韻

韻字有二種

一麁韻　やまり　なり　きり　まり　類之

二細韻　之　と　ト　ち　類之

査躰別有七種

一雜會　資人久米廣足哥曰

かそら山に〇こくふねのやくてしわたらかつなみのへう

牛馬犬鼠等乃一處相會之有雜意

故云雜會

二猿尾　通合歸哥曰

もろかたのそのてのみし路もまもとれそのてのかしかしるもなため

終七字の文字われ之故曰猿尾

三無頭有尾

わかしかひとくあわ人はいそくむつなとをれ

之初五字故云無頭有尾

四列尾　殖栗豊鳴詠夜哥曰

あさむつのとゞ嘩くゆる鐘とこそおもほえ果ねこそな

終句有八字故云列尾

五有頭無尾　八坂入姫答活目天皇哥曰

二乃すしとこへあおくれうしこれし
腰次下句云先尾（三句め腰　腰末下句尾）　腰次上為頭
六直語　活月天皇贈八坂入非哥曰
みちまれとふれあれともこのあしとへて［illegible］りて付もよむ
俗人の言語よとあれとするし故云有直語哥
人右云哥の花事あらんたとし見を花ハ
為直辞
七雑韻　八用沙弥紀覚哥曰
白波の浜まつのえたのたむけくさ幾世まてにか年の経ぬらん
韻字不合　ま三句の字初韻　末句の字韻　故云雑韻とよむ
同韻ホとりて
雅躰別有十種

一聚蝶　毎句の上ニ同事を用へ
浄御原天皇御製曰
みよしのとよしとよくみてよしと云しよしのよくみよよき人よくみ
毎句ニ首ありて而すしなきへ葉蝶の
一處ニしかれまんしる事つむしし　故云聚蝶
二絶誠　言隠（コトカクレニ）語露（カタフアラハルル）之　立式者哥曰
［illegible］
［illegible］
［illegible］
［illegible］
［illegible］
三雙本　次句為一統三句［illegible］初韻

きる句頭字と為沈韻

大神高市萬呂卿歌曰

志ら雲のたなひくつき乃かけもとありねむとこ河すゝハ

わさひてゆふ風に聞しなと

こし字と同韻字也

四雑歌　以五句為一紀其三句頭字与句初韻字

為句頭字と為雑韻

おきつらし見えしゆかハしらまくしよれとく

三字ハ同韻字也

五長歌　三句頭字と為一韻如此傳之

石上天雅彦會者歌曰

みわたりや　比らかるきく乃　一韻

うかりきれ　たゝのみちまゝ　二韻

みと思ひの　ありこゝろや　三韻

身もよふるよそま　行ちするさ乃かミ　四韻

二句乃の字ハ是一韻四句の乃字ハ是二韻乃と
乃一對と為句の三乃字ハ是三韻ハ當八句の
三ノ字ハ是四韻み卜ミ是韻一對の韻四句の乃
字為句尾の字韻ニ當今韻を沒と思故
て八韻と沒爲とわりぬ
う以為句頭字て韻ニ連ゝ四句の乃字ハ為
若歌者韻を沒し思ハとまとよむ沒を
ゝ思ハ又其韻の同字の韻を例とる可棄雅
頻多不可用但終句ハ其棄其也

六頸古腰新　古事を発句ニ陳新意ヲ三句ニ陳是ヲ為雅躰

常嬴変陰駕鴦淨娘思婦哥曰

梓弓ひきつのへなるなのりその花ハ咲まて妹にあハぬかも

あつさ弓ハ是古変ひきつハ是なたゝ人なのりそ

をも新意花咲迄ハ是新ものゝ兼妹にあ

んかもハ是為結句

七頸新腰古　新意を発句ニ陳古事ヲ三句ニ陳是為後傳と

長田恵婦哥曰

秋山の紅葉かくれ白露のいろさへさえ殊にわかれなん

秋山ハ発句の新意紅葉ハ二句也白露ハ

三句古変いろさへさハ除けわかねハ

句乃終句ヲ子と対凡此哥之體皆此者

皆為畫辨

八頸古腰古　凡腰哥ニ古変ヲ陳故ニ云乾古腰古
是雖或有相對或亡相對

詠春哥曰

あしひきの山さくら花日ならへてかくさきたらはいたくこひめやも

あしひきの山さくら花日ならへてかくさきたらハ是為相並

九古事意　凡是體非一例又無定處
中ニ文錯

詠龍田山哥曰

風ふけハ雲のきぬかさたつた山いとあやにくにもみちちらなん

雲のきぬかさハ是二句立田ハ是三句二句の蓋

の除ハ緑なく二句よ風さしの山にやわらしく

故ニ云古変意と云

十新意辨　是雖非古変非直語或有相對或亡
相對故云新意相對

孫王塩焼意哥曰

塩みてハいりぬるいその草なれやみらくすくなくこふらくのおほき

右ニ遺直ニ雖称新意みらくすくなくこふらくのおほき是相対ヲ辨ス者直ニ以テ

如形対別可清恵ケ哥萬葉集ニ見え

辞除ニしとをの

正對

秋の夜を長しといへとつもりにし恋をつくせハ短かりけり

藤原里席ニ奉贈新田部親王哥曰

みかさ山雲居ニ見えて心にてわすれしかなくり

第一二句非是直語ニ三四句是為直語ニ采る

一二句之情をわすれしを故新意余事准知

已上ハ濱成ノ式

四

一和哥八品

一詠物者

先初虚タリわかさきして對ニ詠ス山

河ハ先見山とわかるへし

名にしほハてかくこそあれつらし　此可也

二贈物者

専其物に不兼して名にわかるとも贈

歸ナれし人ニ贈物遣落卒於乎

とのとかれつゝとのふむ於とり　此可也

三述志者

儀代小軌模ともして心まなとて頼吟よる

事あられ来三識して述て

あさくらやきをとりへ乃人を住れ山の井乃　若可之

四罷人者

歌ニ其心ハ不被用思て花を綴(ツヅリ)てひ

風く心をとめへき

篠原乃海をしもかみえぬかれ終らし而　若可之

五情別者

悦哀悲歎心中ニ不滿て閉ニ逢心ハ

ゆくかけふかつつきよ逢れは　若可之

六謝過(スルトカツ)者

毎句ニ義を不失して解結謝過

いさしらすまつそへ物のからへきわつ　若可之

七題歌者

息ニ見しとめて不達ニ善悪を不顧從病と

こそとて好

八和歌者

其人の哥中ニ章句をとりて水火ニ相違

あつそても別れて袖ハとをとしむ○か見ハ乃れ物つ

也哥

あれて見えし乃こそにしつ消ぬるをとハ詳としるとそ

若可秘之

五 一畳句歌

六 一連句哥

んそれとふれ人ふし人乃かくをはんたのもの

春の野若菜乃野棟のなにの哉　赤人詠

以上出喜撰式

七 一隠題歌　先古来不載事也此古今并拾遺集ニ

物名詠と云ハ出しけれや為題ニ物名を詠のお

しそなりとにあ他のんをとるゆれし

古今ニきちかうの花は

あきちかう野はなりにけり白露のおける草葉も色かはりゆ

くまつりうにあくせとあるも字をりれさ

てくしもて

又同名のおもてよみてなりても又替歌も

あり拾遺集ニのかもにしうとき

おのれそとりしらにいらへてたえてにあはれりそ

八 一誹諧歌　滑稽也其趣ハ下巻ニあわり

以上出古今集

九 一辞遠歌　如字大義の風俗（比）ニ歌躰也其趣ハ在下巻

十 一相聞歌挽歌　相聞ハ往返歌也挽歌ハ哀傷也

十一 一戯咲歌　如字

ありとあれはいらぬ田とものにておほけなれてるかたなう

十二 一無心所着歌　雑会（會）歌躰也ニ万葉ニ

わきもこかひたひにおふるすくろくのことひのうしのくらのうへのかさ

以上出萬葉集

十三 一廻文歌

さかさまにもよむに同事之詠草花古歌之

むらくさにくさのなはもしそなはらはなそしもはなのさくにさくらむ

十四一和哥四病

一岸樹病　第一句初字第二句初字同也

てる月さえてらぬ月さえ　是てトてと

二風燭病　毎句第二字与第四字同也

このとのハさとをなりけれ　是のトのと也

三浪船病　五言の第四字と七言の六七の字同也

くさのかのかくしいとく　是のトのとトと也

四落花病　毎句有同詞事也

但故重複ハ不忌之

已上於喜撰式

十五一和哥七病

一頭尾（トウビ）　第一句終字ト第二句終字同也

さとしらねさくら柳の　是のトのと

二胸尾（キウビ）　第一句終字第二句の三六等字同之

むかとより信濃のふあても　是のトのと

三腰尾（ヨウビ）　他句終字ト本韻ト同也

ゆつりきみをみゆるにあれとよ　本韻ハト不忌之

四黶子（エンシ）　毎句中字与本韻同字有之一黶子二黶子ハ二巨病上ノ為巨病

いとをなハちよりあそふまんはし風よ　本病ハト不忌之

五遊風（ユウフウ）　一句中字与流字同之

こゝかしこかせしきりたる人の　是ホト不忌之

但花の名ハ不忌之　假令いとうひと妹紐（イモカヒモ）

きしあるとうけとも哥ノ通

六聲韻　二句終字同也

みまくほしおもふ君をもわれにはあかねなきことかいかにせよとか

水と水と　但不巨病者長寿なと用之

七遍身（ヘンシン）　二韻中本韻二字以上を除テ同字

にて文字をいにおもひしよもの心同君をみるめのなし抄

二句中に同字の用是之

已上出濱成式

十六

一和歌八病

一同心　一首中ニ再同事ヲ用之　或曰倭藁瓶（クワヒヒ）病

ころもたにふたつありせはあかしかたかたしきなれはよそにねなく

若欲重読ハ文各別ノ同音読共字之

ことはさてはさこそはいひけめこといはむとやかくてはやまて

文字雖同義異ハ不嫌之　中原氏初為寿曰

嫌字川にはかはにこそこゝろにはうきとなかれと

列与為義異之

文字雖異義同ハ不嫌之在本嫌字曰

あしひきの山した水にかけ見えてなほさえかたき月のかけかな

あさことにあすとてひさにまへなをうと遠し

二乱思　詞不優して常にきゝなれたる詞也

式ノ倭被遮病　古郷野路遊之寿一云

おもふのちのむかしのかたみとおもへともよそにみるめのうきたかなし

古小鳩寿一云

三欄蝶　自他ハ称テ来（蹴）シ　或云倭平頭病

春霞たなひく山のさくらはなうつろはむとやいろかはりゆく

四渚鴻（ショコウ）　病ニ題ヲ裁入テ詞を不労也

或云傳ハ上尾病　用韻寄ノ曰

鶯の囀りつる梅か枝にさくら花枝なき春のまれなりけり

五花橋　詞質ありて直ハ其本名と用

或云傳割語病　古風ノ曰

あはれなりたけし花橘をとしなくはなにはむかしの人をしのはく

之老桃　篇於一章上下三用之

或云傳顛錯病　表摽ハ或云一哥中ニ云

足ひきの山のかくれにとしつれは古今贈花

寄ノ云

五月はなるしきくれに見ゆる人の心にはたえす浦ひかたらに

七中飽　一篇の中ニ或有廿文字也　或云傳

結腰病　古題歌花寄ノ云

咲く桜花ハ見るかひもなかりけるむかしに花をうつりきて見む

八洗梅　混本之詠書韻云傳解鐘病

表摽或云心のとかに花と見はとそこそとして

まことにもちて梅と

志かの花とのさくら花にあれとのと

已上初表摽寄ノ孫姫式

七 一避病事

古式之趣并往迹代不同ハ哥ハ卅一字病ハ

同心病也同心の病と云ハ一首乃中ニ再

同事を用也但隔句て用と為病と隔

句とハ三義を一ハ哥ハ本の五七文の句を

末とハ下の七々の句を末と云ハ以下

をまつ小の作れとも為病一ハ隔句といふハたとへ
ハ上句一句に入れ事とまた三句に及て入事
二句に入事にしか思句との不嫌也中ニ三
句はなれてハ嫌れとも為病云
今案ニ如古髄脳ハ一首の中ニ二度同字
を用るを同病と云ふハ一字を隔句相嫌き
凡ても是又今の世にもさる事なれ
趣し地て異なる事　新撰髄脳のこ
とくなそ
み山ふかく降しくなれ白雪のふかくそつもるにそあり
是ハ病と云ふとも山と山也離れて平成二首
の中に同事なれとも二病とせすと又云

みさふらひみかさと申せ宮城野のこの下露ハ雨に増れり
一字なれとも同ハ為病　諸哥にも是とくせ
又みさふらひみかさの字ハ御の字なれは猶是
あそなるひの句にも同字なれハ病と見えたり
たゝ隔句といはれぬほとも病句けるなり
中小句を隔てをかれハ少也又新ハ同たんに
とかれハ不為病同髄脳云
三山にハ松の雪たに消なくにやこハ野へのわかなつみけり
みやこといふこと別の字なれ嫌為病又一字
と同しかれとも心同ハ猶為病此義何未詳
の哥也　同髄脳云
ことのはは今夜のなさけにさらすれは竹の林の声をさへかくせ

なとさけ日本にあれ故為病にて
又向ふ句の末より同字あれはさるへき之又句乃
末なりとも詞の末よりことある事まゝあり
つゝくさけれ
たゝねれは清におくたなれ花と此事は是ひとを悔にあらすこれ
きする句の果乃字まて有二句乃二字まてあらし
なしとなし
久かたのあきは何處の清き守見えくるかなへれはしてよ
きする三句の果乃字間乃まゝ乃し
かくいひてもくしかれはこそあけおかれて病
是はかくのあしくれはこそあれ色すもとけに寿
さりみまれは寿之しか令り

十八 一詞病事

又寿より詞病とてこともあるなくしも髄脳
あんりてもと近代あまりのたゝへはもとれんす
しら歎し悔とくに再よあなたなとあきよめはまし
こゝにとし
あつまとしせめて命たれ檜かれは遠き人のいのちあはれし
是は又なるき寿之果といふあれ事をなくれ
つけつまりはあしくをもさもさるれは天徳の寿
会りは同しくもあれともあわれとも有りこの
ゆねをあゝつゝまれとくは當時再よたくな
これるかし近代の人はかれとも用之

十九 一秀歌

新撰髄脳に歌ハ心ふかくすかたきよけにて心に
おかしき所あるをすくれたりといふへしこと
おほくそへくさりてやと見ゆるハいとわろき
なりひとすちにすくよかになむよむへし
すかた心あひくする事かたくハまつ心をとる
へしつゐに心ふかゝらすハすかたをいたはる
へしそのかたちといふハうちきゝきよけにゆゑ
ありて人あはれと歌さまもよくきこえて見ゆる
よしをしるへしとかくいふに中比の人ハさしてもあり
事よみてもとれおもしろき詞いてしくわすれ
たまひしかハおもしろきことをもとくさとらしく

見ゆれはおもしろき事をいふものなりとそいへる
しつかにすかたほそく歌によみをつらねて
しまさ歌のかたちよわき詞を歌にすへき
ものとしることはいとよしとみえたり
事ハよみ得ていふへきにあらねとそれもかへりて
さまよまさるへしと思ふこともあるなり内外篇典之
の心にかなへる詩歌をもしいはむにはからの
ことはをもてよむことあり古歌のしん
物語のことハかならすしも人のきはめたる
いふにしもあらすたゝそのうちにすくれたる
人の心ねおもしろくすくなかりしを又むかし
のさまにハ乃三二のミてよきしらへありと

このこゝろハ和歌ハうたうたしきしんのあハれをしらす
ゆうにやさしくさとおもしろきすかたをなすへく
うへ下わかれ捻をいふ也つらゆき歌
世の中をうしといひても人の閉門にあかれもとの白雲
わすれ草種とりて見れハこの月かかれこゝろの山きは月を
貫之躬恒忠岑の歌も中比の今の人のむ
色に付流之貫之之歌
此ハ是いにしへもみちの紅葉の川風さそふ嘲之
躬恒歌
神前の花見るそらにあはれ人ハ顕ふのいろさたまる
兼盛歌
明日ハ秋たて横目年月と過にこそ行なれ

此歌を上にたて是かくれ仲にあるもまた文
さらくこのむ歌らのよき人数なるへし
風情ハおもふの白浪の思山ゆふめや思ハぬものゆく（こゆへ）
此歌と貫之の歌の序とはいふ本ともいへり
津の国なにはの橘とかくしていふも神明とはいふもなくをも
是ハ此歌の此の中程のうたにあふしものむかしハ
名すら此歌色をもあてよるべきものなし
恋せしとみたらし川にせしみそき神ハうけすもなりにけるかな
是ハ深養父か元輔かとハ人ハうたなき
すへてよむへきハ是等も同髄脳にみえて
かの先歌の先からハ忠岑か和歌の十体若
ハ定家之卿之九品道済か十躰なとも

凡て此書ハ手本なれハ書れさる

一和歌九首

一上ノ是ハ詞とをく入あつて有のまゝにさんあれハ

春の日の光にあたる我なれと頭の山と成にて見るらん

なるゝとも見えの浦の有さま霧にかくれ行舟をしそ思ふ

二上年ハしられハしく見る有のまゝのんあれハ

三山あいに有るむ梅のしるしてあれ梅さく木の曲つて交有いはれ

あの雲の上の雲のよかけへてはやまさくらんと見る月影

三上下心あてにおらはやおらむ初霜のおきまとはせる白菊の花

世中にたえて桜のなかりせは春の心はのとけからまし

しらつゆの駒をとめて袖うちはらふかけもなしさのゝわたりの雪の夕暮

四中上んへあとをこえてすておもしろき

立田のかそとしらぬは紅葉をかへて流れて有は緒をし

とらかれの末にはなれはあの山の三社やとほりその水に

又中ハとをくなれ事にあくとあるへきとなくて

あれハ我さきとしおもひ置き

花こそあれ人いつれと鶯の声のれさるはあしとう事

いろ見て梅の花を見て梅の花の色にさくも

五中下をこゝしれはこそこゝろあれ

こゝろあてにおらはやおらむ初霜のおきまとはせる秋風の梅

我とたゝ人と思ふをも人の見ゆしとおもふ

七下上見るに一梅しありて

吹からに秋の草木のしほるれはむへ山風をあらしといふらん

まつ山の尾上とおもひてくれ杉の葉をふもとの雪にして

八 下中下との心[illegible]

今よりは植てたにみし花すゝき穂に出る秋はわひしかりけり

わの[illegible]

九 [illegible]

世中の[illegible]

あつさ[illegible]

廿二 道済十體

一 古體

とこ[illegible]

むかし[illegible]

二 神妙

君か代は千代にひとたひゐるちりの白雲かゝる山となるまて

三山出て夜半にやきつる郭公暁かけて聲のきこゆる

三 直體（スナヲナルテイ）

お[illegible]

妹[illegible]

四 餘情（ヨセイ）

神前の[illegible]

今こむといひしはかりに長月の有明の月を待出つるかな

五 寫思（ウツスオモヒ）

君[illegible]

これ人を[illegible]

六 高情（カウセイ）

冬なから空より花の散くるは雲のあなたは春にやあるらん

行やらて山路くらしつ郭公今一声のきかまほしさに

七 器量

きのふこそ年の暮しか春霞春日乃山にはや立にけり

梅の花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは

八 比興

雪のうちに春はきにけり鶯のこほれる涙いまやとくらん

花乃色ハ霞にこめて見せすとも香をたにぬすめ春の山風

九 華艶體

むめかえにきゐる鶯春かけてなけともいまた雪はふりつゝ

あ万人あ見え行つさ物風そあまれいとてはけて生とくし川

十 両方

山高み雲井に見ゆる桜花心のゆきておらぬ日そなき

年をへて花の鏡となる水ハちりかゝるをやくもるといふらん

是はよく心うへき之

十一 盗古歌證歌　餘流哥在一字新仍一承流之

ゆれ哥の心かはらすしてことはしかしかれぬをよく

よみつゝけても詞をかへて名にゆるさるゝ人

もてあそふ乃名哥にあらそひならへは

してものかれはしらさるやうにそなる

てよみ哥とあるかはしかれ心つねよし

證歌

古今

花乃色ハ雪にましりて見えすとも香をたにゝほへ人のしるへく

良岑宗貞

同

花の色ハ霞にこめて見せすとも香をたにぬすめ春の山風

人丸

万葉
[illegible]奥山の[illegible]

貫之

古今
むすふ手のしつくに濁る山の井のあかても人にわかれぬるかな

[illegible]
[illegible]

無名

小町

古今
思ひつゝねれはや人の見えつらん夢としりせはさめさらましを

作者可尋

万葉
[illegible]白妙の袖の上に[illegible]

無名

古今
君[illegible]

元方

古今
年の内に春ハ来にけり一とせをこそとやいはむ今年とやいはん

躬恒

[illegible]
[illegible]月影と[illegible]とやいはむ[illegible]とやいはん

忠岑

古今
鶯の谷より出る声なくハ春くることをたれかしらまし

中務

拾遺
うくひすの声なかりせハ雪きえぬ山里いかて春をしらまし

無名

[illegible]

兼盛

拾遺
[illegible]人の[illegible]

淑望

古今 ときはなる青葉の山も吹風の音にや秋はきゝわたるらし

能宣

拾遺 紅葉せぬときはの山にたつ鹿はおのれなきてや秋をしるらん

同人

風雅集 花さかぬ常盤の山の鶯もしらぬ時をやときとなくらん

基康親王

鶯の初の子の日こそうれしけれ君にひかるゝ松のよとせを

能宣

拾 千とせまてかきれる松もけふよりは君にひかれて万代やへむ

檜垣嫗

拾 年ふれは我くろかみも白川のみつはくむまて老にけるかな

重之

後拾 ちとせへてもあはむとすらんいかにせんあはれ常盤の色もかはらす

無名

古今 かひかねをさやにもみしかけゝれなく横ほりふせるさやの中山

左衛門権佐宣孝

新古 かひかねを見れはさやかにもえこそとなりぬ常盤の色も見え山

貫之

拾 松の衣きつゝなれにし川岸のあさ風寒み秋そ来にける

道綱母

新古 松の衣たつねて人の川岸にいさゝかもまたぬおもひ哉

無名

古今 我見ての山さへ今は老ぬらむ袖の色さへ時しなけれは

同名

拾遺
人しれてうき世の中をなけゝれは衣の袖のぬれぬ日そなき
貫之

我宿の物なりなから桜花ちるをはえこそとゝめさりけれ
花山院

新古
我宿の桜ハかひもなかりけりあるしからこそ人もみえけれ
同名

拾
杉たてる宿をそ人ハたつねける心の松ハかひなかりけり
赤染

後
我宿のまつハしるしもなかりけり杉むらならハ尋きなまし
同名

新拾
さくらはな人をかくしねさいなさ雨さ降くの三月雨見ゆる

拾遺
須原鹿の住かハたかねの山川の浅くしもなきつれなかりけり
貫之

古
乃れ人とおくる秋なれは奥山の紅葉ハよそに見るへかりけり
泉式部

しらねとも内の人をまつとしそ待つことに思ひしもそまれ
藤成国

拾
秋の田のかりほの宿にともしてなかりけるへくもありぬへきかも
同名

秋の田のかりほの庵のまつ程にもるとはなしに袖のぬれぬる

拾
あまの根のなかくしもかなしきのよの月をみる人のいつくもそまさる
長能

同

能因

烽の枝をとらへしわかれめのをちかた人のいまやこさらん

兵部

政値

立よりてとまるらむむらさきのゆかりの花にわすらるゝ

同

定頼

あさまたきいつちの浪之打川のしの[illegible]の花

同

時見綱母妻

別まてし袖のなみたをうつしても恋しき人の[illegible]をしれ

後拾

小侍従

我身にもかきりあるよのつきせぬはいきのをなとゝ思ひぬるかな

同

喜言 之イ

いつもかくたのむと聞し夜半の一声のなりけり

同

伊勢大輔

こよひたにきつゝなれにしほとゝきす人まつとしもなくや一声

同

貫之

都出て山の端にいる月見れはかたふくかたに我もゆく里

後拾

橘為義

こゝに小倉の嶺の月影もいはの上にをきまて

新古今集御時

素性

うき山し雲の上人はれてよのなかの月とみるらん

後拾泉院春宮御時

良暹

うき山し春の名をとめてよのなかの花とみるらん

後

素性

伊勢の海雲井のはるかなかに遠き浦のこのあまのつり

金葉
経信卿
鈴鹿の雲路は小田をもこえぬらんよそに見えける月の空

雲
式部
まことに人をおもふに雲井あさけの桜さり

拾遺
源縁
山桜雲井の三海ゆへ春の心はおもふにたらへし

拾遺
深養父
川霧の麓をこめて立ぬれは空にそ秋の山は見えける

三条大納言
麓をは宇治の川霧立こめて雲井に見ゆる朝日山かな

拾遺
長能
月くらし小夜の嵐に吹れてもいる嵐山の風さむけし

今
凱季卿
あらしつくみむろの山のもみちはいたにかゝる錦なりけり

千載
平基衡
紅葉のうへにたてる竜田川しからみかけてかひそなかるゝ

今
藤基俊
嫁（ヨメ）のたつかはしもみちはしほにそむる

同
経信卿
みむろ山もみぢ散るらし旅人の菅の小笠に錦おりかく

同
清輔朝臣
青羽山紅葉ちるらし逢坂の関のとよりに錦おりかく

古下或本
人丸
あしひきのみむろの山川の瀬の心にもみぢ葉流る

無名

右 あふ坂の山下風のこゑきくはなたれ心にはせさらめつれ

作者可尋

右 音羽山たいくとせをたきつ瀬の青葉かくれし鳴ぬなきと

無名

右 くらの川岸にうつる岩波は青葉かくれし鳴ぬなきと

同

右 さゝの葉のみ山も川は流れ来て去りしあたりにそゝきたる

敦忠卿

左 ちゝわかれしをみるに流れ来て去りしあたりをたつなむ

行平卿

右 こゝろをも風の白玉みかきてよるは河の波かくるゝ

無名

左 杖ついてたにを霞みわけなくてよるは河の波かくれ

同

右 なそともとまつるとおもふて何とおもはぬそ人のこゝろなりける

高光少将

作者人物 なそともとまつるとおもふかな荻の葉のそよくをもねらん

無名

左 我はそくまつるの峯を眺めしそれは白雲とかゝるらん

同

作者 思ひおそくまつるの峯をなかめしはかくてある常にかゝせむ

頼慶法師

同 小庭にはまたさしかくれ松の下かけの氷をとかしまたけり

陰陽和合

たゞ緑の〇こゑの青葉まてしのびわかれ水むすびにつる

廿三 一物異名 寄十二月名 略抽要

天 あまのはら　日 あかねさす
雨 しぐれ　月 ひさかた
樹雪露 しら　風 あらし(とよはた)
山 あしひき　雪 うちしぐれ
河 よしの川　地 あらがね
塩海 しほうみ　峯 つくばね
道 たまほこ　野 むさしの
東坂本 あふさかやま　高峯 あまそゝる
麦 さくむぎ　海 わたのはら
水海 みづうみ
巌 よゝのいは
庭 みかきはら
京 こゝのへ
内裏 もゝしき
春 もえわく
朝 あさひこ
時 つかのま

暁 しのゝめ　朧 おぼろ　草 さいたづま
萱草 わすれぐさ　花 さくらばな　菓 このみ
蘆 なにはぐさ　鶯 もゝちどり　露 あしたの
麻 さくれ　猿 ましら　茶 さゝ
蛙 かはづ　蜘蛛 さゝがに　神 ちはやぶる
帝 すめらぎ　東宮 はるのみや　中宮 きさいのみや
大臣 あきつかひ　中少将 ねこそ山　衛門 みかきもり
兵衛 つはもの　男 をとこやま　女 をみなへし
婦 わかくさ　下人 しもびと　賤男 しづのをのこ
盗人 しらなみ　別 きぬぎぬ　一言事 いひこと
夫 わがせこ　書 たまづさ　筆 みづくき
庵 はしたれ　和琴 あづまごと　酒 ひさご
少方出集

人和(?)あるへき

正月 むつき　たかきいやしきゆきかひてむつれあふゆへむつひ
つきといふをあやまれり

二月 きさらき　さむくてきさらにきぬをきれはきぬさらき
きさらきといふをあやまれり

三月 やよひ　風雨あらたまりて草木いよ／＼おひしける故
いやおひつきといふをあやまれり

四月 うつき　波流(ウノ)花さかりなる故卯の花つき
といふをあやまれり

五月 さつき　田をつくる事さかりなれはさなへ月といふを
あやまれり

六月 みなつき　農の事みなしつくし終ゆへみな
しつきといふをあやまれり　一説みな月
此月は暑さつよくして水の泉もかれつくる
ゆへ故みな月といふをあやまれり

七月 ふみつき　七日たなはたにふみをひらきて梶とひらく
故文ひらく月といふをあやまれり

八月 はつき　木の葉おちそむる故はおち月と
いふをあやまれり

九月 なかつき　夜なかくなる故よなか月といふを
あやまれり

十月 神無月　天下の神みな出雲の国にあつまりて
此国に神なき故神なし月と云をあやまれり

十一月 しもつき　霜しきりにふる故しもふり月といふを

十二月えんを 西の海まつり
傳と云る西佛名をよむ三よはあれば
経よみを專西水無世は志れ故師も
せ月し以つまるゝやまわり

古歌詞

やすみしし 渉年し わごおほきみ 渇者し
そらみつ 鋪し あきつしま 両腸し
もゝしき 班し あきつけ 旦開之 みづかきを 玉開之
しきしまの 盤之 しきなく 粉帰し
ゆふづくよ 夕行裾之 いはまふ 角し
かりこもの 刈標し かもまを 種向し
おとこれ 樹尉し まくらけ 秋降し

月よみの 月よ始之 ゆふつゝ 夕影し
さゝなみの 濱之 ほかつく 盤貫之
いさなとり 長振之 まなく 随之
あやにわし 黙然不有之 さなく 耳帰之
もたに 勝之 あさくもを 天雲之 又曇雲
かほそ 末枝之 これ 末之
これに 木積之 凡二是 多豊暦之
かみかりの 神楽濃之 みまふ 多罹之
こもりし 多沫し されし 岩之 さぬれ
あひき 納川之 あさかぜをあさこともいふ

已上廿七萬葉集

たのしきて ともしとのむ こゝろもかせて 鷄有りて

さよふけ　小夜ふけには　ゆくすゑ　さそはるゝてに又はあきまろてに
ますかゞみ　ますかゞみには　たまくしげ　根には　見には
みむ　尋には　水には　みなかみに　釣舩に
さしのく　侵には　きよき鳥には　色　うらなきには
山のみ　うつろふには　うへて　うゑて
さかゆく　さかゆるには　人よの　人よかれには
あけそめ　秋のあけぼのには　みよそちて　あけぼのは
待つ　名をまつには　さしまつ　さまつに
かぜ　へつらふに　まつもとつ　さきつに
わすれ　そなへるには　きく　きくにはれには
まよふ　たえてには　ことく　本草には生田の
おつさ　本草の名には　こしつれ　さきてには

しくれふる　紅葉には　折こし　晴には又白雲
このまれ　木の葉には　晴には　まよひぬるには
山風さく　やさしくは　おもしと　おもかげには
嵐て　梅にはうつろひ　うつろ是　つゆ梅に
うつろし　うつろし　うつろし　うつろ是には
たゞする　こゝろあくきとも
あはれ　なかしきには　ゆふかほには人のかよふは春には
あかけて　まにかよふには　朝なけて夕なけて是には
きえそ　露にはきえてぬるには　ぬれそて　おそて是には
のへ　野には　万葉集に草としてのこしあり
ゆきけのみ　雪消水に　又雪けの雲は消にはかれ雪
あらく　佛神にたてまつれには　ありしかへ

うつさ　うてとふせ

廿五 一出萬葉集所名　前ノ通名不注

山

さほさの山　神山　みもろ山

そら山　こせ山　まてて山

こし山　まつきき山　たかみ山

きさ山　もろ乃山　はやかま山

ゆくこそ山　のちせ乃山　かくらの山

志子山　みかのの山　ゆふれ山

たつの山　うきの山　きさやし

あとさき山　あそり山　かくれ乃山

いもらく山　いさみの山　志たり山

とませ山　志なの山　くさの山

うしのおく山　わすの山　おふら山

おとし山　おほくら山　まきもく山

わさつき山　いさめ山　つせの山

こもの井山　おこし乃山　そらひの山

たかまと乃山　ふかのまつの山　たゆらきの山

あなし山　人えみ山　うねひ山

おほよの山　二かみ山　ふるせ乃山

いさこ山　ぬまの山　やのくろふ山

かつらの山　こしゆる山　えふく山

まとての山　なら山　たかやま

ゆふ山　くらい山　あさくら山

まつち山
ひえ山
みかミ山
なくさ山
たち山
こはた乃山（ヤマシロナイ）
あらち山
ひらその山（ヤマトニテ）
はつせの山（カスカノ）
おふせの山
あさか乃山
ゆふさ山

すせの山
ミも山（ミムロナル）
安藝
せの山
神なひ山
かつらき山
いさへの山
あまこさ山
さミの山
いもしろ山
あしから山
うらひの山
奥州
ことら山

かさの山
こらこせ山
いなの山
あさ乃山
のとせの山
ちさと山
たかしさ山
めと山
あらの山
みかもの山（下野）
おひく山
こ乃もと山

よし乃山
あしかき山
いなり山
ことの乃山
おさへしま山
あをけ山（ミヨシノ）

峯　付嶽こ根

あらなつ○（ミヨシノ）
ゆしのた○（シロタヘノ）

坂

ゆきあひのさか
やうみさか（ミタフス）

あつミ山
まいけ山
せに山
たかけの山（ヤクスミ）
みよ山
いさきた○
よしのたけ
かるあはきさか
あるかはさか

とも○山
をらく山
くらふ山（ハシタテノ）
あらし山
をくらミ山（シフタテ）
ゆつきかたけ
いこまかたけ
くせ乃さきはつ（ヤマシロノ）
てこ乃よひさか

うきひのさと　かこ乃おさと

郷

むろひのさと　あしかれさと　ゆきてれさと
さのゝさと　たけさと　いろせのさと
さゝ乃さと　まゆこのさと　わとこのさと

杜

いは瀬のもり　いくたのもり　ゆすゝ乃もり
うきさ乃もり　さくさ乃もり　うねて乃もり

野

かたの乃との　志め乃　志め乃の
くるゝの　よこ乃　そき乃の

おくの　かくれ乃　わくのあかめ
あかの　いれ乃　おほさとの
わしさの　志さ乃、　あふしも乃の
やさの、　とさゝ乃　いかひの
かりもれゐの　おいわゝさ乃　いそ瀬の
は婆の　多多て乃　しく瀬のもりの
やそのゝ　あをとさく乃　うそそらのゝ
いくくの　ひくき乃　おほかの
わものゝ　うのおい乃　わかれの
あさはゝとの　さゝおい乃　きくつの
うられおほの　わさも乃　かくちれとの
みゝしの　そひ乃　あの

原
ゆきまつはら　あさのはら　たかまのはら
あはつはら　ふとのはら　ゆはら
よさみのはら
海　附迫門
にほのうみ　ゆとのうみ（丹後）　みこ乃うみ
おくのうみ　ちぬのうみ　あしつ乃うみ
いかこのうみ　あこのうみ　わかのうみ
まくれのうみ　わしろのうみ（タカシノ）　みるめのうみ
い川のうみ　あかしのせと　さつま乃せと
江　附湊
まくれかは江　みまくさかは江（イキノ）　たまえ乃江

かつ江　あこは江　なにはのはし
ゆめのいりえ（カツシカノ）　たこ乃入江　いなさかは江
こや乃かは江　いそのかみ　こまつは江（カイ）
たかれはしと　やつのみなと　なにはほりえ
津　附泊
まつらの江　なかつかは　わかえ（江）川
まつの江のかは　すみえ川（アツサユミ）　のこ乃ぼり
浦
ゆらのうら（コロモデノ）　なたかのうら（名高）（ムラサキノ）　あまのうら（綱）
むこ乃うら（兵庫）　さしのうら　ほそえ乃うら
けひのうら　うるめのうら　いらのうら
たちれうら　みぬめのうら　せとのうら

あみのうら　わかれうら　ちゝのうら
しのうら　ゆらかのうら　かれうら
ゆのくうら　こゆ乃うら　志かのうら
わこのうら　なこ乃うら　さいかのうら
とミのうら　わこ乃うら　ひきのうら
あつそのうら　みか乃うら　かちのうら
たゝのうら　ゆり梅のうら　いつさのうら
ゆなのうら　のさか乃うら　たゆねのうら
あこかのうら　うきた乃うら　かゝミのうら
まゝのうら　志つ乃うら　たきのうら
ゆらえのうら　梅せのうら

濱

ふきあけのはま　こゆるのはま　なるみのはま
あこきのはま　こくのはま　わかのはま
たかし乃はま　きくのたかはま　こゆるきのはま
ちやミのはま　梅かはのはま　しらのはま
まつこ乃はま　いそミのはま　かミのはま

江

かしまえ　わゆるえ　わたのえ
たまつえ　みつそのえ　あらきえ

橋

かつらはし　なかゝはし　さのはし
いへはし　あつはし　とつはし
みつのはし　いろはし　みなせはし

こゐのこしま　かつらしま　かさねの乃しま
ちひしま　風乃しま　ゆきしま
あへのしま　うけくしま　あをしま
乃しま

崎

みほつさき　神さき　みよつさき
からさき　やのさき　みたしのさき
ゆれさき　たかひめのさき　はま乃さき
かゐのみさき　まつれさき　しき乃さき
あふ川のさき　あれのさき　たねのさき
としまのさき　のきみさき　みそかのさき
みつのさき　たこのさき　みほ乃さき

さそ乃さき

河　付 渕 淀 河原

乃と川　みなせ川　乃をを川
きさのをかハ　あすか川　みたらし乃川
玉乃井川　うき世川　ゆらも川
み梅かハ　わしき乃川　いそみ川
むろのかハ　なつみ川　かうらひの川
わきかハ　あたせ乃川　ふるも川
いりさかハ　柳か川　さかね川
やまとかハ　ゑかき川　むつ珠川
三海とかハ　ミつ川　たつ川
うさかかハ　玉か川　さとた川

志みつかは　いろつかは　いなむのかは
むこかは　ちくまかは　たましまかは
のきかは　わきみ乃かは　宇治かは
くゝかは　わう乃かは　さ保かは
紀のかはと　そうちし川　みのかは
そう乃かは　とゝろかは　紀乃かは
ゆきのかは　かくのかは　おいやかは

池

あま乃池　そうこ乃里　由のゝ池
うきね乃池　かうちの里　舟乃池
いくれの池　とやまの里　かれの池
え風も乃池

井

さゝし井　ほりかね乃み井　ゆそし水三井
由のゝ井　逢さか乃三井

橋

いつ乃大し　由のつきはし　さ乃ゝ梅根はし

里　付村

かたゝ乃さと　やまはしの里　とみなし川さと
神なひ乃さと　うち玉の里　いつき川さと
みとろ乃さと　うまれの里　ゆへもの山

雑

さかち　あさまち　みうしち
乃ゝ三のさく　もとさものたね　柳三の三井

いろこのさきり　ありあけのこゝろ乃まとゐり
みなつき　とし毎の沖

奥義鈔中　釈

後拾遺歌卅八首

一 かまへてを　二 花乃あるじ　三 たつかり
四 こゝろのまゝ　五 なほ得くもを　六 ことわり
七 萩の花をり　八 みをとめこそ　九 かひぞ見えを
十 小川のわたりの 有 称とさしも煎錦鈔　十一 してのつたき
十二 われたり　十三 さみだれも　十四 ちとせしつの人
十五 はれ乃ころし　十六 いつき乃山　十七 たまさか乃をい
十八 こゝろ　十九 あまのとかは　廿 雪のいきならき
廿一 上陽人 付陽炎花 まつかし　廿二 王昭君　廿三 うらかれたり
廿四 かゝ　廿五 むかしてき侍る　廿六 山鳥頭白。 かわ
廿七 郭公はさきちるのこと　廿八 久し まへ青人

廿九 たちとせらし　卅 くらつくり　卅一 おのへのまつ

卅二 ゆくきうミ　卅三 かくてよ　卅四 うらのそなつ

卅五 雨のよしめ　卅六 うとんきよ　卅七 かつけ

卅八 いろミのわか

拾遺歌廿一首

一 さくら　二 かこえつれなさ　三 さそふとき　有さとは二とけ玉

四 やましろの　五 菊露わかとあれ　六 みちよのとし

七 わすれのこゝろと　有つれもミ春衣　八 わかれのかや

九 いくとせ　十 風よう秋　十一 いつれのいろ

十二 また風わすれ　十三 いさむ　十四 とそのとつこ

十五 むらさきの雲　十六 そらもなく　十七 かつらきのうミ

十八 たきつなつ　有うしさき　十九 足 ひとつのかは

廿 くもとして　廿一 たえてこれ

後撰歌卅九首

一 みのしろもと　二 うつさこ　有わしひすめ

三 風かきのちかの　四 わしひさの　五 よしのうら

六 かつこい　七 さきのうき　八 そよみきもはく

九 乃と濱　有ちりし志のわや　十 むさしの

十一 まつくかこむ　十二 梅くさの梅つきたのミ

十三 いつとりを　十四 きそにつて　有すまみの浪

十五 やはなし　十六 鳥のそら孫　十七 わしはく

十八 あれちより　有け夜　十九 わすれの錦かけて

廿 くれくもり　廿一 おかしミ　廿二 とくとつくい

廿三 たつ○八おれと　廿四 うくさし　廿五 いへ木

廿五 梅かことく　廿七 [illegible]　卅八 [illegible]
むいあせ　卅 [illegible]
卅一 [illegible]をとて[illegible]　卅三 [illegible]　卅二 [illegible]
卅三 [illegible]　卅六 [illegible]　卅六 [illegible]　卅九 [illegible]
四十 みたしとれ　四十三 [illegible]
四十二 [illegible]　四十四 [illegible]人
四十五 [illegible]　四十六 [illegible]いとく
四十七 [illegible]　四十八 [illegible]　四十九 [illegible]

古歌四十八首

一 [illegible] 二 たてれと　三 [illegible]
五 [illegible]　六 [illegible]
七 [illegible]　八 [illegible]

九 て[illegible]　十 [illegible]
十一 [illegible]　十二 [illegible]
十三 [illegible]
十五 [illegible]　十六 [illegible]
十七 [illegible]
廿 [illegible]
廿二 [illegible]　廿三 [illegible]
廿五 [illegible]　廿七 [illegible]
廿六 [illegible]
廿八 やるとのた[illegible]　廿九 [illegible]
卅 [illegible]人の[illegible]　卅一 [illegible]
卅二 [illegible]　卅三 [illegible]

卅四 うちとけのかミ有たとへのかミ　有　むすめのかミわらへのかミ
卅五 おりの花河　卅六 かくさくミかし　卅七 花川ちまち
卅八 やまのふれ　卅九 くまつけ　四十 はくとうミ
四一 いそのかミのかミ　四二 たのむかミ　四三 かりいち有たちなる むすたち
四四 かりもとて　四五 まつりこく女　四六 ここのつの梅の 雅行
四七 こつりの河内ミ有 ひとめくこまりれの詠ミ
四八 ねとりのあれし有 そてのもとミ二度つまれく 二月と見へと

合百又拾六首

後拾遺

春

一 いかにしてさかれ年と鶯の聲のきこえるにハ
是ハ拾遺ヌつミならねとこのよしハ鶯乃聲
とれものまつかなりとかと云寄ともすいは
よあれなり

二 古里乃花のおいのもとハいつたふしきれともとハ成し
桃李不言下自成蹊といふ事なれハなし
それハとまりけり季康と云し武士のなら
なしれとれいふとよろしつと德おれハね
あめうれとまふ人の通ひぬよ桃李ハね
いつとなきれと人のかけまりますて見へれり

たえしらぬさましといふへし桃李よわ
てたとへ花にも紅紫の花をそへてよみて
むねのまた見えたり紅とおもふとも非なり

菱

三 秋の野の萩の末葉にをく露は見れは風のたえまき
ぬれるとも菱をとりて秋の水をよくおもひれは蓮と
なれるといふ菱の花に菱葉は風にあるる露は紅花
ぬれたりもとの月いつれ菱の越葉をはもと小
露落して夜のあきの野の中
ありとそれをも露をもひかりくらへは
是心はあるもの秋は夜のまよりもゆめは露
をそへてもとそれもかたく露をしたみてまさ

さりとよましさくあわくやゆめく又重て同
百首あと
秋の夜さの露おもき枝にかけて見るにも紅の花をさへ
とるの見るに合をすかれの紅かり哉
あるあらそふ人こそおもひゆれ
夏の夜も涼しかりけり月影は白妙の霜とみえつつ
月照平沙夏夜霜といふ心也

棘

浅茅原ゆくへもしらぬ風のまにみたれて残る
玉まく葛もくたけつつ玉の露そ小雨
哉とそ見えたる
天の原関の枝をよみてなきを梅ちよ三条院らつる哉

まつらとは小ゆらと云ことはたゞ月のみをいふ
うつりされからいさくまうてられてそれ小夜ふけ
ゆく　清輔抄に云
みなくの海られ鶴との咲あへわたる道まつくねらは
光は何ら雨るわたるとみちのくかくよららと云
ふわりがられ馬子云也

七 はさゝり家持卿の歌よりかゝるやうに成れる歌の詞なり
是は催馬楽の詞なり　けのこ歌はのちとあ
りう歌の心をうらと云詞也　文萬葉にも
秋萩は咲ぬれあらわてる歌の情人卿は萩の花をも
あてもあり花のちりたれからぬ菊にて
ふりけれ　文萬葉にもよれなそとあり　同集云

すゑ（小よ人の心あつて云歌はおもへかもえ海の歌なり

八 とよみ鳥しきさはりと心なし云川とみなれ松ゆかて雨のあれ
離謂水心濃艶條而浪愛急ッと以上
みとなれし

九 あとはなを見けり菊むし白菊の花を植の菊しおられし
是非花中偏愛菊此花開後更無花と云詩

也

十 わすれたゞ花の色とれなとは錦とわする紅葉とよりてとまき
蜀江濯錦といふ　袁郊有
花のもとた〻ゆくたゞ今前月は錦と見る花も名とみて
とわれ寄とは思ふのなりわるはあさうき
錦の花の色されしとまへあうくたらう

きゝとりいふもしくはあり又是錦鱗といふ
ふしありの二説あり一つには魚鱗はあみめに似
たり一つは是錦を織るに其あやを錦
といふとも文のなるへし

十一 君か代はかきりもあらし三笠山ゝゝへ（か）の猶ゝかくしも
　　賀
德是北辰椿葉影再改と云文也古有大
椿者以テ八千歳ヲ為シ春ト以テ八千歳ヲ為ス秋ト
これは右の椿やちよをとよめり

十二 君か代は無ちりひちの白雲かゝる山となるまて
泰山ハ不譲土壌ヲ故ニ成ス其ノ高キヲといふ文の心也
又古今序にも見えたり

十三 君すめはちとせにひとたひすむといふ黄河の水もゝとけかるらん
明王時者黄河一清と云事のあれはよめり

　　別

十四 わかしはおほくの人をおくりしを神やあれをおくらんとはいかにせん
楊岐路滑カニシテ我送人多年李門波高シ人送我
何日ソと云心にあり

十五 たきゝつき雪ふりしける鳥辺野は鶴の林のこゝちこそすれ
薪つきしと云事ハ仏化縁つきて入滅した
まふと云是よりよみて以後ハ鶴の林と沙
羅林と云仏の入滅の時木々の枯て白鶴の
色に成たりしより鶴林と云也

恋

十六 ゆくとしたえぬは梅さのさうしと尋さうとみえしハかにも思ふ事よ
梅さの花は昔ハ火のとほりたれハくちも
逍遙草ハ春と雪か物かれとも人をかりかな

十七 あさかほ涙よたてゝしれハるまさ乃第の旧花をすれし
足ハ羅馬ふの心ハしりくの二首をともにもよ
そうれてうこくかまれいかれもよりを能く乃
をともふしたされしたなと云寄よとあり

雑 一

十八 ゆかハしそわかなとこゝめやまに雨のとはかハことよるなかし
信濃の國ありあきてゆきなと云ふよるへき
きのつくあれ手のことゑ乃よまハにもいはひ人あれハ
かこ乃ことく行ねれハ山里の木のもと見てゆき
ゆかれむくとわかりとふにれとわかねかふまてしとあり

十九 おなし人いまよりは山里とをそこととたつぬる月日乃ほときにて
伯牙鍾子期といふハ二人の琴のよきあり
ゝ鍾子期きゝわけ何そ伯牙ひきてきかせし人
われはしらぬわれハよりかくといふ琴のよきた
ちて来れさるかしよしとあり

雑 三

廿 君か○つれ雪乃ふりしこのまれ物なかりかりけりとみえし
雪中ニ放馬朔ニ尋跡ヌと云詞の心也

廿一 京しくハ春かもと人と見なれてし京の雨にかはさ雨しけく
文集ニ蕭々暗雨打窓ツ聲と云ふにもとあり

是ハ上陽人のおもひを言家よりしるしけれはみゆるの
内上陽乃人十六にてめされしかとも楊貴
妃にそねまれて六十迄みかとを見たて
まつらて宮にこめられつゝ秋をあかし
し春日を暮し燈の影暗き秋の夜の長き事
をなけきて上陽の宮の内にふるきをなけく
小なれともうつくしきこの楊貴妃を愛して
みかとのまつりことをも忘れ給へれは天下
らうまえおこりけるを楊貴妃のあにゝてありし
安禄山といひける者楊貴妃をころして
まゐらせみかとはなけきのあまり位をさりて
姉妹の行をも知らす悲しみになけきよ
色衣乃葉つゆの草むらにまよひ給ふ人は日を
数月日を送られけり方士と云人蓬莱に至
て楊貴妃に尋あひぬるみかとのおほせことをかた
りけれは御かんと思はれけり楊貴妃のかんさしを
つかはして是をみかとに奉れとてそ参られ
けり方士かくて帰りてつたへしかはみかと
おほしめされけるに又こゝろをかはされける
けれはいひてかたりきこえしとは楊貴妃かいはく昔
七月七日長生殿夜半に人なかりしにかたらひし
ことは天にあらは比翼の鳥とならん
地にあらは枝をつらぬる木となりこゝにあらんと
御ちかひとおもひけれとも御かとのおもひ夢しき

韋荘はよくつなしいなしいへり
拾遺集寄なりと云
あかしとやいはん○とあるを天下かと混濁て思ふとよみ人
道済寄なりと云
昆崙かまつとしてこれは海中の魚に縁をとりて棹く
楊貴妃のまつのうちし野郎とよむ○かおりしつ刀人
たとへはれ王にはおちけれ長恨歌とらいは是そ
拾遺集寄なりと云
むかし鶴雲井に鳴声を聞くて海にてよいは紅の上下ををとる
けるしとこのまにて昆にて上なれはまつ下は青士
廿二 刀利天は鏡のうつくしさのかはかりさらをはくらゐしやるを
ともかしあい異国の王の妻にいはへ御かんしとよれ

かはりて和親のちきりとて人にたまはる女御
を一人胡国の王にたまはんとせられけるに三千人のた
かは三所しとうして絵をかゝせ○は是くらゐに
れかりしあをとなくかちちとうつしあまたの
ら人とつかはえてむかへしれかは二千女御かは其
しかおもくの今とそうをつかはちとうつく
くしくとかれけり王昭君といひけれ女御のた
まくれあらいくつなれしれくうちとなにて
絵ひとあしとせさりけれは是一人をおとしけ
りかくれいかりたゝ是一人とて胡国へつかはせ
ことくわりしもかしらしまかりしとそれ
廿三 いそのかみ花の枝をたちてあはれなるとよすれなるたる

法華経云不覚内衣裏有無價寶珠乃心

御道を入とも〻乃たまをありと志らすりた

〻ゆき

雜

(廿七) よろつよにあはあ并れ〻やさハ三乃人をハのかれなかるく

聖徳太子をいふ也三乃人をハ不よ操たて後

つり哥云文殊の寿よりおこし尚おとこし

されたる太子の志ょきこ得し尚下知られそ

乃かゝまとこそ

(廿八) 住吉の神ハ和哥に道を守らしむ甚かし給ふそかなしきをきれ

あま天皇をいふ也うさ和よたて尚之位よ

おりし御を継しおとくおつこ其まれ和のよく

わくおそれの可らかれ読之文經教とく生死

海をわたるれ和哥ハたら〻般若經ハ竟見

室をとく故なりうさ和し之

此經とく佛神のよろこひわつかなるとあか

まくとおかむるへしと後をなし尚之

(廿九) 山のをかしらともろくもそうのま讃ら〻時や〻かわらむ

燕乃太子丹といふ人秦始皇乃時秦よ

ゆきりて本国ハ讃人をとられたとみし捻れ

さをうちそのかしも白くなりなさハ角

のおひたらん時ハかへさんといふのち風

梅丹心にはうれてそかくハたちまち

うちのしらおつくなりてハれハとかへり

なれみてこゝろもしれぬものゝあれ御屋のおもむき

卅七 月と白ひもちらむにむかひとこそあれ人々見て禅林の御堂の

遺文三十軸々々金玉声龍門原上土埋骨

不埋名とある詩の心是は孫供奉といひし

人の天台山の賦とつくりてえらむあまり

とゝしも今金玉のひゝきのゆかしかりし文

ともほめられなしとなかくれなくなき

卅八 せしみぬる人の玉章をときてそれなく此涙を

昔嚢誰知我白頭偶懐君将老弁涙

一夜濯故人文と云詩

雑 文

卅九 志のひねのあさにかけそめくゐらせいとたえす吾身のためにも

是は古今ふうかれしさゆふそのほかにもこの山の

なとと思ふにさそとおもひいふ寿を

思ひおもひかれし事も袖につゝむ

心をきてこのあはれみゆる袖をせ

ならしといひし

卌 よろつ代はきみかためといふ弁つたらはこのちとせによ

卌一 たきことたへかぬるを青きてしよ玉の声すゐるをあはれ

是は六条左大臣のこと相方弁といへる人の

寿してけ左臣は高名のひいのさし絵の声を

とよ松の声にかよふよいひておのへときけ

てこゝしの声に思ひあつほとよるさこ松の

おのへゆへまつにかれぬせ

廿二 梅かゝる三井たちのひのまろもあさ山の心たくともみし君見れ

是ハ山階寺供養の僧宮作殿すた

てまつりし時ぞ弘法深如海の心見れ

海乃誰をまつ孫をも人たくおもはさり

くもたてうしとみれしいふしよめり

廿三 あらし吹くわかねの社とふる也しものきさ海見れ

羽中使しかをとゝきよめり隠遁すと

いふこの絵をしれはしくをるつかうとも

ちかれ殊也石清水と排 羽上萬能時

とくまへり

廿四 いつまでこらくまで鶯乃さえ作のかしよハ梅を行

楽乃きつに春鶯囀といふものなりあり

廿五 いかにもうたのよ雪とふり帰てあらそさえてつゝあ

時あそさしつれとよめる

羅馬楽ありあはくさや乃かさ内と考あと

いふうのなれはまりとかハむさしかはとふ

祢祇

廿六 うち儀ふるきうたたこゝろもよくまさて神乃人袖やむさのゑうに

播河の国乃うし後ふ神女のとりてまへ

しおとしなつまありいふそてはしよあれハ是

野叟のこてまつひれこ作れ

廿七 あそみのいきかくも祢のみそうしかゆきはあからこそ遠里

うこそえ河の鈴を寒とかうてふみあはすめ行と

ふとあり画へとまそて日乃あるわれこなれ

由へてもいふされし世の中をたとへて林の
なかれてもいふくらむとあり
卅八 と見えれたる車にのりハ神さいら三乃舎ふれ給へさ
法華経乃三車のたとへ乃心ゆいら三の舎ハ法
花経の我ハ乃りのみちのふかさをいふとあり
経文を説りえてとある寺に志るさる

拾遺抄

春

一 桜乃色に我身ハふかく成ぬらん心にしめて花を惜めは
此桜乃色をよむ人先達の説にてハさとしら
わとは詞わくなりてあるハ桜乃色ふかくと
よあれしし由緒しいくしきこ所さくら

かりと桜をたつ○とも見れとよいつも
と見れをたのむとこれ志てかたかのすとい
かつ文古今めて遍照の寺の詞ゆたゆりよ
北山にゆつまつりぬれとわれハ桜所をとめよ
よろこふかれ中比の人乃哥あり
京から花みの山とゆふさたの桜乃きかる人の見けん
ともめつられさとい詞の葉ゆかりつると

夏

二 神まつる卯月にさける卯の花ハ白くもきねかしらけたるかな
神まつるとハ卯月ハつきて○の其まつりはせよ
ことに○ゆへ豆をもいはしてくもまつり民其みと
神とことのまれかしなへてあり

三 さらにあめわかひこをつかはしけれとも返事申さ

ゝりけれはまたたかみむすひの神の御

孫皇孫命を葦原の中津国の主とせんと

おもほすに其国に螢火光神および蠅

聲邪神あり[illegible]と云ける草木みな

ものいふ[illegible]この神の[illegible]

とある[illegible]五月蠅なす[illegible]万葉

にも和儺[illegible]といふ[illegible]

衆敦成雷といふ文の心也とあれは[illegible]

ねえる書に[illegible]

[illegible]

さとりて[illegible]

いさくと[illegible]

[illegible]寿云

山里[illegible]

[illegible]

稲すり

除

秋菊の[illegible]

仙宮の菊露は[illegible]

賀

[illegible]天の[illegible]

山嶺万歳といふ[illegible]世の[illegible]

[illegible]史記

二 みちとせになるてふ桃のことしより花さくはるにあひにけるかな

漢ノ武帝ハ仙の法をこのみてありけるに
七月七日西王母といふ仙人紫雲に乗て
きたて武帝の承華殿に来れる時に東方
朔といふもの御前にありける時かの母屏風の
うしろよりのそきみると不死の薬といふ桃をそ
とりいたし桃七粒をそへて二つハ献じ五つハ
みつからくひて残しけり桃かさねてむすひし
ハ王母とりていはく是ハ三千年
に一度なれるものにて下ちに種ゆへきものにあらすと
は屏風のうしろなるをみてこれハぬすみて三
てたひぬすみたりといふ東方朔も仙人の仙

宮の桃とよめれハ王母にてもあるへしとよめる河
まつかとき鳥つかひにきたれるをしよする
彼をいふなるへし

七 君か代ハあまの羽衣まれにきてなつともつきぬいはほならなん

経云方四十里の石を三年に一度梵天より
くたりて三銖の衣をもて撫に尽るを為一劫とい
ふ まくらことはにて此衣をよめれハ天人によせ
て殿上人のこともいひたるこゝろとそ宮居
のこともをいはれたるのみにあらすとなん
いふとめてたきをよめる故に又かくいへるなり
あるひとのいはく藤のかはとかく織られたる
ことはとこそいへ海人のころもとも申なり

いはやしのこゝのまれのをりにゆらは風邪とこそありけれ

別

八 桜花露にぬれたるかほみれはなきてわかれし人そこひしき

百詠云裏露似啼粧花の露なり

ぬれしなれは人のなみたかに似たれは

九 わか山にいく世の露のなれしらん人も見し世の名になり

ゆかしへ人の青栗になれをてしありけれ

きさしともあれは蓬莱之龍ノ背になれ

山みえなきや蓬莱の不死薬の木なれて

かくりのこゝにわれもそ人ゝ心なしとありけれ

いくとゆくかへとおもへは

恋上

十 やとりしく涙の床のまくらにはしけきこゝろのゆめさへかなしき

やとりしく八十月にも涙とあるを見るへし

とはゆめとゆめとは詠也

恋下

十一 志らてハ人をねたみしやくらくへ木のはかなさ

あはれもしらぬ袖のよのかたみをたれかとも

ありて人をみてはかれ涙になれてとたる人々

ありてく人をみれはおもくいくつねとおもひける

ようしとかあれとも

十二 志らのわかれに鶴のうとふれはかのたのめしとおもひこのかた

比の志賀の都はあれにしを花は昔の色にさく

萬葉集之

一 志賀の海辺の波やさなからともに立てとハ志賀の浦を
十三 かくしつゝ秋の日数のつもりてはおのれか命のはてもあるかな
詞をいひかけてはいもせしとしゆれやうのあはれ
ことはをいひかけてはあはれなるといへるなり

雑

十七 さしのほる月の光にさやかなるハこの春のあはれ
我人の主君の下部ハ伴氏なくあはれをこゝろ
ことの氏のかきりなくそ思ふとて伴のかくなるハ
明らかにおほえなりとおもふとして云ふなる
字にはあハ君の心はれにといひて此度とハ
好むこゝろの好としいはれけるとて萬葉にも
一 ゆゝしく思ふのみあらぬ人のあはれ人神の前に

とよみて君事にいふこゝろとよめる乃なれ
又ねかひの小領小領をいふとのこゝろの
うれにこゝろのことをいふこと口にいひ
たのみたてあはれなる心にかくれにと
あさましくもかくしいとおかしこき事ハあり
また伴氏の事いふことゝなり

十八 ゆふくれの雲のはたてにものそ思ふあまつそらなる人をこふとて
是ハ愛雲の心をよめる也と后のいへる
年ハさ不あり世にある之南中記愛雲
之瑞ニ雁月ニて堯を生む雲ハ向於北斗ニ
京南風雲熾濃之上ニ到ル堯母感気ニ
枝袖ニ雲愛之て下て入堯母之懐ニて堯

十六かのみかれいをと下よたそうその菊は岸にさえこえ霧めてこゝさ
を任（はうむ）し
そうこくは黄菊を集和のみとしいふろ川のお
こなかれ名にめでもの也めの菊とこうかれをも
治られしされし集和菊うれ菊といふ也
おゝゝは一本菊は云之されしをみさえるとも
よみたれとも金ととし一本菊なりとをえる
かうれてさつしなつし又黄菊の一本こえる
てある也とそをよあり也んみさなるとも
ふつこゝあ一本菊とし云て或ふあつもと文のて
こうさとも也れてるここ傳さとよありたる
ミここえるとも君の去るここえるとと云之

向云文てろありとは花のおとふけりたいすて
えろえるしとしとさうしてこ云或からてこゝ
さとハ花の名さといふ菊の本らる書のこと
ありかへり菊の下葉とあつ名の本二梅つ
まれもくてよろえることの義ハ名也あめ
お花に侍いて　養云乃時のみ花寿よ
さハこよりよみ侍れるなり

十七いん橋のたれの研のとは我にて不名花滝さ也ろ風にて
前文和国ニ了役優安寒とはいはれをとの
中さよろうえといふめろうさ山よりの山
のあひくゝ橋けもこえんとあひて日本國
の神くふいのうふすふ也つさ小はすもを

これよりいふことハ三一都のあはくみなみの山に乃
山の昇り石の橋を渡りはじめて剣の
先らの月人もなくさみなくかりてもきこゆると
役をたりてかくと思ひて剣もいさめ
余さりしを世しるより神となりたらぬ儀道
してみると孝養したまふく役優婆塞
ときこゆる王位をすてゝ出家をとけられて修ら
通しとみてこの山をひらきて役優婆塞
のよい川の国にかゝりしれにりしつ神となりにか
達ちしたるを人まいり理不尽なる命をたゝは
孫ましきととき〇て孝ふかくて人をはなれ
りてあるもつゐにいしおほせられはい

いかりてはいさめかねさてまへるさきかけてはれけり
つゐさに夜叉となりてこれも神の言にしたかひ
あるまじき行者をつたへることなれはさらに
ねたうしたりおもふさまにけりと孝ふかみ
りしおそれたりける百丈さまの神なれば有
のいひつたへして護法となりては神と来
たりて唐一條の小角の光今の葛山ハ
縁起にかくてえりこの所にはあれこ

十八
久堅乃月のかつらもあきハなほもみちすれハやてりまさるらん
折桂（セツ）葉と云事あり秀才としハ進士なる人
をたかきと云家の風ハ葉をかたしハうたれ
月のかつらとよめるハ八種の百詠注云南

州八種樹有生月中ニ月満ニ即種生也
同注ニ月中ニ王廃アリ月満精成ニ獣廃ニ
かくされ

十九 ひかりまつえたにかゝれるゆきをこそ梅とも花ともいふへかりけれ
是ハとしのはしめのあはゆきのふれるを梅花といふへき
桜とも見えしとおもひしとはかりのはな
王の御人をわか有間の皇子世をしらせ給ふあ
山部の連のわかつかさ卿の時にしらせ給ひたり
趣あれ表さしてよみ侍し歌也

廿 しかをさして馬といふ人ありけれはかもをもをしといふへかりけれ
いにしへ秦の二世の時にしかをのせて馬といふ人ありけれは
秦の二世の時趙高といひける人のよみける
しかるに王の御いかなる威勢の程をかゝみてそ鹿
を帝に馬とてみせたてまつりし
を帝ハ鹿とこそ申さるゝに人々趙高
におそれて皆馬と申けれハ神威は恐
れをなして謀反をおこしたりし事也
日本紀にもみえたり

廿一 降つもる山路を行人のこのみつゝならはしのさとの九重にふしおこ
山ふかく経法をまなひ又の身をあれは道
ゆるぎなくかへしてあはれなりと法華経をえ
薪とり水を汲み菜をつみて法華経をえ
ありかたき昨日二の法をたつぬれは得てけり
又たきゝこりつゝ水くみつゝきかれけり

行のえくてもとい雅堂の仙宮に入ぬりおこと
久しぬまりあまたさうれたる家にありしれく
してもといへり

後撰集

春上

一 梅風雪のこの花衣うちきつる春こそ此日と知るのしれね我
まる我ありなとといふをむすて梅風雪のこのみなる
山るとも我れと謂るみのしるもるとと是
それも雪の梅なりしと入りおきされたるこの
かりけよ花ハゆれ家の集なりしと
一 山里ハ草葉の露とまるらん三れ時の衣ねむとさよ
先とこ所のしるといふ十のこのしるにるとと
おも入りなへかさこの山るとなとと云人て
古歌ナりしと

一 世の中の春の花衣の時のこの行の外は梅と衣の心
是ハ記之入りかくこの衣とよあり又この
花衣といふ我れのうちあれあまし衣なり
みやことも定め

春下

二 山ひろハいつもいさもしみのさこれ尾上の桜れてかきさん
先ハてろうさしの国の意我にかろと山乃一
の名とされたさことさとおのへとも山乃尾の
よもとえ記えの山みあしあれ寄せし文山ハ
ても是川と云我れハ日本記ありんてそうる女

帝之推古天皇の御時に河原にて
弁と梅のみかど遊ばされしゆへ也
是ハ人と云

三 春の日乃影そふ池のかゞみにハ柳の眉そ先ハ見えける
柳の葉ハこゝろある人のまゆに似たれば
かくいへる詩にも翠眉嫋々なと
作りくまなく見ゆると云よりにて池の眉
うつれるてるよし也　吾朝ニ奇云

四 柳のいとハ水に又はるなからかなる事也

夏

五 足引の山ほとゝぎすわかなかに
是ハ人の羽をきくと聞てよむ寄の題

無心海水曲と云る詩の心也
わかれし人を待つる文の心
ふくと水調と云調をなす

又 よしの川瀬ゝにさくなる花の色を
六 夏衣その月のうつるにとにて
月見れはひとつになるかな月にて
袖ぬれぬる月をみる也
とよみとしてかくよめる

七 こひわびて袖のなみたに月の影
月のうつりてちるかな月のあかり
うらみてうつる袖にも月
そわれてこそ袖の露にありけり

秋上

八 ひくらしは夕のかたとさへいへるてそのことを風になかめ
そよみるもいくといはれは名なかとまくし
とはくなからめさるへしとあれは名残
ありとはなけくるなり

九 秋くれは露をも小虫のなくこゑ哀にきこゆるとは何心なるへし
哀のあるへしといふことにてあるとも
やとこるすいかにしたしみとしるへきなり
とうしてきかまりわれといはれ
おもやせとは野辺のみなれとあらんおほく
詠ませにおれおれ野辺といてのはらし
百七夕寿一首

八 くさむらに露にぬるゝ袖も虫のねもしるしとあらはかなしくとも
とよみの風をみゆてまつぬくいさとよみ
あらそふと又云ことをふかきよりの葉にて
詠せにおとろえ白露の哀をまたそめれ
是は暮にあかれ秋をしらんといふ
ありそも内のことのはなかうにわれて
いはとよめるゝとふきはこをいはれて
なりと云へし

十 虫の音もあまた聞ゆる秋の野のむしは野への声をもしかまつは
是は古今にもしてさかの一ことをしのはしむかし
秋のくさむらにあきれとりの字をとふ寿と
おもひてよめるなり

妹中

十一 おもはくに数々たなはた節花にまさりておもしろくおかしも
さいはひおもひはなにさらにおもんおもしくに
けの花人のたましひくとさうかて見るも
さうかさうめかしくとしおもひ節花と
なし世すりよろ人をれも其人のめとあり

十二 吹風の梅のさたのいろめすしくは枕の人と浦にとおもひとて
是は立まりに擦あしあれにもうつくしなるも
おひあくに君の人をおもく心のかはくとおもひと
はなをおもふやもれと妹のたのみなるも
ていはのこいくもとわさにしてもつくしと枕
誠くれに何とも人梅く風の人と称とと

梅といふこといふて梅のきたのことに
あれおやく文枕の山とせてとかれ松風といふなゐ
はすりよう

妹下

十三 いもうとのいもうといもせのなかを竜田山
いもうとのいもうと浦なのうしてなかのよしかゆ
いもせをわたくしにてはかくしといふことし
おもふんとそ紙をくとしす梅と竜田山
とよみくるも

恋一

十四 思ひきやなかにて歌は涙鏡人のはてと見知るかはさ
なしかくやうてと我はかそたきおもい

なとれんゝ世にハ鏡ハたゝへつれはかなくみえ
ねれわるゝと見れ廻し人のたゝりとみえと
われらものゝ人まとよ倍さにまれハよある
あやめもそう九八十寸三のくにを映し
ころ之萬葉にハ十寸鏡とよめるなり
又真澄鏡ともあり

十五 うちわたしなかき心は八橋のくもてに思ふ事はたえせし

八橋のくもてとハ八橋のくもてと
いつかたへもゆきかよふみちのおほかれハ
くもてとハいへるなりたとへハ佛
法の深き事をかゝる事の因にたとへてかけり
小野小町のそこと思ふとハいへるかの
くもてハ八橋のくもてにこそあれと
思ふにかくもてとハ猶ハいへるなりと
ありしにハあまたにわかれたるを
おもへりくもてにいへるなり
くもてにわかれたる橋をくもて
とかきてくもてにおもふともかき
しるしてくもてにおもふともいへり

意二

十六 あさましや見しハ夢かとゝふほとにおとろかすにもなりにけるかな

是ハとゝめしにハ高倉君にしたかひし人に
かゝりたるひとありてまかりて帰りし人に
ゆかしよそにゆかりの遊ひ合所に
まかりね

かの函関鶏のねをまねて函谷関をあけ清小納言のうたを
もわらはれしことありけれは夜ふかくて出て行を
ともかくれはわかおもふ為かつれなきの中よりも
の哥よ○ゐ人のうたかはれけれはかの縁より
まきしをわけねこそ実のなをもあけたるに
あけて行かよはれはあひわれとおもひてよみし
も 秋はつるよつゝ花まつ月の出まとまつに秋のあはれ
おもひのつらくかよひのつらさもことに哀
わくるのことくうちつけにもしものかへりに行
まつ人をまつとおもふしとよみし
大 明けぬれはくるゝものとはしりなからなほうらめしき
やとをかへりゆくとはなきみしとよみし
こよなくとこゝにまてあかつきをまつとこそ
これをいふうちつゝけゆくすゑかへりてはかなく
こそねもともきて待恋すらん
一 たかやうにまつをまつにいひてこそ中よりも
れなきかへしとおもひてまてもまつとそのはて
あるなつかしくやよもまたまちえてこゝろをとも
かなしきこゝろとおもひしにおとろかしとおもひ
ひとしくもかれたる
丸 ぬくくのミなれしおもひの思ひとはさむしろに
こけてもみゆるしとのあさまくらとよ
ゆくとおもふ夜のまつのはに我ひとりかなしき
わかのまつことくまつのつれなきにわか
まつのまちしとあはれなるやことさらに

恋三

廿 くれはとりあやに恋しくありしかハ二村山もこえすなりにき

くれはとりハ綾の名也文皇呉国より二隅
道の縫工女をめしよせらるゝを我説に二人
也綾織の名也一人の名ハくれはとり一人の名を
あやはとりと云一人ハ大神宮にたてまつる一人ハ衣を
勢両宮にたてまつる事日本記に
ありと云り四十一帝の御時人のよう綾を
くれはとりと云ハくれはとりといふ
又それよりのちによめりともいへり是綾の名
なり又[illegible]

廿一 頼としくかれぬる身ハ梅の花人名をさへいひたてまし

是ハ逢事不逢恋人のよく懐寄の歌也
契りおきし節の小萩大荒と云けしきの見えて
[illegible]人と云けるを人よく大荒を
いひとりしを人にしらせしとよめり

廿二 津の国のなにはたゝまくをしみこそすくもたく火の下にこかるれ

名にたゝまくとハ名の立事をおしむ心なり
とよめりすくもたく火とハあしのわかきをすくもといふ
ねてとゝさきあしのかれ葉をすくもといふなり
こゝろ通ハかくしてたえて人にしらせたくもなし又そのほ
ゑくをといふとのあらはれてしるくよしかれハあらはさよ
くゆるハ其の人のやうなる

廿三 殿ハあれとあるしとかくあやしきのふしも見てよりこそ梅のはなとおもひけれ

古今にたゝしおれは思ふ事も書いとはいふなりけるを
しこゑはわかしさうかやとしも寿しとあらはまよ
あり
廿七
神霜とたのむにみ君にニハ引ハかさしと所にてハ玉かつ
かさしとハかつらにをれハ持つ小刀ニしよそへ持つれ
ともれて留守にたり篭もあるしくゝあれ人いふと
いはさしのうらかなくもてといふれともされしたれもあすし
人あれ事ともあり又山のうちなすことも人にみえし
よそいふそはふす事ありかさしとさとる　拾遺に
ねも人の為田の山に入たかるあるかされあるかは雨つゝむ
とも有り隣人陰従するのさしと一段たのむをぞ
聞しあるはさしてあれはけしんよりする人ても又なるとて

といふもとよミ事なれや集に
かされとたゝとたちねれ露もふたとあつまかはかすも
ともありあゆきう人なき人とかくれんとてもあれ事
かれそのあるはあけりや
廿八
夕馬乃そこあるにたに今もあわ上ハるれ元あそもあり思れ
伊りとハ縁とこえしあかしのとまるあハなるをた
れらしるあれも初くる　後撰初潮あり
緑けていはあるかとれあるくにまのた柳うくえまとも花れ
ともあれとかくしえいそハ付あをといひしるし
あたわきそそれゝ縁のあるれとあれに
二乃ゑ柳りしくといふ秋思小小あるとといふ秋人ゑ
廿六
先ゑまゆくれ柳こともせあはしミくてふたかれたくとさゑや

御ことのはにこの歌[illegible]ありとて[illegible]
まれにとふ[illegible]にてわ[illegible]にたへがたし[illegible]

憲秀

廿七 ふるきのこゑ[illegible]道[illegible]にとをくと[illegible]
[illegible]といふ[illegible]に[illegible]
わが[illegible]とは[illegible]にしに[illegible]尋て

廿八 後撰の歌にこのわか[illegible]
廿九 いさせよといひ[illegible]のよを[illegible]
せとこそは諺なれ人の日本記に見えて侍る万葉
[illegible]諺と云ことあり[illegible]
[illegible]とあり

卅 きてゆく[illegible]のやまと[illegible]

覚ハ古今に[illegible]ていひて[illegible]
てゆく[illegible]のたかり[illegible]
本哥[illegible]

卅一 ゆきやらぬみちを遠[illegible]駒の[illegible]
老馬知道と云事[illegible]管仲[illegible]
おひてみちを[illegible]
事裏書云韓子曰管仲從斉桓公為
上卿植公小征孤竹国千冬之雪人皆失路
仲曰可用老馬知於道放老馬随其路得
帰本国見蒙求

卅二 [illegible]のたし[illegible]
[illegible]

わらハいつまでもときみだれしなれあらに定家集に
夷やうにハ空ハ見えて秋のよの明れとまでもまさりつれハ
又忠岑が長寿のあまりわかきと二ことハ定むる
ありとあれしぬあまりたまわりしかハあてなり

雑一

卅三 たのみし人のかへるさのそかりの衣手ハうりそふたのむと常なり
前さいひハおもはれさむしとまつもと又ゆきさしはと
さひとしそりもそこひハわくかふらしれまと
おひさいひとこゝとけんと

卅四 思ひ月と風さまのつらにけんかけあはれとハかれぬ人とつらぬれ
とし

卅五 なきりしときの宮ハのつらなくハ又そ風さまのつらへりとやし

風さそふつらとみれまし人の風さそふつゆとなる梅
とあると流れあまりていなくとこのつまみ又そのそれ
ひと是あゆつまりかくあるのも寿ふ空ハ
のつかしあれハ思緒とおもひとありの猿ハ風の
まりはうそあるさ思緒乃すくハそことよ
あれし思緒ハさて見てこそすまし

卅六 蓮葉のにはゆる人ハおもつくしたいまだ露のあまたとハれぬ
蓮乃かなひと見ありの人乃心あとみしれな
さひとれく人あれしわしすあをとハちあそいへ
乃人の思ひ皆人そのいはれと流と云とさを
いそかりあとまて立乃きへてあり

卅七 あけてくたゆあつハ心むこいのきへたつ鳴さこへ由をとハやうつ

是ハうらしまのことにてあるなり日本紀に
あり雄略天皇の御時丹後国余社郡の人の
ことに浦嶋の子といふものつりをしけるに女のかめ
をつりえたりけるか女となりて蓬莱にいたりて
あるとこゝにてありけるといひけれハ女封したる
こはこを取らせにけるにあけてみるなといひ
てとらせたりけれとも恋しさにあけてみれハ
紫雲立のほりけるをみれハおきなになりて
なかりけるとこそいへりけれともこゝには
ありけるをもしとのみ是にかけて
よめるなるへし

卌八 君ならて誰にかみせん梅の花色をも香をもしる人そしる

此ハ

卌九 いかにしてこひをはかりにとゝめけん
是ハ廉明親王中納言ありける時人の
ことなりけれとて九条殿のよみたまへる歌とそ
陸奥の人あまたありける中納言ありける時
宮仕をよくしける陸奥小路にてありける人をとも
なひにけれとも深き人の御心をしたしかりけるに
まかりてきぬをとらせけるにこのみかたち宮仕
やもとめけるハ菅原のよこたへりたるに人々あかし
たちいひあへりけれとそこはかりける男のよみて
おくりたりけるにかへりけれハいはれけれ
みなかみからこそ恋ひてぬれたる是なり

猿のなれ聲に男のありきなれはしはらく
これにてことかりてことのもりのなかれとは
あれなりとそことれしにてことかくえそれ
し先にあく[illegible]これや鹿はわしてとらきり
てらともにあれはよきとひとらねけしとふれ
しきくあいことひなりね人哉なくちられ
となり

罕 みつしをるくみなしにしとへあまえの筆を経てかなへし
この寺は何ぬ定家は何小野は筆小みたし
をとれてとあの寺あへみつしをるとあの先は
取の名は小野のかくてもなれなへ或人いふ清
とはみつしをさしいふや琵琶大臣遊衛つさき

何よみ[illegible]人の寺にみつしをさしてなけしとを
中なの但書長のゆかそみつしをさしといふ
いふれし丈の大臣なの何わかあ人をくおかしなと
いそなのらしなりことを出てとあれはといえとか
と有名なるあれ[illegible]とすよ

罕 昔れのこおあれ名に[illegible]のかに[illegible]なるかとにいふへき
寺はいそ人のこのあれ[illegible]とあれなかの少はつきり
とすりいそのかことふわよ希為の大師とふ神
いそる[illegible]これいそれのこ[illegible]りといふ庵し
ゆをとゆかくこふにありゆかりきれとあるあれ
かよいせ為なや又か人の庵すふよのなし御り
人不乃[illegible]はたく[illegible]のことおよ[illegible]ていふなや

雑二

九五二 いかならんいはほの中にすまはかは

是はさるへきさまにてなにもたへてすみかたき
神仏なとのかくれかとおもふに世をすてゝ
のかれてもなほうきことのきこゆる事は聞
ゆる

九五三 あしひきの山のまにまにかくれなんうき世の中はあるかひもなし
きこえてかくれかとおもふかひもなしと云心也書云好
生毛川ノ悪吹毛求疵

九五四 よのなかのうきこと山の中にはいらんとおもふにたえぬ
是はかくれてありしかしよりおもひ
よのうきこといはせしとはいふにせうとし是也

山の二乃名をいとゝ山との山まてあつ見れ山あり
又山とゝこにとゝ云古哥ありと云
かくれとはいせそうあはれなるを思ひやるへし
是はおもしろき只おもしろきことゝ云事也と云人
ありけ人とも萬葉の現人とも云へし
おもはすとは現とも又おもひあはせつ
おもひとる事のあはれおもしろし

九五五 よのうきめ見えぬ山ちへいらんには
おもふ人こそほたしなりけれ
世のうきめ見えぬ山ちへいらんには
これは人こそとなしとほたしなれ
くるしみを思ひてほたしとはいへは
昔よりわれもかく云門に藤原氏と

しもとひける人の住けるのまへなるをみて
よみける也みちの国の銘はうけたまはるとよ
則けるこの人をつて此國よりうつてくだりの
かよひける寺也武なりけるなれはとよめ
利　重之寺なりと云

武隅の松は二木にたてるなれはわかれのわかれともいやはさく
なりとうたへるにて山のさしむかふかたのわかれと
とう地く見える人は凡し此松野火にやけて
ふりにし源満仲か任すしてこれのち又は源
うれた橘道貞か任けるに其後孝義かう
て橘小併けるにましふるうてそかのなれ人
なりけるとそよむ也

雑四

第五 昔せ流れ川はさてよみかなる道は昔のなれは昔なる道なり
道なとらかれとそ也凡それはてさしける
あまるとも五十日也萬葉にも三百首とうるて
ありとも三百代小田とうきてはかなきと
あるとなり

第七 ちはやふるちはやふる命を恵其はさねくしたさく恋な
恐は人のとこのいさゆんとたのみて恋のふかれ
深くしくこさうれはわしうきらかれとと
あまる女の母のちはやつかりなれ寺也恋まて
は都皆はきえしとめの墨入也ともかしきれ
かの老年とある女の力自由にありなれるやと

是らしハ女此歌ハ日本紀にも見えてこそ
萬葉の事(刀自)月のさかひハ有經けるとそ

別

(第八)能くなほかのちを惜めりとすくなきさかれハそし
をしれはなほのちとせとわれハ逢ねまとおもへ
これかへて別しも我ははしきわれはりとおもふを
神のちとせ乃継かりとしハ久しきんも久しく
みまさハれしとあれハすくなくとやうたはいふ
やしまて子ふも人丸か長寿かくさうえん哉
我ともくしとありわとすもあらんと云ん
乃てら但しやうしの露らん中かとこる
又東之す一云

一 是しくしと思ふにはかりかねてハ月かくしあれとかくてさりけり
ありとあり

(第九)大原やをしほの山も今日こそハ神代のことも思ひ出らめ
是ハ大原野へまうてたまひける時よめるとそ大原野社の
こかけをしほの山と云山ハ大原野の西方にあるこ
是も神代のこともおもひいつらめとあり氏の神なれは也

古歌　萬葉集

一 らか原ゆきかへりつゝ見れとあかぬかも今さらにさらに
杉浦さらひハ大伴佐保(皆イ)かな見むこそかへ
つれとのこしつかいかとふかしすまかへてす秋
すくなくて中く何よみまたのあしき(?)てたのむ暮
にの体りあそれかいふさらしゆくよ見ゆるかな

しこえしおもして領巾をふりて是を
由称く見れあることをなつけ是よりは山の
領巾麾の嶺と云此山は肥前国にありけし
人は後の人のかたらふ事とは海と云文三
鴻王の進和かれ寿云
斎小少月廿五日三森さよひめの記にしれたてそ思かへり山
け山はさつて山をと云文まつりなすとあり

二 多くのしをを宜は三人寄とも命をさらし我は人もあるかたにさそはれしを
集ありし云大伴国わさる伴部かくらしく人は
いふかで見れ人々よりこれとさも在れ石
川世郎と云との是を見ゆるをて和也し哉
妃のさ海をつくりあよれ引てとをたくさて

云人しのうたの此おもかのきよりかさいは憐し
しいかれて男くると其て火えるりをさせ
て此寺くも下つわしたるそかねあてをれ
いならへ川はらみあ女郎かつゝし猫寿こなれ
とは称ちともり伯父と云人とよりとはさる
寄しと云之父こ乃ミさけとよれしなをさてめをさる
あにく父このミしとよあり今もとぬあるゝ人は防
と詞し我人云東国のとあはおもらそしをいふよ
ろとく云えされしはおもらいろこのミしとしあれあかよう
とのあり

三 山鳥のをろのはつをにかゝみかけとなふへみこそなによそりけめ
けんなるしあさよりけわとよわる人と足字よ

百五十

集にもよまれたるはことなれとおもひつゝす
又あるものゝいはくこの国の山鳥と云
めを峰をへたてゝねるとやされはしらてまつさ
利なれともあれ女御なるきゝてなつかしくねん
鏡をとかけて見たまふへしとおもへはうつりかくなきを
みけるにあれなかけと見えて鳴なりとそありける
ゆきそてと見てもこのかけうつるとおもひてよみける
ひけりかみかけといひしこととおもひつゝよむ
読みそ山鳥のはつをかれともゆるとて山鳥とへ
さそくなくりねなかくにすつ月にみえてとる
のおとゝくまをあ見れはやかてわれ木のかく
みゆくみゆれは二人散に山鳥の鏡といひて

とはいふとや鏡はさきとしるせり
同山鳥をへたてゝねるといふことは山のおとこを
こなたにめをわかれてこゝろもなくねたとお
鳥のをわかれてあなたへへたてゝねるなり
たてめてくとのかけ見れはおもひくらしつひとりね
するとあれ人をあはれといひなきなるらん人は
しらぬかれくなはいかに山のおとをとこへて
うらむらんとよめる 百首 る
あしひきてはつね山鳥のはつをのかゝみか
とかけの見えつゝもおもひくらしつ寝る人の
ともしくにわかれてもすこし人の見る寿よ
足引の山鳥のはつをのかゝみにはなにそ我かけのうつる

とあれかし山鳥のおのか妻をわかくあれかしへなり
ひとりねをわかくあれはしらくとよめり
かしけなり山鳥のおしへは尾なかきものを
殊にとりのたくひのおのとしのへたてとよむ義
とも久しきとなりけむ

四 かさゝきや天の川にかけ人のわたしけれは
かさゝきと云鵲也集本朝の鵲の羽にしたかへ
きりの羅と云其の名めてたきを文
者也ハ鵲の翅をさしかはして云なり
織女の寄し集すとそ

此たとへ天の川のかさゝきのわたせる橋にたとへて宮中の御階をいふ

五 此ハ天の原なかめしかはの人かすかなるとよめるにてもとの事をよみける

此歌ハ清輔と云人の物かたりにもみえたれと
此寄の心よくもかなへりと集云
云此歌ハ風をのみかたりて三種といふ事をいふにつけて
是よりくるしき事なれはいふにいはれぬ心なり
土佐日記にもさりけるかな

六 之路の人の名をいふにいつかはとこそ人のいはれけれ
天の原のいへるとあるにしてこそあれと和
名あるへき細かなるをとりもちて世俗にして二度の事を
歌のさきの我かなしみのうちへこてこそ遠き道
後よ哀れなるとも心をのへてうたの美をいふ
ゆかしとこそ人の道をとくあれはにて激する
気ともあらしとて今案すらむしてこそ

是ハうた女のこゝろのふるき一あまりといへん
ともあいさゝれ舟のともこゝ侍りてねたりしと
よめるなりて侍る又思ひて此歌のこゝやと
つきされハ又思のこゝあかれと此歌此を
作りていつしあ詞のよろしきこと

七 わたつかさのかさしにつきされしいちにあまよしあれわれ
わたれさとん蓍草とさし蓍ハ花ゆへ是夏
草とまり黒とかれらし書と云也しくし男
乃ーこゝさハ紫苑之黒とくれるのまと
とせんと云り但順か和名抄ニ男へしニ
なさと云ほとても本草ニ大き相当之此
なさハ開物とかしてより伝集抄論すと云へり

又やりこうたにようる草ととり草と云ひて

八 いなおほせとりとハにえてしたとゝしなもちはかく
是ハ手力雄の神はあるし天照大神にて天
のいはとの戸を開し時ニのとしけるにて
いなおほせと云ひしより神ニ其跡
もあれまはいしかかのにあれハ是へ成つゝとそへる
なり

九 をかたまと云ハ国のてなれとさいはれてさに人ときなる
て此のせいるとの国もわりてさいと云事を
そらとてこのせあとひさゝ侍られて此と
人乃てさ物ゝおれそと云事とりて此所て物く
かれんと物をさと八雲立つ事知る人なり

すさのをのみことハ出雲のいつものおほやしろの神そ
やとを作らんとて出雲国簸の川上に宮作れ
ける時八雲の立けれハ八雲立と読給ふ
よみ給へる此の歌よりそ三十一字の和歌の事
十 朝倉やきの丸殿にわかをれハなのりをしつゝゆくハたかこそ
是ハ天智天皇の御哥也　御位につかせ給ハさりし
ことありて筑前国上座郡あさくらと云所
に御座ありて丸木の屋形をつくりておハし
ましけれハきの丸殿と云也　きの丸殿と
まろきとのといふにや　其名のりをしつゝ行人
こゝろハ名のりをしつゝゆくハたかこそ
おのつから王の寺詣の事
十一 ほのほのと〇〇〇〇〇〇の〇〇〇〇〇〇〇〇君かみよにハ
しつかにすめる世の中のかけもなき
ありさまをよろこひ給ひ〇君か御代に
なかれてもたえぬ水のなかれにて
よろこひ〇と〇君かみよをいはふ
ことよしの〇〇をとよむ〇〇〇〇〇〇
ほのほのと〇〇のなかれの〇〇〇〇〇〇〇
[illegible]
ほのほのとみよの〇〇〇君か御代を祝ふ
とよめり二乃句をこゝろにてきゝ給へ
是ハ新古今集に入たり　二乃集
新古今集の序にも[illegible]

小ぬかひのことゝあり集云
いつまでか小ぬかなくてとまよはむ恋ひわたるかな
わかくさとは婦をいふなり又云
妻かるかやの匂ひとも思ひてわかきと見ゆるなるべし
是とは小ぬかとりとき文字のかくなりとして
よめり井手のかはづつかれ時風とひられ人てまた
あかそこの名かれ稲のみち思ひとして御舎
まれ是月は門とさしてさいわれあこねさるゝよ
くいろいしゆにけ時よみれ人とかきへとりまて
そもきみかへはうたにそむるしとおもはれる
らとは木の名なりや
十二 夕わかれくらかりとおなし事ときを思ふにかゝるとはくといふとも見えせむ

夫わかれく集おは暮麻又夜暮かとやもあり
夜のとし麻とは妻妹とする妻の麻とは
まかりといふ夜とは夜かりとは又夜とは見えとを
見えて暮そひさしよみかはかくなるも眠とつ
けるりとれし麻のかりかる夜へは眠といふさ
あかりかるといふうのきしと見えむるそ夜か
わかくとは之集なりと
夜かわかくらかなとさして見れいふんとそよあわうなかる
又またくとは帰しといふなし
向ふをとくは夜よのみかよりわれはわかくとよある
いつに又をとくはあはれと云夏おもあわれよ
や若云麻とよりて暁まうはかは思ひなそ

つれなくわれはとふくとふる文麻呂根字
うしらくなし古歌なしさくらはつれなき
のまくらさしとあつなくつけとんうとは
つゆのよくこさくらわさとは孫の名しこれ
わさとのわれはすゝくとは一説なりいそいれ
とよみきつらまあれ　後拾遺集に云
もものふの人者もて常に思ひけれは旅の夜の月
十三
武士のやそうち川の網代木にいさよふ浪の行末しらすもと
よめるたけきものとはむかしより
いふなるやそうち川とは人の姓は八十あまり
されはやそうちといふといへりてやそと
いふなれはやそうち人なりといふ八十氏の人也

壱
もろこしの孫の名なりてはなりて王なりよ
是はおふさこかれとのはる月なるのの月
着と云草をこうにもて子やとよくきいて
ひくもれとあれは是とあてなりくもとく
之是といふこひうめしてそのなつめ
ほしは人とよみをれかれは是水なれ
うらに今えの物れよあつかしくとは是は
しとは事しんしとはなゝ東れんとをする
なと月の物かくなりのことは命とは名をしぬの
ことく文なれるありて其とは定なり名りは
はらなりつさ心ゐねましきのたく事し
十五
こゝろをしけみ里にかへるこゝろ山とあくちるなむ

ゆくへハ荘子文云何有之郷やハ藐姑射山
ありて其上に仙人の住所也是によつて
とりわけのみかどを射山と申也

十二 ひさかたの月のかつらも秋はなほもみぢすればやてりまさるらん
ひさかたとハ天をいふ也月ハ天にあれハひさかたの月とハいふ
ひさかたといふハ天ノ枕言也ひさかたの月とハいはれたり
ろうかなことゝいふ月人をとこといふ月
よミの神ハ天照天神のおとうと月神也天照大
神ハ日神也月よみの神とも申也又月と云
はもとハ後ハ称せしなり帝皇后とた
まひし名ひなれハ堅ミの御名にて
うかれぬる月に似たりかれいふ也

十七 なら山のこのてかしはのふたおもてとにもかくにもねぢけ人かな
此歌万葉第十六巻にあり萬葉にハ佞人と
かきたり人此集の詞にハ讒佞人歌と云ヘり
ことしもとの歌の心をもとめてハ集に
かしはのこのて是をふたおもてといふ
是をしるの名とぞ見て侍れ

十八 しなかどりゐなのをくれはありま山夕霧たちぬやどりはなくて
是よみ給ふことハ雄略天皇の御時なりし
まひしにしなかとりといふことにてぬる乃

ゑてなくしはかりなれとものいと志かくうちなる
のといふ白鹿と云て猪はわさのといふ
十九 わさしすかきなりてのわさみのはれいりわていとたつけこせ
わさみのくの名なりてといふ字ゑはゑんそ
ゑりてとこそしれてとみ皇のをとつくれるをのせ
ま段ふるのつゝみわれをにれくるとさしけい
くるなりて此倚とよ菊しうさといふもしそ
またとすとはなきなり

廿 小ゑたにわさてかりけり志ほのすかさなとよなれやよねけすか
先は守合壹丈遷任して京都乃らぬ時に
こらえ国のかたとも思ほえわさてとは麻と
いふ文二くらのわさてかしあり集云

小はなたちわさてかすま波こしいふはかつますもしきるのわさて　こすま波
先とてわさ乃ねもきし

廿一 山の鳩かわりて西かゑ祭れし神さむとは君かしわすのは
我ねめはわらしてとふ鳥のやかまれくとねる
むしとこそとよべ人をもぬはいたやてしの
えたとも宿はかゝる先は白鶏のかけとふと
よりもものかけは山のえたかれしいふと
祥くはさしとあるなり

廿二 わさとよしいさゝれかとも弱れにやなむさやいろうるとしきを
此寺知定つるにと我ねむわさとよしとはれと
かてねくすゝとくつ大女の内にふらりての
あつまかる鳥に成てよあれ寺とあすわれさ

せれ被文とも見ても文け寺の人なとうなれ侍り
きをおゆるわさともひとへ西山まとうきなり
あれはさてあり又この所はすのかたさとしい
らしとそわさとしとひとへとけ為ふよそにも寺には
わさとしはさ被とおかたはかり也かやもなくきりなかるへみ
見ことさしいらんとそてあれと見てうかなり
りあし当とゆかくともそへの人よあり寺みなる
おゝかなしたくし膏丹寺に
梳あれともう所は方ミうかりへいとて世はいとく立てき
見ともの人ふやあり人とも見るれと行わとふうへ
の国ゑりわる立を往来人に見はさりくてあれ
とうれはゆうさ見れ何うとし此しさ所に

は契ふとしとりしいやまさりけれく遠しとも契り
えもこの文なあはさかりさとは海いつくろうり
なり御そはしからてあれと見えれ何ういとくいとは
おもひいそくれともありかくてとおもはこころ
廿三 空蝉の人かとけにわかれしあそこしとやかれやそれけし
河とこと蝉のぬけからのくちみとなる故に
かくしたる河蝉のひとすてことしよりにかひく
うつとこの人かとふとぬけてうつとしとさてゆる
されとこのなかれ人とまかわれてかとんかさこそのよ
よりへかの人といふしとそて河をことへとくて集
あい空蝉とうきもり向に梅へいさつれ蝉ふよく
河をこころへしはしまもふや善に知れくよあり

或説にハ又ハ打磬（ケイ）蟬とも云事ありて磬とかけ
ましなといひさかれとかけとこしくもハ甚悲
きくハ聞まれとんハ異にしとりとよミ侍るの外
ハやいさかれ蟬とかきてよミしことよある事なり
くり侍る猶ハ儀に
打はへて蟬のなくあふをきくよりこそ立とまれかし
先ハいひさかれとかきしとよミ侍る月集に
つひとおもふ夜の草葉に置露といひらぬせしぬれるかさ
なりあとにもあれハまてもつくろひなれはてつ
よろしあなもふよう
立田山のもみちてよはけしあらしのふくハおもひけるかな
立にふりて又いつくへとよしものけ侍

山路をこして事つかさどる人とけ集す
真名のまへにてもされきいられ
若き立田山立ハ又折にけあるも外ねるれ私乃
おもふ立田山立てもいく〳〵とも心あや立家
又の外ろ奈てもともありみ集に
おもて家ハいとこもいともさ夜の名立田にあるされ
なとありわたしと云ハ年とあされとも
集ナり云
錦萩の中葉も云へかれ立月の色しけハ風をさそひとも
みら
新立ほとふ竹るわかれとよそし見てもあ秋立あつさと
なくふふあり出わつたし萬とふんなこのわさし

わさくしやうきとひるへからすとも云ふ事なしとそ

さかたひさかたのあまくたりきてたかまかはらに…

くさなき

先ハ神代よりの名たる貴神ハもとより

国作り神のひとりなりけりこのうちに小彦名神

ゑ高皇産霊尊の御子にて此国を

つくりて其のほかにもしろしめし天下をしろしめ

てあまたひとくさのためにやまひをいやす事を

またけたもの鳥獣をはらひむしのわさはひを除

しかひ…をさかへさせて百姓にほとこす

是頼をはこの山にまつりて今に

の神ハ大和国城上郡大三輪神社是日本紀

すへてこの句今に

我庵ハ三輪の山もとこひしくハとふらひきませ杉たてる門

と云ふ歌ハ此明神の歌とも申すなり三

輪の山ハ杉をもつて神木とするゆへなりけれ

歌よりして酒の家にハ杉の葉をかけて

屋根とて祭の日ハ神前に三輪をかけ

ていとの小豆にてやいとなつかしのおほせ

あやしとて里の者その集りてつくりけるし

し鳥の子そこにてくねるやうに三輪

らて其のまことのくすりをあやしみ

さそのかの神の祭ひとつてかへりきそ

日本明神ハしるしとすなはち神なれ

こゝに古語拾遺にかくいへり但此はあやしく極よと
気乃ねをかくあるにまされるし日本紀あり
いさなきのみこといさなみのみことわれにそうめ
してみとのまくはひして為夫婦て国つちを
うむ産の時にいたりてまつ淡路の嶋をもちて
えなとして大日本記豊秋津洲次々に諸国山
川海をうむ草木をもうむつきに日神月神を
うむ次に蛭子をうむ三歳になりてもたゝす
也に天石樟船にのせて順風にまかせ
捨つ次に素盞烏尊をうめりしかして
同之はみこの御くらゐにいれ
着の日本紀にも欲せとつゝきてみなの御くらひ

廿七

とよめは文字にかゝはらぬ男女をさしてかくいへるに
とこ我なすは為夫婦とも〳〵とそも古事記之
さうる人のかなの字に御くらゐにつけてと思ふに
之巻のおさなさくあるいは神〇をなしたゝかはせ給ふなるか
日本紀之はしもそのみことをみくのみこと神武
天皇之年字といはれ時のくさくわか国つみ
やたしきみちをかさねてこの世のありさまを考ふる
しかもそのちちとなれる国はかはりなく
しみをとゝのねかくしてかはらくのこさみ
とかひさまへつる文墻夫老川のはしは
皇よりまへしまはされぬ御〇にかゝりてやゝ
ひくされ猶そのかのよき国なりとわき道なこま

ろしめそくるゆゑなりしてわかよのひつきのくにを
めん是わかの下のもの多かれ也しみなくら若
のく海りくおもひりし若みえしものいくさとひ
きめそ玄人りしよろしまへり文仕事あれみてを
そそまりて文久ふのむりての海く此國のそつ
多いろん蜻蛉ともあせれるおくもあれつ
右て是人のみえかそ㛦津別の名ありとい
わきろいもの名をもろふや天盤船にのり
ころしとのハ河内國に饒速明神とてあんを
この寿ておころハ此事とあるきなし日本記
意宴了しこの人をあれ寿ふと
是ハ高わしけい久敷ならへて秋津嶋の名ハこゝろへあせし

と神の文日本記云大己貴大神是をなづけて
玉かきのゆふれ國と云饒速日命の天盤船にのり
のりて太虚をめぐられ此國をみたまひてさる國
と名そわけくだりける日本記に
云日の本國と名付文舟が孫とも成来まし
のおほしおほり青張塞といひしもの八甫直角
わくわしれけハの意なきみゆしまへそこよのり
き擬うなるかきりかれはよ久ちかいりかなるを
いふおもふり古寿云
銀河濱に金風ややうれてやうやし[illegible]
是ハ着るのあかりなれとみえのかしなれ
おやまひして黒み之しくわりてきいりそうなる

ありさたくのやうあられけりあかみえさうゑねかあり
乔との張宣鷹つおくと思てあるとし
廿七 はこをわれかのやゝことおれいつて輪からぶあかれく立ハしけむ
わこくとのといひてとさしくにて一人つゝわたる
て二人ときをそてときしいつて此鷹も十人十くまく
あさ輪あわまての名のありけのうか鷹の〇方
と鷹〇おりしるや鷹〇さうつて鷹〇星ハ比てふ羽
杜甫とさしわ乃あし
廿八 やまと鷹あの鷹とやといはへるさそみつゝいふされしなりと
尾ろるとといへ尾の鷹乃矢の羽れやうしさう鷹は
さうくされ鷹し集まて矢羽尾とせのたるあく
ほつるとさ更ありわつて小之のかなるとさしなと

かさなれるのとゆれし男をたへ苗とハわつて
みくろのなりとさよりうあやとろの鷹とあり
尾さみやあ言の字あれハうよりしてさとさき
これ又とろうしさてとおりあれしハけあとろ
とさおく思ゆるより後撰さ
はされとさうこさうおしく鷹あさるり山風吹くと詠るを
峯よおく山あぬ鷹りハれとそとさるとさし
おしろのおくさ乎しへて鷹のとろる山とさ
ハ鷹れさ心也深山より立し
廿九 かくとて高くうせられ心とてこいしくとふかにたのゝむ
武蔵あく信濃の国の郡司の家小二うあさう
けれかくとてあとこうちそのをたにあされハことかるを

をかしこみしてこゝろをあらはしてゐさるゝかハて
なりきれたるをとくよらんにおもしろくもあるとかや
但さ世に證文ともみえす篤と文ありて貪欲
又篤念之祢あていひて思ひのまゝに人貪欲を
非常なれとのせいあれいとやしれハわくとあり
ふやうらしくと改されたる人とさむ集ニハ現人と
のせたり

卅 泪さへ何ゆゑにかはなれぬらんみなかみの莚ハと涙あれハ
是ハ泪袖ニふるをとゝさてなかれたれハ川と
いへとそれとのハ泪水とそ是との也と見
との中ニあるとわか念とおもふ和泉式部哥ま
泪は君ハわか心にたれさいよ哉にたえ為えつといひし人

又注我のおもひの又の哥ニ云
さとゝるかなれとの水にそれたへのかけしかわれをむかしハやハ
是なとゝめ亀乃水とよめる
卅一 いな莚川そひ柳水ゆけハなひきおきふしその根ハうせす
是ハ青みつるのまゝよれ人のおもひしのさま
ありけるてあかるゝふ風とひかハまかせ根ハ埋かし
ゆれなハ川にしかれ柳のかねあひくとこてよ
かれ哥とし柳の心をえてくるれとも程へうこそ
ねをわかみは情ありて風えてわかもとハ
さしとあるといなむしろとハ旅の人をかく
風とひありけハ旅えはあるとよき人ハ見とも川
うこふみゆるさなま延とよしさへるやうよあひ

これを稲莚といへるは柳の末の水にひかるゝ
かのいなむしろにかくしはらくなるとも力なかれ縁
の心よりいへることしたかふてとこきなる
はまたは稲莚といふ事は稲のおふるのちうた
ゐなむしろとしるれは似たれは稲莚としといふ事
に又はまた似たれはよりていふこと但是とも稲
莚とも読ともいふ哥のはいかさまにや
同しく稲莚ともさせれは説あるにや
若とくはといふ義なるへし座ともいふ事とあれは
稲むしろをとさるともいふ事としてかるへし
かなふとはいふ事ことをいふ也　集云
むかしの情ありつかしなるむしろなれそと見わけ見えぬよるとかる

此の人の哥はあへて旅に出てはいはなしとかなそ
あり　は稲莚の哥日本紀にあり仁賢天
皇御哥也此天皇は履中天皇孫市辺
押羽皇子の子也父の皇子雄略天皇に
ころされ給しに兄弟ふたりてわかなに脱
ひそかにおちてかの国にかくれおはしけれは
雄略天皇の子に清寧天皇とて御座あれ
みこの御時子なき人なくて皇
胤ともかくなくとけて皇胤ありと承て
むかへたてまつりてみかの哥をよみにたてまつり
て仁賢天皇にて兄弟は皇子なる
あるに清寧の猶子にて顕宗天皇の兄

顕宗に位はかりて侍にさまかはりと見え字
のならねふさるらひなかれけれは位よつきて後
おくらはすひにすのうちに賢ハ位に
位き給ひて顕宗天皇久后島辺嚢ておと
くく百枝のうまへとさりて更けれとこ
とをれらし見えてこそ

卅二
鏡をてらすに成今そハ人ふさるにけれはのさちかある
我かことなとなりなとなとしてハ一言えんとり
かれ申はれきのさうに至りてせハとふに立
まへらかもひく女ハ是をよりいふれハてしと
足さひり進物かゆ是ひなは足極めハ三年
をとのあきの月なとふまふやとくへ千歳ゆゑ

わかれハ心とくしわかれと見なおちはねかれをかとかし
あをかはひハ足ひをきをしてとやのめしこきれや
すりきそのうちてめしこのとゆ向えきをと
ちかれ申はれちといひてとおそへきし
昔ここの人とるはかれすこ或鏡めて後物とる
ふるひふ鏡く申はにの衆ふふまふよりて
いふいあ甚申はゆりてこされこ衆くふ共
物ある衣ふしきくとき赤くにきの衆ゆと是
めしあをしまいさとひのそへんかくてる事と
こ事いるゝをしてたこそく衆をも恵とわれん
千歳まちと衆こそ人事ハいつ能国寺にき

鏡申ハこ年乃せ積をきれを乃れ乃布ゆてかきこそ

是ハ父とたのみ母とも思ふて人をたのむの事也
而ハみちの国の名所也といひてこゝろある事也
ところ〳〵せらるゝ布なとを思ひわけてとる事也

卅三 はし鷹の野守乃鏡えてしかな思ひ思はすよそなから見ん
野守乃鏡とハ昔雄略天皇
狩し給ふ御鷹の失けれハ野守を召て尋て
まいらせよと仰けれハ野守かしこまりて地を見
すくて溜る乃水のうつりたるを見て
ていかくかくとつけけれハ前の事を
さしてはかりて申たりと申しけれハ
それよりの事を読に徐君か鏡なとの
ことく其人の心の内を鏡と

此歌にてハ只人の心のうちを見んと云人の心の
なし

卅四 紫の一本ゆゑに武蔵野の草
紫の草ハ…見ることなきに
事なれとみちのくの紫の事也 和名抄に保美
紫とかきけるかの事なれハ紫草とも
も紫の花ハ桔梗也梅の花ハ紫の花也
萬葉にハ紫の花を人の事とハ萬葉にも現
人の事とも

卅五 あらかねの土も紫の花ハ心の事也
此事ハ此三の国にてかくもかはる事の故にて
歌のてかゝる人によりて武蔵野の紫の事

みてよみ侍りけれとおなしことに一首のみの本に
はむかしのみな世人のたはふれの人と遠き国へおもむ
きたりしわれはこれをおもふにかなしくおもはれ
親をうしなひし人の孝の心ふかくしても家の内は
ゆくへなくてたゝこゝに居るはあはれ親はなくして重
て日ころすくしてのちにこゝろをやすくる者わかる
ひの世乃みなしは国はるかなる人の心ありてたれか
あはれなることそしるよりはつゝみこえと月しさ
ゆかりけれはかれとをとゝむるかなしとわかれてた
居るそのとまりのうちみえし人とありけるそとはしりぬれ
更に此事をも人に此おもふにはなの花の親のもと
とありけるてはしる事と振りすてはよらすやうは甚しく

あさ川よりきたりて子を流しなとみなかなしみてなくと
おもふそのはは夫はかれはあはれのまゝにして
まつりつゝかれさりたりは又月ひとつかれぬれぬ
かくとゆくよそのまゝに是まてもとこゝはるかさ
よりいはひさるものことく子乃男親よりくま
くらきもゆくへもしらすて其の尾の方よりもとれ
へとさしあてはせめてられは尾にてもいふてな
とふてそのしりにはしのつきのの又すてはのこのまれ
まつ猿子はゆきもとゝめてもいはいらく行はるを
又男子にありて膝に乗は背てまはりのかたにすか
寄はねつてなれ方よりかりと入れよこしてさく
まにせつなにありて寄の方はゆくさきのあけゆ

われいふしきとういあらはさねかくてせしをく
いかなり彼國のれいとおもひならて見はえう
ちそうもとすりあるみとは筆をあそしみた
たのはすらよえうくとかりかれは是より光され
まのと云けるり扇ってへ人これよりことよ
なりけり此初と云ふ文の明神に掛くよこ證也

廿六 鵲やとさえやうとりさうきのひさかたの雲やまてむ
は尋 歌詠義とも云とあそかさきとはいつさわ
やまてるしかくこをさ乃ゆきわねる方とよ
出きさし是は住吉の明神の御心にかなひ
らしみとにかなかくて此哥より力おゆき哥也
とまり是道のまかうかたへ心をわすかなれ

いひとは雲也是はうちまもの橋ははやかるかう
おもれは書ハ力入て名れたしあそれ何はうき
さ義と云鳥の〇をちかへてあやひ月
ありて橋とされとのわさ是とのまた
乃ちとと云ふさとのよりろの橋ありとそう
又詩にも烏鵲橋連浪淮来をとれく
まつり又忠峯哥云
鵲の渡せる橋の霜の上に夜半にふみけむとさくる
又曽丹哥云
わと
鵲のちかふの橋のさえわりて霜つめるのよ霜の露
とおりつ此橋をわれおもれは物の色
きよくらしよあるし哉と二世

のなかなるつゆなりされはかゝるきはなかさ
なりのさかり露なるやうなしなるなりまれ
ともかくても又つゆさへなるね鳥あるとなり
方等般若経之
元来よりかの翅のおもひのうちにいりて露の身になるも
け奉る論義は是しかしともやすんおもひ給ふ
以下六首経縁物語寄之

卅七
あそびなるにかへるなるに三界ははなれ縁起なりにし帰朝なるに
如来は背なれば衆生の宿縁ぞうつれ
とおさめおきてさかつれとも御車小辞至
う営をとりていまうへなれは車をなれ人
け営の思ひもなやなし人とみしはなれなく
もあるとてかあはれ業を修しはあるるて
是あそびなるかへるなるとも人寄こゝそ
しからん経云如燈盡城となる文
なり佛の燈しはてゝ是ふかせて人
のきはれともなしひとのかよふ人てく
よあり思て(なねてこ无年をも(なき))なかるを
しさとなる也一念心に属ことは(一とこ云捨也)

卅八
山のみかどにてかすみはしもとはもあのまなかれは子とみて
是ハ田村の御時女御の御子の縁ぞまつれ
みかどは安祥寺にてまいらせしかれはみ人くのた
てまつれさてけるの山のかくれにとなれ擬
のくらの常行の大将人くるとあるてまつの

みかさとさいふくもの四にけん人哥をそしさゝまし
しかりかはる類なりけれはとこしのよあらむ
仏の涅槃の時は日月星宿も度とう
あり鳥獣心なき草木山川まてかなしみけり
かしはりきそしこえてしこされはなみのさりけ
かの山のくもれとみのひかりをかくして山
ともとのくしらかは春のもかれとまて悔や
とあり涅槃は二月十五日なれはおなし
て春のものとしれとも也

廿九
神寄はたゝよるかまてくるかけのきこえに鳴てせなかの花
こゝとなきにまかりかけは鶏也くたしは家を出
とうとのきたりし人の中をかうしろとえし

かたはらよみて又家のいつといふ人事は
こしくるはかりといふ事なりやある家也
あはれなしとおもひあやそれはゆかり

卅
百とせに一とせたらぬつくも髪我をこふらし面かけにみゆ
是は年老たる女とおもひしまの男之
しくゆかしきなかは女房とやいふ人男
の家よりてかはしけれと男おかさりみ
てかくよみたり百年に一とせたらねと年九
とし翁のきおもわすれのひとかはりけ
物はとのとくあはれいてしこういふとの
くゑとひらみれは年九といふてくものそ
つるとかうしといてくもとといふくもそて

とせよ下をてねといへる心とい梅をしら
つきてかくといひとなる鶯の羽を彼
女のうへによそへてかくあはれなるこの哥
といふはかくさの沐みなうつろひたるかくれた
是にあるものをしめしぬるよし（為）同物語に
おもひなれぬる人のあはせたる契もあれ（夫）の様に人
是を彼沐をそのさまつくるゆゑのちにはそひて彼
国の女をもてまつりてあつらへたるとなれて
たくらへつれと

四十一
山城のゐでのたまみづ手にむすびたのみしかひもなき世なりけり
ゐでとは萬葉に井堤とかきて川を
せきとめたる所也 但此哥の心はそれとなくてある事を

堰とむる一つの道にゐでの水をせきてたゝゆる
所なり ゐでの人をとらへて
いつのまにかたのみし手にむすびて
あはれとしも思はぬもの心をたのみけれと人にこれ
むかしよりいはれたる事也

四十二
みよしののたのむのかりもひたふるに君がかたにぞよるとなくなる
是は女をよみたり 此哥は又は人のよめる
哥とも 男の母なむ藤原なりける
さて女なむしの国みよしのの里に住みける
むさしの国の入間の郡のみよしのの里
の家にすみし時 むすめの哥にかへしける
よるとなくなる人の擇にたのむかりよ

図のとものハるさくらかなりとしてむ〇と霧赴
しろ人のみ其月の康ととみるてゝある事
あり芳の心ととろとつハいのよ　若云今案ニ
換へすくとよめるらしをとうさわやまて見えし男丈
へ物ナり　万葉集に云
坂越て安部のたのもにゐるたつのともしききみハあすさへもかも
とあれハ待の義と見えてうすれ大帖あと鷹の
詠なりこゝろ得てきこえし
仮名類云寄にも
四十三　聖ゆゑハいにしへの人ハ人ニ示すむねありけれはたてまつりて
是ハ日本紀竟宴の寄に伊奘諾伊奘
冊尊らの蛭子乃ことも三年迄立ぬのやうに

て知るとねられし哥ハいとえもいハれ又せ
ゐつハ無きちくれ人々の寄よりいまに及とよめ
の字四句を古寄に云
哥よみの花をも人はなんとするかはなきねかハれ
とよめる乃字くとも伊しくハ二乃寄ハいつ
をとうら伊しくはなくはつくらめといひてなき
其鳥ハ知まられはしかは又ものことをとはいつ
但聊とハたくら〇よりいつまも万葉集も
是ハいまだしをはなれて乃人こらはたらめさむかう
とあるハ一字ナしハなきてことよましめるけらる
多こまれていつといふむナて月ハおほえてうたまれ
月のへてらむくらたるらめさ〇れうるのをとハかえ

る親たちのさ〇るかりといへる文又
ともこちらと母のこちらあとまうたへもん
道をもたちの〇とおもへ但こちら〇を
もし人母親乃名をは文をも母のといひしむよと
かしかことそもしもたゝしと思はれとはねた
さとはしも文こゝはもたゝしとありたくなるさ
ありはもたゝしと以てもあもなるさめ人まめ
多葛はもあらあとこともなるかれ相之

情文寿一云

常に思ふ事のとはうもとえにはも恥とえはあれ
是と門寛平の寿し敏達天皇乃時
高麗の表鷹の羽をうちきてとくれあよむ

今年壬辰年とこそ人のつもとの羽にもしてわくさ
のさねまくとてしなれてはいまよらうてよく見
えまされよと

長続寿一云

まつりのまつね山路をあまり無にな〇れつくさ物をへまうよれ
あまりくたとしハ祇衍有とこそとる静円僧正
ハまさしけれは人ハ不或アの得のあこ

青丹寿一云

いと女かみいまさ所さえいうく外ここの思ひ出もとしへともしなれ
みさきの女しこそなき人の目濡と離を
とて年乃果つる見をときりつるし下人ハこゝ
さし使つりとアし五家あハ荷列寮アとこそ書

かの黄帝昇天のあしたの御衣をとく
有類とかゝてあり日本紀には思類と
かそへあり
赤染寺して
（羊七）もとは文字のかたちを梅さくらに似てやしのあちこちにつれわたく
是ハ此文字に有事し侍りとかひてよくこえ
われありハ羅なとありしてくるしあるまんられ
こゝろえ引ねて行よまさかひて言うへまろこ
とのちゝそかよ世中の人のなるへきありし入
わかきことゝもし世中の縁なくもそれたゝ人
あの文ひき捨て弱し三筆あきらかし文あり
いろいろに写なつかしきそへいつくさて行よ

とのくえさしよるの足ならなしへの白馬ハ月之
足駒立月と月日の立れとものむすめ乃
やかにある雅ともさしさて文月の移をと三
とゝてあり折にしハ楼（ロウ）庚（コウ）経文に世中の床と
錦にこそにおしハ何あくなくてたるさかれ
小屋に入在宅の中ありてよ草子乃をもへたれさす庵
掛りのあなたそありてこれしに庵よりまた右ゐの
移けて庵ハみつゝいもとまれあるゝさり此
草の露は白き絲さみとも白き絲みなみなれく
乃ろゝきいろの影しとかれハ文おもひはれ尾宅
乃ロリさし庵かれなしにハ地獄し逃つゝ庵
此世あくれくもれ業障とまろさ絲かみハ

見し思ひ様も見るは月日の移事哉移ゆくに
のたのみも草とくにこころかはりはてぬるよ
——し言葉かね哥に云
草の露小露乃命のかぎり結ぶも嵐のさそふなりけり
述懐人哥に云
我身のうきなるよのなかなれ共なほ猶あはれ今はかくしれ
是ハとしへてよしの人は世にふる時もなしいつの世の
哀ハいつとりと云何のちとも今年てふ時に
つくれ共男もまれ時よりは此の命もかれてさて
くしも花さく折の花もすくなよもの文女
のみそらことものあはれに此の命さかれと
云事のあはれくもあはれ憂世の夏はさかれ

月てうれしくもおもほれ共かくいふかひなきこそあれ
つきてかれもむかし人ふるさとの人は袖に
まみれく又見の花もきえかのきえくもとも哀
古哥に云
嘆きこころ長きのをちえてくれやしく袖もしほれく外
又人の言ふ人は乃まれにもたはさて
ともあり万葉云
思ふとも命の川乃流とてや譲につきれく家よ子をも
又おなしくてわれたる言ひにく人言葉に
心すくしもあり

奥義抄下 釋

古今歌百十六首

一 えつ
二 ゆきのうちら
三 こほりまれしも
四 うめひ
五 またやとき
六 まつのゆき
七 もゝちとり 付よぶこどり
八 ありとや家に
九 うくひすのかさ
十 うすけ
十一 まゝしまれぬさし
十二 わすれてし
十三 あみたへくさ
十四 袖乃香
十五 まねきまね
十六 あをやすて
十七 たりもく
十八 ?もくて 付とよ?
十九 ?のを
廿 たりゆき
廿一 いなおほせ
廿二 ふしあく
廿三 うう梅ま
廿四 ひかゝり
廿五 ?てたよ
廿六 ?とそて
廿七 山?のさく
廿八 ?つくゆつ
廿九 ?の?
卅 わきてみすせぬ

卅一 つよよおもひね
卅二 の年乃坂 付さて さう
卅三 いとろつまる月日
卅四 花もとられ
卅五 妹の所
卅六 ねほきねさせて
卅七 春くるおとひ
卅八 うい
卅九 いさめ
四十 あやめ
四十一 白浪の跡まさ
四十二 月よみね人
四十三 雲乃えだて
四十四 いくさの跡
四十五 月つさ まわさ
四十六 山ぶきと盛く
四十七 春雨祢るさ
四十八 松さのたかく
四十九 納水のをかく
五十 きさめく
五十一 月乃色さる
五十二 手綱の里まく
五十三 風まさし おこ
五十四 何やかくて
五十五 かなゝく
五十六 あひさ
五十七 祢きの二尾
五十八 今朝とこぶろ
五十九 まつかとみて
六十 おとかし梅
六十一 家根の橋柱
六十二 いさよひ
六十三 とも
六十四 志賀の山と
六十五 くもく 舟と一首
六十六 聖ねさ
六十七 玉ゆらまさ
六十八 今とりの花を
六十九 ゆきとる梅
七十 まる所の窓の
七十一 久隔より
七十二 志はのをのまる 付さら
七十三 いとれし
七十四 香かれては
七十五 よもろうへ
七十六 ちかなる
七十七 きよたれねくい
七十八 ゆもとられ
七十九 をとぬの二首
八十 初雁の志ら川
八十一 長歩の宿まれ
八十二 ととくさら
八十三 さくねまられ
八十四 思えく
八十五 文るねむるね
八十六 恵みの小人さても
八十七 いくつ小世成よ人
八十八 おちらぬそれ
八十九 いちのまつ
九十 きれるそ
九十一 字 付わさの にぬきを
九十二 ともしては をく
九十三 うたかひら
九十四 花をとるゝ御三
九十五 よそのくえ
九十六 左かとるひら
九十七 まひさし
九十八 人くく
九十九 えそて花とさ 付きて ささね
百 海くてころ
百一 山田のきられ
百二 月の さ衣よ

百三 おてゆかん人をとゝめむ　百四 ともしれぬよの山
百五 難波かれなゝつのえし　百六 ちえふかそ
百七 尾上し　百八 山あの花さきてけくら
百九 海さとく 付さうかう　百十 みちのかせいかう　百十一 海のぬく
百十二 とくてさ歳　百十三 ものゝ川　百十四 あかつころ
百十五 めくし　百十六 うひの○

經哥

一 くれは　二 海三　三 やちよさ
四 くもとあらわか　五 よわさ歳　六 あきくしく
七 不老菓

詞

八 かと　九 ひとり風　十 わかさ

十一 露人名之　十二 衣通作 付きへ前作　十三 三年の風 付あきの
あまの川の花とあ 付 ふよいろと
同前　此中哥十六首
合百卅二首

古今
春上

一 袖ひちてむすひし水のこほれるを春立けふの風やとくらん
東風解凍と云事をこほりとくと云也 萬葉集
ある事を漬して付たる也 ひちてハ同心
同云後撰哥ゝ

あはれ我袖ぬれてとわするゝよるの露のたまれてゐるらん
是ハこほるとも云心とよめるにや
此哥ハ立春の哥なれハ夜の東風とよく過へ
ても同じ事とも同ー心也 御本にこれを
かよくそく同集云

武蔵野ハ袖ひつはかり分しかと若紫ハたつねわひにき

是ハこえてあそこの心をよめり 心ハ同なり

二 雪のうちに春ハきにけり鶯のこほれる涙今やとくらん
我袖かれて年の内と云事を題にて よめる
とありけり 此古今ハ二十巻入るゝ哥
ことさら春へてあたゝ雪なとをも清ね春
ハ立けるとあるとも見へけれ共 年内
の立春をとよめる哥也

三 心さしふかくそめてしおりけれハきえあへぬ雪の花と見ゆらん
是ハ春たちけれとも花さきぬ心のふかく
あさくそれてき雪とも見えしとみるへし人
さつけいかとなとよめりし人のなれとも同心也

四 春日野のとふひの野もり出てみよ今いく日ありてわかな摘てむ

是ハ義父の鄙寺迄て乃ゝとし一しけ鄙と
云ふ父母と云事ハむかし八國にもなくきこ
え或事あれハ取しもたすれ父母と云なれハ
父母ありしつきて是と云ゐよりを迄こ國
ゐ是一日の内よりまてつれし其母と守る
ことのを云ふ父の母寺とハ云しけるよ父かいと云ふ
おもりおこれしゐ事を日市能よみれけり

五
春やとき花やおそきときゝわかん鶯だにもなかずもあるかな
或人ハ鶯消と云事ありしハなしはつきて春の
ころ花乃にとおもきてと思ふもと思ふ鶯の帰く
事とおもしと見てき思ハ春も限らねハよ
色の今迄さかねつ春の思ふハう花乃にとも

ききわくるにまれにきこえし鶯のなきかなれと
よあるとも聞わけしとも人ゐ　同意唯今まて
いかにいひともかなとも覚えれハ春の日ハ未り
なけんハ　晋花の年いわくたわかいされ
と見てね鶯ハ宮にゐ今宵もとかいふぞ
鳴とやもらん是つハおくれい淀れ

六
春山の松の雪ハ消かてよ林ハ丹つよ春宵れあり
深山ゐハ乃り山の掛りてれ雪ハくハまるこう
えねずれ松ハ鄙過ゐ万葉摘とハなりまたと
させれともおもきのまきし事ある雪ハとく消
箇とよらくありつくしかなし

七
春過の花つされ春てね山中にお其らるくとまて二あるなれ

まつ秋てハ萬葉集の体をとてよみたる
かき事をとえさりしと云けり也
とらこ此ハ萬葉よハ遠〻とるりとらしと云ハ
わきこらわと云ハ家之 同き貫之哥に云
此るらとらとこふも百にも氣をのミかハおそにも〻る
とよかるんとらかとも哉した忌ねやねめとさう
ゆふなるハさすに 書之こ此の分の貝ハ
ハ兼くをとよめるに哥ある都も連てありしく
釋てらつめる萬葉集よりなくけゆて
とらよりも見えされ一〻とよめり

八 折つれハ袖こそにほへ梅の花ありとやここに鶯のなく
梅花ハ折つれハ我袖のにほふとハ毎かくなし
家にありとよむらもうとの家の軒にちかし梅と
すこし知りとよめり

九 鶯の笠にぬふといふ梅の花折てかさゝむおいかくるやと
笠ハ催馬楽ニアリ 青柳をかたいとによりて
うくひすのぬふてふ笠ハ梅の花かさと云哥を
かハかくよめるにけ哥に此集の末よく老をと
ありよめる心ハ香のまたけき枝の末に返しあり
くとハぬふとさきしハぬふと云事に有べく
笠をぬふとのミしハ柳の糸にて梅花を笠にハ
ぬふ様なるし

春下

十 いさけふハ春の山邊にましりなむくれなハなけの花のかけかハ

かけんけしと云詞にかけ侍る花のたへにはある
花をしめて詠むよし今日ハとて山吹を詠よし
ありこきすしといへり　古哥云
流日水そこをさへにほはせと云ヘリ　けふの萬葉によみ侍る
花とこそこゝろえてかゝれにもりのかはらとある撰云
みなもそこの花のかけのみえてにほふとおもへハ思ひを尽して
見えし萬葉ハありさまにそておもへとも見えぬなかれ
ハいさしらすとあり　眥丹哥云
あしかりとも手にもつ人の緑風柳ハ花をしのびき
見えとよそ哉かに見えし人をといへり　かけの橘
なをしゆかしけれ

十一 今もかも咲きにほふらむ橘の小島のさきの山ぶきの花

橘の小島のさきハ所の名也　萬葉には橘嶋まく
小嶋又嶋のさきとあり　所ハ皇子尊
乃宮所也　奇ならし河内国とあり

夏

十二 わか宿の池の藤波咲にけり山郭公いつか来鳴かむ
此歌ある人のいはく柿本人麿か哥也とあり
郭公人よりさきに花よりさきに鳴てのちにけれは
一声ハ嘆くるゝなかやとあるとよ

十三 又夏山に恋しき人や入にけむ声ふりたてゝなく郭公
おもしろきところを見ていふとは羽を
なくさむ鳴にけりいやまの鳥とよまれたるを
打て鳴し萬葉にもしらせて鳥ハ鳴たるとも

又月よ川花たちをあひかけハ青の人乃袖の香そする歟

橘と青の人乃袖の香ぞよそふる事ハ同家と
こゝろの二三条乃中よりも袖ぬつくミて事ありしハ
ハ立よる人とふる山路ハ縁語花橘なり
ありし女ありなる人ぬつきて人の思ひいは
なる中の男らさそひつかひのぬゐいふなれば我国
の林葉乃宿人のむかしよりさへわれと年て女ハ
何しよろこびをせよさらしとのよしといひ
きたてらしくけなりていくへしなりぬれよさるをぬ
なれたらそれとよりてよあるよ是よりむし
まいよそするとうる見てたちれされし萬葉かとよ
さとよ海とて

時鳥と聲をきけはわちらちなくねしさそすすねなきもわたなく
郭公乃なくしく啼声に年ハ是をと人まちをせ
なると氷と人ありとも人乃まとまち念しさへ
こゝとよ萬葉の時ともありて又常とも云ふ
同人の海されし友更に又郭公の聲をきけは何と
なくとのあすく四のをとゆきて人なきとて乃
念しさむや初音まちこれと思ひされあけるさ
まはれすとありて又郭公としとれしまつ
鳥なてよあり萬葉ぬ

山郭公と聲をぬこれるるとハ空のへつすむ見えておる音をきくし
とありあまとめて夜あかつきとてハ人の思ひ
かりなくぬや

十六 やよやまて山郭公ことつてむ我世中にすみわひぬとよ

やよやまてとは山郭公をよひとゝむる詞也

けふこそと思ひしをやよやまてしはしまて

と云心也山より鳥ならは世中にすみわひ

ぬる心をいひのへよと云心をその人に

聞ゑ聞るはさそその山をとゝめて人にも

ことつてよと也いまもおもひしれ聞ゆる

哥也我世中にすみわひぬとよといへる

あはれなる哥也

寒き人の宿にとまりて聞る時ほとゝきすの鳴を聞て

あはれにて聞えたる哥也

さく人のすみかをよめる

山とよめて鳴てこそ人ある方へゆくとには

をしへやらむと思ひける也さこそは思ひ

けれと語りてなけきあかすをし給

夜もすかねはおのかれもとそいはれける

十七 足引の山郭公わかことや君にこひつゝいねかてにする

わかことやとは我ことくやと云心也

とこそときこえける

十八 五月雨の空もとゝろに郭公何をうしとか夜たゝなくらむ

天をとよもして鳴とよめり万葉にも動と

かきてとよむとよめりこゝにてもしか

こゝろえてよむへきとなむおもへる

をなしき心をよめる也

云ん世やく人のよるひろくまつをえまつくらさきまゝし
ゆかりん

秋上

十九
七夕ニしはいとのおもひあまりけれとかくこそ成し
そし乃云萬葉ニハ年にしとなりたく年
と云事也 後ハ詞ニてよる川の事なる成後
中後刹後 祇後 是ハ月ノ事也

廿
秋風ニ初雁かね○そきこゆなる誰玉章をかけてきつらん
是ハ蘇武か胡国ニありしかハ雁の足
ニ文をつけて本国ニおくりたりと云事
のあれハ雁とかれらひともあるおもひとこ乃つかい
とり萬葉集ニ

春霞ハいにしとふかくわかるれハ雁かへる事也
此ふひ山といふハ雲そ云草などいハぬ事をあらた
廿一
秋門ほい寒ゆ寒ゆ峰ゆけさ寒く風ニ雁ハきにけり
いさ寒ゆ寒ゆり夜寒くさ寒くなるをあらハ秋
田ゆ寒しなをもとありて哉ハ萩うつろひて行れしわ
り錦子寿しらん
さ夜ふけて寒ゆ寒ゆ峰ゆれと見わたくて民ゆか
とありて又古寿ニ
あつまと寒ゆ寒ゆ鳥乃ゆて世ハ人を旅ゆ旅ともゆし
とあり是ハ我てふくつくさとゆ人とわれし
本草和名ニ萬名あり云ゆミくハよる何のお
乃異名ゆろとさくわしたつまりてくれ事と

すし文頌の和名なん侍ることも聖武天皇文帝の
節すしらるてはまん日本和記にみえつきとし
るとしもその文刻に稲夏るとかきてはよ其
よみをおもひとりとつきて萬葉集なとにし文
かくさしへれともいとてその頌もつさ
らんやハ又しの事かくハ後侍ことり
見て頌の七頌のつきまへさらんよ此今の世に
さとかる―

廿二
櫓風に悲しくおもひかさねなかき夜に侍る雁もさる
雁櫓とふ文字のかの鳴つる声ハ櫓と柳に似さ
ればしく舟にも乗へて詠ぬる事なとこと妹雁
似牧人とて詩にも風櫓蒲湘浪上舟とも

廿三
秋霧よる梅にしハ是川の山しあとよさに歎ぬすら霧
は事しハ青通本ニハ秋風よりくろこゝの
さハ我とおもふさつニ侍る心萬葉なと頌と
かるてきつちとおの閑集之

雁とこね霧とさむれとさ月に鳴する声もとこ梅に
山ちさの白露おすことに梅に此心に梅にか我に也つまれ
露なりさハ直てあまつこゝされと

廿四
ひとりねに女の正ねんハ女郎花我とも宿よこそあ人すよ
是ハさて詠その詠める哉かもと女郎花を
かやしかに人あ見る人のなれとかるの女郎花ハ

女によまする故なれハ一人とよみならへるかともある也

廿五
今よりハうへてたに見し花すゝきほにいつる秋ハわひしかりけれ

妹ハ定時の中にありしことを思ひハいとわひしきかれ
何事のおもひにもあらぬ人の心ハ秋のわひしきの
わかれて見る人をのみ思ふ今よりハうへて
見しとよめる也 秋の色しほれ現秋なると落
の穂よりいろめくよし人にそ 同しく見たり
見てといへるたにの字心とめ(ゆとく) 見ハ不植たに見
しとにも今よりハ野山にも人にすとそおもひし
いふもやとにも人あり見れとせて秋にあはれおもふと
なしとよめるや 花すゝき穂に出て招く袖や
古今集の心にもとしハ知るへし

廿六
秋の野のわするれと思ひしきりなくも嘆き秋を
鐘愛(シヨウアイ)摘(ツミ)衆草(シユソウ)之故(ノ)秋のしハ(?)いふにて侍るらし
秋の色長と思ひし詠とそてつかれしとさ
むしとよめる

秋下

廿七
ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千とせを我ハへにけむ
是ハ人の仙宮に入て碁の移しをハ見てむ
せしハ斧のえも朽ぬる仙宮にいさく
乃ちハかくよめり

廿八
花見つゝ人まつ時ハ白妙の袖かとのみそあやまたれける
百詠云今日菊ハ花晩先落白衣来之れと
よめり陶潜九月九日に酒となくて故郷

下に菊はつミて[illegible]王弘酒を送れ候
白衣[illegible]事也陶潜ハ書をこのミ酒を
たしみて菊は[illegible]也文[illegible]小文章術と云[illegible]陶潜
[illegible]し也文柳先生と云也

廿九 見る人もなくて散ぬる奥山の紅葉ハ夜の錦なりけり
見る人もなきところにてちる[illegible]と云事[illegible]とよめる也百詠
[illegible]買臣羅漢[illegible]の後本国にかへり[illegible]
ときて錦[illegible]故郷に[illegible]

卅 [illegible]限り秋の[illegible]紅葉の[illegible]幣と[illegible]
[illegible]ハ紅葉の水に[illegible]と月[illegible]て[illegible]
[illegible]文百詠ニ仙人
ハ葉[illegible]文[illegible]

冬

卅一 雪ふりて年の暮ぬる時にこそつゐにもみぢぬ松も見えけれ
[illegible]高[illegible]松柏[illegible]文の[illegible]
[illegible]不[illegible]成て萬木[illegible]
[illegible]事[illegible]

賀

卅二 [illegible]
[illegible]物[illegible]年[illegible]
[illegible]人の[illegible]
[illegible]
[illegible]
撰集[illegible]

もし汝にあらましかはとそ思ひしかといふはすへかりける
是は汝天下を治むへき人のなれは母の乳百八十石とその
むせされしとてありつるをこそいふ庭ことに候
ともみえしかともと思ひしこころは惣とてこるを
又さかいとるは物はかなき事をとしるといふへし
わくさかとはなかなかに情ある人ならは

卅三 いにしへのおもかけも月日は思ひとりしとて花にてくもるともあらすかき
是は思ひしなれは月日はいろいろに思ひけるやうにお
しめけり花月の事にて是は人をとひ月日
のもとなきやうにあらむと思ひわすれしとおもひ
向云是はいにしへのかはる月日は事に心にて思ひと
わりきるるは花のなかにてよは月日のあくかれやうに

おもひわすれしとおもふにかくねかはくは菩云是甚深
の意也経文のかすかには人は人の心にまかせて

剣

卅四 むかし帝桜の藤原朝臣にて銀河人ともうしける
すなはちとは庫をいふ或ものは別にこの庫にある戸
故に又さかわと云事もありとあれとも万葉云
まことにおもひしれたる時の節にたえてかなしかはらてこそ
是はさかさし経集にはそのかれ野にもみゆる

卅五 情ある人の心に思ふねかはくは秋のしくれと思ひにまかせ
是は菩提のためにとてあはれてもなくて日来
之かもとれと思ひしこそ寿の仕事をなしかく忘
人の心のうちにも思ひしても寿の老をはなれ
もとゆるともなりわかれにとてわかきの菩提とも

いふなりと

卅六 ゆふつくよおほつかなきを玉くしけふたみのうらはあけてこそみめ

玉くしけハ箱也 いくしけのふたとかけてふたみといはんとて也

とハそのうちとめ(?)ありけれハ(?)玉くしけといひて

はしめ(?)ふたみのうらとよみ侍り(?)

卅七 狩くらしたなはたつめにやとからむあまのかはらに我はきにけり

上句ハ業平のうたにて惟喬親王

あつまの御供のつれつれにわかれをしめ(?)ちかり

てかへるをハたなはたつめと下句とハ天河

ハらへえらびたるといへる(?)

物名

卅八 我はけさうひにそ見つる花の色をあたなる物といふへかりけり

さうひハかりそめなる心にてをかしき也 人にみせまほしき(?)

うひにみつるハめつらしくみそめたる(?)也 きえやすしといふ(?)

ひかりかくしといへり

卅九 いさゝめに時まつまにそ日はへぬる心はせをは人に見えつゝ

いさゝめとハかりそめといふ事也 萬葉にはいさやめ(?)とあり

心ハいまいましとたのみしものをさけふ物なりしきと

よめるにて又見えけれハ(?)と云義にてある同心也

哀一

四十 郭公峯やまよひ月のかけ(?)をみてかたらはぬとやしらねなくらん(?)

けふ(?)とともに見るとハ自ら(?)としとしもなりて(?)あり

さしてもその事といはんやうなる事を(?)とかれ(?)

ハ書(?)情なりしたゝしくまことにてなれとも

すゝ声とゝらてとしくありけるとし
とゝ旅人とゆふされ草盛寺を

四十一 白浪

男山の辺つゞきにそれ浪とおもひさも雪ふかき
白浪と浪のさわぐ方に打寄せ風にたゞよふもおもひなる
舟を沈むる浪の立かへり風の吹立て行く
いとしく共に立へ行くつゞきの打立もう
るの世のありて思ひよ吹立てあらぬうつ
れたもとのまゝふくともなるあら立て人を浪の立
まれ本にとりたゞよひて風にも吹立てよみぬと
わか立る人はかりとも心もさしもあさと
いかに立ゆく立まつりいそれて行く

四十二 世中

世中はうくるありけり吹風のさだめなき人とゐてしるかな

四十三 夕暮

夕暮は雲のはたてにものぞ思ふ天つ空なる人を恋ふとて
書云 能不見 巌見不見 地人不見 風さ
まて月にみねといふしらて吹風とともに
たのめてと雲のはたてとふるまゝに布すてよる
雲にまよふへかなりつたなきに行かれ人を
よりて雲のあはでみに思ひとる 糸のもとは
くもきれ一もとりまつとふくなし枕にもた
ともと云思ひ我かもへたゞいの場によれた
あみ似る雲の夕暮にはなさかりく
といふも又かゝいくと年の頃の仮名乃
扇にも思ふ人雲のはるてよそのきよ

なつていはしらなりしをりの見えたるとよむ也

[illegible]
吉野川岸の岩浪の音よりもはやくそ人を思そめてし　高くはねなく
岩波の岩ねといふは川の中に石のあるところをさは
利てよこさまに流るゝ所也岩にあたりてゆくと
いふ也それはかりをしはやく文字にたくへて
音のはやきもしらるゝ也

[illegible]
人知れぬ思ひやなそとあしかきのまちかけれともあふよしのなき
我おもふ人のまちかきはよそにのみきくらむ心のさとりは
ちかしとおもへともあふよしもなきとよめり
まちかしといへともあはれしなくいふて
さるほとにあはすもあらはあらなむとよめり
きかすさねとらぬ人のまよひにかなしむ也

さてもとすこしよそへてくるしめはまことにあはんといふ
なかしとよめる思ひやなそといふるは思ひは
いふ事のたとへにめかし　おなしことのあはひを

[illegible]
思ふともこふともあはむ物なれやゆふ手もたゆくとくる下紐
人にあふへき人は下紐とくるといふ事の有也
されはおもふとも恋ふともあはすしてとく
われはしらすしておもふ物をいふてもたゆ
くむすひとくれともあはぬ又むすひしさ人
をいとはぬ事ふかくしてたゆくなりてぬる
むすひえともやすき事を神にいのり給ふ也
とかくむすひとけぬもとまたとくとも
しれともあふへきはてなしといふ也

みてなわれは先相もなき人の上にもはしとされ何かはまた
まことに息のあれぬや萬葉にも
二南無三寶ともいふまじきあはれにかはりきえぬる命を
なりにしさとこそ羅綺を身にまとひしも
人なるはみなとしよりまでうちに世をわたりてよふもあまた
あまりおもふとも先相なくこそあれはよいとい
てよみ通してこそてすゝ思ふ文なりしき人と
忍ひそこともなきてまことにとあり
同集云
四十七　ますかゝみ見しとそとこまかく思ふとみえし
四十八　いそ我心人なきあかなれは誰かは思はれぬ不思人と
なくのはかなさしはかなれてまことにかなし

うきそこにとくわすれはてし心は萬葉云
我心をはいかに思ふらむ仲なるもとより何事も
是同出同集におけるに猶頼みてたのむひと
あまり名をあらはさぬを心へて仲をも
とはあらしのかせもふかれよわれもある
四十九　行水にかすかくものとあさき泡の人とおなしくなりなん
涅槃經文云是身無常念念不住猶如電
光暴水幻炎亦如畫水随畫随合萬葉云
水のあはのきえてもかくあらましものを我命はいかにあらむ
水のうへにかくはかなき夏の世の人にいつまてすまむ
五十　藤原朝臣かくこそおもひしか今はさらにやなにを物は
あらたまのとしたちかへるはるのよのかけも

つゝみあうにうれわかうた又詞ありこゝと云葉あり
おなしれみえてよかるし其云葉ハ寺らのおほと
いふ古歌ありみ書てある万葉云
たかしれよなてる雲のまにまにをとえすと水にいれるか
後撰集云
宇治川をせとしらくくとへいふてあるべきわいてこしかや
是ハ其山のあらはれるさまの又万葉云
鶯のなく山桜さくにハ君まて待ちて花ちるやと

卆一 津の国の難波の春は夢なれや芦の枯葉に風わたるなり

意二

かくされしハゆめともおもへくとおり
河原の花のくさに流れつゝまなしわか意を
吉けうとよかりさらなはなかれぬのうれはえ人すれと
定家卿云
難波の蘆の枯葉に風わたる気色あはれにおもひ入るゝ事を思ふとそ
是は心也

意三

卆二 有明のつれなく見えし別より暁ハかりうき物ハなし
是ハ女の許より帰る時あけかたに
有明の月ハあかくれともしかも隠れなく見えし
この時より暁ハうく思ひとよめる也
もうしよりわつきハうき也

卆三 なみてら風ふきしほるやおもかけにさしかれ
是ハ旅にて風ふく時よりて風と枕ねさせまする

浪のたゝむつゝみに人よわかれてよる名とをそて又
わかねさたれ名のたちわかうれ人好乃風根ねわれり
たゝむつされとあるし

五十四 おやまてまつさうはる宇治川もてつまし物すれ成よ
わしさかりとりつまうれたなり拾遺あと
九伊勢て流物さん梅のあむわするしゝもれた
られくしとよあり又夏風寺より

五十五 志乃めのおらくとわけ行ゝあめのことねくされ紀しさ
ゝ恋ノ人あれは歩よわるを川たゝつけたられたわりまむ
萬葉よく明こともりわけ行也

五十六 君のゐをおふれたて我もうさふれゆゑわれこらもにし
難波ゆ江川と云所わりされ江川とおさくわれ

こゝし細川とこゝ萬葉よりみてさうらし歩
はれ変よれはおとへあり

五十七 立てゝは先そ又やおさ人いてさ夜の秋ちかれ衣をわ行か積め
是ハわりわあはいしいてさはゆきねとさてよ
ささて人を旅うつもれはおもわさらてもり旅ゆう
不行あしへつさ人のこねかとうかさりし
よりいつちはの秋あはと使かるとよあるを
色ニ義わすわいはさやよにしもとしと高

五十八 思ひとし人わかれ恋あれは川と深かつえよりとて旅
かくしこをつとふわれと深かつとこゝ古寺よ
こ自しさ也夜積わし

ゝ おそのいとありとを冬の秋子物ら風わりとゆ共へをといふ
れり

五九 おほくの作とも見えこなたにて見ゆれとそみえとにみゆるかなれはもなし

六十 むかし男ありけりとは今昔と云ことはを物語のはしめにや
みな物を云ことはにかきなせりといふかた人は
へたて人はむかしとかきて云同し人とかわれ人は
しることはしるすあらはさぬ為の字としかせと
ある説の義也

六十一 さりけり参河の国ところにいたりぬ杜若は作り人や伊勢の橋姫
は男橋姫の物語とも云ものなりむかしかゆへに
なとそふ人これあることをかの男のありけるなりてあり
女のかたはらにありけりとそ申海道をゆきて後
王子なと申まて男のなかれとともにゆかれたり○

ありきぬれは杜若といふなれは唐衣やそのかたはね
又その他にはありてここにありはありけは男とうさい
て海道をゆくことはまつかきつはたのありつや
いへしあつれかはなれは男すゝ御のりに分る今れ
あこたりと御せてかくありゆくなれては男は
まいは又は男はなとうちて男かゆかりけれとう云
よそにとなのかは云つかくれ候にえみさくはは
男かをつかきつなからはありてことも家とも申す
のさゆのまとくえおまの世の古物語をかへ妻は
うくもて候まで

らむや杜若は作の橋姫なしと哀と思ひて文をかは
とありなとしはてそのはうにて本あるもる也

男といふものは世にいふことゝなれはしもよく女になれ
人をしとふ物なれはこそまたるゝとみゆるなり
されはとは此男女むかしの世の事なれはみな
あはれなりけれはよのつ又むかしのおもひは其わきと
まとれ神ありしかはゆるされしかはされは橋と
守れ神と橋姫といふうちにも思ひたれる也
ゆるされわかれは年をへたる人なるへきものなり
法の橋姫としてなれぬる心えぬ神といふなり
なりと云事又常の事也依橋姫立田姫山姫
とりみなへし

二 君やこん我やゆかんのいさよひにまきの板戸もさゝすねにけり
いさよひはいさよふ心也よくよくさたまらぬ事也

三 津の国のなには思はす山しろのとはにあひみんことをのみこそ
これは列の事也けいさよひは夜は世をいはさ
よき時をむかしといひかへてなとかね
れとも萬葉の標寄
かくれなき仙の山さかいさよふ雲はいとにかよく
とおりをとを山の端に風をらぬ也とかや
事は山又は関なとて山からは歌常の事とし
みたれといひむかし津の国とよみてい
んえてまかしとそ名所と云山城に
あれたる又萬葉にしるしといふは古事と云事
ことのうくすからしめてもとえたなる
人のしといふ事とも所と申し也

されハ名聞に異ならぬと思ひわきまへむとぞあ
らぬわざとしよりこゝちへしなど以
事と思ひおぼしき心也

章七 家務のつきとめ所なし衣食のつきてもあらず
本意とへもしてとんぢをひじりとなると云
法といふをしとまりいふもをぞいへとあり
不和といふとぞ家務とぞ

章八 つれづれ小宮は思ひ出にて三寸もと当時は柳ハ隣
のもくゐてわすしを思ふとハとどれは心を
作くされハ初めて心さしの孤にかくて三
なさあはれてたゞしれなみ柳の人にねかくさ
さてハたゞいふさ心さしと志の又柳れとて

これハさてこそ思ハさるものと志ゆんと云
人身のわりなきもとわハ無に支れ物とハ
云也是と章わくこ世の人ハわれ是物
と物れもの力人ほめと源と云ふ事も人
ともあれをもいふ事ん

章九 或ハねさ事にてある事ハ物ハ思ひとえる物事さるれし
都ねさハあるへ〔ことに陰陽師のとする〈
小さしみえて〕〔あそねハ是とあり
くりもつてみれとのあハ人のしるし
小はとをきまてもとれハ別てわきて
われまうれしとあるへけも書にわれさと
あかよりたてかなれてさとみ杆あよりも色

ありて物いひしあるへくも道あれとてかへり
おこせしたれはかへしつかはしけれは返事なし
かゝれはすくやはりとしあるをおもひしらすや
しられぬ君か君かとしてはすみれと思ふ心を

六十七 玉かつらはふ木あまたになりぬれはたえぬ心のうれしけもなし

玉かつら又葛の名なりかつらのかゝることしけき
はへ木にかゝれるあまたになりぬれは絶ぬとも
いへる物いひ人の思ひは絶しとうれしけもなし
とおもへるは又をとこをいふにかへて
女の心にうつろひ玉葛とこそいはんかし
わか心の人をもわすれ又とていふは鶯
とはいふもおなしことにて百千の鳥といへんとて

よくなりとも物の聲は昔にてまたつ經し

六十八 ふる井のもとに僧都にしのひてとしたるはかりに見て
見しは文に心をとゝめたる人にいひかはしけるを
わかしのひてはかりしのひてとも人に見せよと見て
眼に見しとあり

六十九 のとかなる世のはなのかねにしなむ花の色の聲にしも袖をぬらしぬ
ひとりこそとなきにしてそこはかとなく
物かなしき物いひかけてあはれとなけく人
とてもなくなるひとの人をいとほしく
こゝろにとかく音の人まつ袖をぬらすとも
かなし

七十 海士のすむ里のしるへやするなれはうらみんとのみ人のいふらん

此哥一古本ニハよみ人しらすとのるもあり
然れは此つゝのわけを乃貫之か御る玉露
乃如くし云直文とあれは忠岑か女也とも以下
に露野乃のよしと云事なれはよく見えくはしき
古注に是と見えてよめる哥也不審
一 白露のかくてもよ所に寄るあはれ人見なは
とぞ有

七十一 逢坂の関に流るゝ岩清水いはて心に思ふ
逢ハ古事也 此哥ハ関守のために
帝代一ありける鶏ハ関守を思はせて
小野山のもろ人坂の関ハ其一の関と関守
とハ古事也

七十二 暁の鴫の羽かき百羽かき君か来ぬ夜は我そ数かく
鴫乃羽かくとは羽をかきすくしにくことを
いふ人のこれを数のうちとも見えかた
ちハのとくいさ乃やうに鳴とかきの哥ハ詩義
と云ものニ古哥二首を撰て其さまをハ世ハ
ぬきさかり 先達のまよひとる所ハ是ニ有り
おしとも いふと人々の鈔に 此集ニ入たれ
と私但書之ひとへ ちかくきこゆる也
となりて思ふこゝろ其哥一つ
一 暁の鴫の羽かきといふ也ものを思へは殊に
おもかけたちいかさとまよふ君か來ぬ夜ハ思ひ
向ふ此あかつき鴫の羽かきハいかなる事ぞ

昔の物語詞ハむかしハやよくとの
女ハよその男にあひしかとなりしといひけれ
ハ女心へんとてまつあひのかれとしらぬまち
をたてゝこれからへわたるとて百夜かよひた
るハいかにもとハきみとひたなハ男なれ
をとこのさそてくるまへきまつよせりなきら
のんかおもれ秋の夜をとこさむれとかえ
千年九夜にぬまりわたりよりハ何事もとえ
あいなりしかといひあひにかれ秋の夜よ
ら待ふまれし八千夜えいふとぬまよりな女の
よみてあまりのれ寄し是ハ或秘説の書
ナりとそ且とも後にも見て云事なし

七十三
わすれくさうふとたに物思事とハなきこれハとなりにける人
いくハ世間の若きよりハ言葉之いとまいひいと
あきてこ事之文集にハ前をとこていと
とよりの前ハ専之字之も思ひんなきとなきさ
ハいとかくおもれてまゐれんとある之月記
あれ哥かと
わするゝいとをたれおもふへの心のさまとと気にかれし
とおり是ハ文字のいうおもすれ花後かれ
何よりハ恋しと言事とをかれとよりし
向こいてまいと申すいひすゐへわすれね
かや後撰之
日にそ見てほかいとまく中おもく秋の夜ハ小あれハ千夜か

又萬葉歌ニ云

下ゆく水の妹背とこゆるいにしへの人をかなしとおもふらし

是は妹背山の事也 吉野川ちかくて逢事かたき心也

なかれてはいもせの山の中におつる吉野の川のよしや世の中

さればとて男女の道は世に捨かたき事なり

ともあれかくもあれ只のこそ聞えし心なり

かゝる事ハ行末まてもあるへしと

八廿八 なかれてはいもせの山の中におつる吉野の川のよしや世の中

男女の中はさりともよき事ハ行末もあるへし 心は

如此いひて猶男女の中ハいとはしき事なれは

よしやと云る也 歌のこゝろ也

へたてられし

哀傷

八廿九 なく涙雨とふらなむわたり川水まさりなはかへりくるかに

わたり川とハ三途川をいふ わたり川とも云 その事

人の道のさる地獄絵とかきてそ其歌に

三つ川わたりみさかりなはかへりくるかにと云へし

八卅 ちの涙おちてそたきつ白川は君か世まての名にこそありけれ

白河乃元ハ文徳天皇の御時に白川のおとゝ

の御事を申也 帝かくれさせ給ひて君か世まてのと

詠せり 白河の名を君か世まてと云也

それによりて御門をいひて行末とおもふへし

世を経て文徳の御時に名をとゞめし也

さなきくれて今行末とまかせて

まさにむかしかたはてゝ千代の事をかそへて
といひつ三代といふ事に代ゝ年ありなれはよろこう
あらんとそみる結て又後の事おもひてたてまつる 和
氏曰是ハ車十二あると照らしたまふ成やみ人
く秋より是なるとて血液の事ハこゝろある南
中記云周魚書をみて血液とあつかひ川と
蔵あ風台山の南笹に入るゝに見へて後山なと
の名あり慕流血液周流山と

卆七 さたたねかむつらなるはなかなしきなれの今にあらねと
是ハ清和にまれ人下もまたなれ男に在
まれ寄と逝水不返流梅云前と云事
のあること拂あし人あさたてねと流梅花に

たてわかに結ひあひはるゝこえのなくをはよ
又こつきかゝ結ひつらなはゝ重ともかはやか
されへしあると

雑上

卆八 業のうた〔…〕あとちれよ野にあれ華とまた〔…〕
是ハ女のこゝろ〔…〕女のことゝ人のこと〔…〕
とそある寄とかとみれとも闇と道ふといふ
こ女はしたはぬよろしあわしたの一ひかし
ふかとえ〔…〕たる力あ男子の〔…〕
をくもあはしきつてみけ人とおもふ心の〔…〕
かくされはしつゝ梅おもはれかくれねてよあると

卆九 玉のをのこゝろやいてこかれたの夜のあさましけ沖にあゆみへ

風俗寄言経の中にかく云ふ事ありて老物
はとかくのみなりしたらかりしよりふこゆれさの
頃よりわかりけるに此心ならかりあれをしの
ありしわかるに世の中はよきさまの類とも

八十
いにしへの野中の清水ぬるけれともとの心をしる人ぞくむ

けるものの事にてかくつけたる人ともなとてさ
すれなくてたれともなし　此歌は備に在りとある
にしたる者はおほてたさゆゑにあわりたれは東に
見つくありて人をことしときなと者とおほ人
ゆゑとの事おほてくことありとしける
とて弱てかくはふしくここちよかりて見を
はしし是はかてたのみなき事はてかくして見て

てのかなはれともあるところにかれなりし東は
志れ分事にものに人ならとしとしてかむも
是は人ならし事にかくてはにとなれは起こさし
あの昔の志はかくしそのことしとさむはなれし是

八十一
いにしへのしつのをたまきいやしきもよきもさかりはありしものなり

とつなとはそてもつは昔の男とある
ことはくかところは始めたれはつの初とことよ
きゝとさるは初めさとよあることはさかりとそれ
是は何ともありさとし又とこうしてまたた
れ女のといへ賤のをたまきといふ古語と
またしてとかしさとのくとと何たとかて
志けのとくまることは始めけるを

八十二 万葉集に物つゝみし哥に寄せてよめる三首とてこれは、さる人をおもひて
わかれしともみしと云事にありかのちよめし方
年もへぬれは思ひもゆかて心を尽くしの
其ゝ時のかはらぬとものを物くるしと我よみ給へ
物くるしき人へおもひあり乃哥也
今夜のやうなるこゝらの月の面影の思はるゝまゝ云て也
見ともけふの夜のなけかしくて

八十三 老ぬれはさらぬ別のありといへはいよく見まくほしき君かな
是ハ不堪別とよめる事ハ死事ハ不逃
言なるへし

八十四 けふの原をみるにつけても見えはしめに人の心のつらきを
かみなれ初てしとはまかへしさ成にき

作者つからひしとにくらしさりて見もたかつらき人
とかゝ見えてくたさるゝまゝくかれをいよく
しらぬ君とありつけ見つくは野の花にうへ物を
又くとも心の万葉也
都ハこゝろのふかくなるの見てく思ひかけしよしとハ
見とも同し也

八十五 たらちねハかゝれとてしも人をおもひ我かなしさの心あらは
是ハ新古の歌仙とよまれてよりける哥也歌仙人
乃哥をたらちねてよみいたる也

雑下

八十六 春の来てともにて人のも年は涙のさいかせはかりの思ひ出
年ハまつのさかいとものひるつけてもあらく

文字ても以て人の心の直さをつくみちひき人ハ無ほ
物をしまむとも人あるもののとうに相すゝむさ
ぬとあるへし

八七 ふくからに世の中はふかく林しも山も木も吹ものと捻ると事す
行く水の流に世をわたると住人つれ此山を
ても神心のかしこしれ生ハとより吹まつとハ思
のつよしとことるらん

八八 茅とハ山風の草木をあらすれハ花のいろもかはる人
さまうしいひてもいろいろのことの山風あるか
草木さへ卯花をいふるのくさしとしる所に
ありとあるとなりなる人とに一寸つきし人と山
人と花のよるおもくしとらるて見とおもふへし

八九 いろ人のなかにハきハハ世のさめても風にまかせてきえさ
是ハ法文にある事也 天竺に四人の外道ありて
我等ハ天上にいたらむ一人ハ海中に入一人ハ天に登
或説に須弥山の頂に入一人ハいつく乃
中にかくれし人ハ市にまきれし 是ハ死時ハ
あしかハ二人ハゐなし也 四天の風にきえうせぬ
其心なるへし

九十 木にもあらす草にもあらぬ竹のよのはしにわかミハなりぬへらなり
此哥ハ竹にわかミをたとへてよめる也 又ハ月
真なしといふに竹のよのわかれをもつきてありて
竹ハ木にもあらす草にもあらぬ物ハ何ともなり
さかゆる人あらんとハ人也 孫姫式に此哥ハ

てしこたれ三代ゑて御とも遣ともおしとめん
以上の事わすれくうちんう

九十一 思ひきやひなの別におとろへてあまのなはたきいさりせんとハ
此哥わさしなしたくともふかをもしわり侭ま
ともきもしるよの字のわの閑し事しわ三のまん
なて見れしえんゝもう御ときわすれ戸きれた
くもられしてう事しくあんたもとえけ四し
たられすともしとるり玉まてハぬまうと
をし萬葉にハ夷とつきて玉のとよせ山
上憶良哥一山と
わさとられ萬葉にいくもみはうて𪜈の御り寺るはく
しよめる萬葉にハ夫離とつきておさ依を

ハあり𪜈人て御りハ武稀まあるなん行時人の
うそせたる馬のたなけしころこの人ゝて西しむる
ともし四とろうき花れまにとも方を換
わもうしかゆりといへとてそすかとそいへ
きわさ

九十二 わくらハにと本人あらハ須磨の浦にもしほたれつゝわふとこたへよ
わくらハたましきといふ事也まれにといふ也
閑し事也

九十三 ましとるみ雑役の浦にあまりしハうらをかえの御ちてぬかき
雑役のうらにあまりしつえて遣とあふくるをきくへ
あつしうにかゝ三てうえわさまハ成まくうすといふかや
雑役十ろいとえすへあわしハ我是人へあるを

四十五 いさ京にわかよハ名のみなりけりや柳ミちのくの里のあれたるを如し
是ハ山城の柳見るにハわかれと大和国に菅原と
云所に柳ミしと云里乃名をし移くはくるとも
記云安康天皇崩菅原伏見村中陵に葬
二乃所を據撰云
もろこしや柳ミちのく萬に限世八十三にはあつまの初風の山
ともあつけ柳ミちのくハ猿山高遠うつりて

四十六 古今ハ月てよとあらはとも見え程ハ也こも心つよし
仙人の山乃中ゆゑ其久しき雅の切て一篇と
見るれ雅よむにれ久て在りけるの摘ちるる古と

四十七 吉田鶴の棲ともなき峰なりハ雲乃久なりてきれし限りもなし
鶴鳴于九皐声聞于天と云文也古哥之

唐衣きつゝなれにしつましあれハはるはる来ぬる旅をしそ思ふと
是をはなれてそれならぬハあはれなりこてある
其男にとふなあるかし哉雨ふりきこゆるも

四十七 秋の野になまめきたてる女郎花あなかしかまし花もひと時
まなめきとハまくなとなと云萬葉にハまなきたと云
されとも後撰集ハ深とありし后ともかくされ集也
妹されハ花されなりもしまあり女さなくして云
かしましきハ恥かしくて見るへき花とある也

誹諧哥

四十八 梅花見にこそきつれ鶯のひとくひとくといとひしもをる
鶯ハすこそてにきつ枝に鳴てわか名ハ
ひとくひとくやうまきこ月迄ハうくひすの物まね

くらへてきまれ

九十九 いくはくの田をつれはか郭公してのたをさを朝な朝なよふ

郭公の一名をしてのたをさといふ 郭公名

ととをとし文鳥は名としいふなとを鶏鳥

ふるのひまてをつけれはかなる田の鳥とそれ

て今は五月の頃に田をまつるんとそあつかて

くにはなくかなしけれと鶏ねよそてもひまわりくかなり

てしめをとえてる也 又名の百寿命いふ

鶏も鳴つつ

百 いつしかとゆそてよるとなきなけれはやとをやまてぬ

山鳥の向ていふさねくやはなく

是ハ六月の寿しまるてとふまりとこ萬葉に

ゑそさけの羽ハわろくとしとをてわろくとしと見へてよあり

秋の野の尾花にまじりさく花のいろにや恋ひむあふよしをなみ

とよあり又ふくすくらく霜降くなとよあり

又こくといふ心とそてとこくなてよありされし

ゆくくともすとる海をくんてはゆわけてとハ

いつしか好こてあとえこめくとる也ねまゆと思ふ

随かあけり命もよらむ心也 又ゆくさくとは

まこれとふ人もやまよおりてんをとなくわ

よはさしこしてまつれく思はゆくくんによ

かのゆやともさここかれとおやりの妻也

百一 足引の山田のそほつおのれさへ我をほしといふうれはしき事

そほつとは田にたてゝ置人かたなし

あやしの人かたなとわといふらしとそ我をほしよみゆへ

くるしきにしかはかりといひつゝ人々なきて
おもひやりとおもふほとにまうてきし人々にきこえさせし
てよめる哥なりけり

百二
人にわすれられたりけるをとこ月のおもしろき夜はいかにあらむ
月のおもしろき夜ほとにありける使ありけるにまし
あしたにつかはしけるに使ゐてかへりて萬葉にも
かくうたてたちまちいてたるとし事をとりて
おきのまへにはるかにこのさくらの
いたくちりけれはしのひてかへりて人のもとへ
といひやりける

百三
おなし人をとこものいひける女のもとにかよひけるをきゝて
此哥はかのおほきおとゝの下ちゝくちかせける文

なかくなからむとしのくれの事によみて
つねにいひける事ありてなかれけるいまはかきり
ささめことにいひをきてとてかへりけれは
おもひわひてありけるをりにしもかの人はなかゝりけれ
ゆめにもしはいはんとおもひける人の家をたつねて
もろこしのうちにはかくもしらぬ人はなし
おもひいりけるをりにはいなまれ人をのみ
ありしよりことなくおもひのさりけるをいさゝか
ことはりにてあはれ人のなけれはなけかしや
まことにしかはなきみなとの人も知らぬをとこ

百四
ところさえなくもなつかしきを思ひて見れは
此哥おほえけるとそ見るにみなもと人ゝ季の王のとき

吉野山ハ吉野郡金峯山のおくにある雪の名所にて歌
ことによめりされバしら雲ところにしかりけるに此の
山をよみてもしらせとも今集の方にはよみ入れ
ぬ所もあまたありといへるぞとよめるところあれ
ハこの山と今のよのおほくとしよめるところ
いまハ人の歌あまたありて見ゆるとへる所あり
されども又この国にとしよしの山まいり
ある人のいはく此わけの人おほく有りて見ゆる物く
こしいへる人やとよめるてはゆきの吉野
山のおくにおもひあれば人わけ入るとかわれ
しるしとよればしるとよめるところに
吉野の山はよしなれば詞花の人ハよめる歌と

かゝへてはかなきところとよめるところの吉野乃
山と云ふハさとれ心とする歌あまたよめり
百五 あつまぢの緒絶の橋とよめる今も陸奥にありといへり
此集雑部にも 第九 みちのくの緒絶の陸奥の国
のおもひたえしいへるといへる歌とも
みちのくの緒絶の橋これならんふみみふまずみ心まどはす
たえぬるを心せよとてたゆるにたとへたり
といへるも緒絶の橋とよめるとあるべし
百六 はしゐてよそにしかりのわれのみおもひのこさぬなさ
あふさかのなかにさびしさとハさびしさと
こさびしきことをしればとかくからぬとかし
いはぬねざめもありしなり

百七 何をして身のいたつらに老ぬらん年のおもはん事そやさしき

やさしとハはつかしき事也 古歌ニ 猶恨人哉

和歌の二代集に家の事なと君にやさしきハ恥るの

百八 梅花咲ての後の身なれやすき物とのミ人のいふらん

咲ての後の身とハ人にて梅も咲ての

のちとハ梅なりて梅ハすきものにて鳥のこゑわたる

すき物とハ人のいふらんと云也（あなかしこ）

大歌所御歌

百九 まきもくのあなしの山の山人と人も見るかに山かつらせよ

人とみるかにとハ人と見るかに山かつらせよ

人も見るかにとハ見る人ある也

あなしの山かつらとハ神楽の山人といふハ真榊葛にて

かつらなと山人のかさしとハいふへきそとく

あなしハ大和国なり山名也 曾丹歌云

まきもくのあなしのひはら春くれハ花か雪かと見るゆふして

是も付也 又あなしハ川にもよめり

同し名也 又かくとハ檜原の花ハ雪かと見ゆる

ゆふしてとあれハ此山に神のおはしますハゆふして

なとの花のことくあり

同名河山に神おハしますと基證あれはにや

萬葉古歌云

乙女子の袖ふる山のみつかきの久しき代より思ひそめてき

ふる山ハ大和国也 見つるとよめる

き神あかめてねきとゆふとめこ袖ふりとよみ

ゆふハ乙女ハ神女也 神にあそひ袖ふりと云也

とゝめたり萬葉ニハ未通女とかきてをとめとよめるか
き女はをとめのわらはなるをいふ也ともいへり彼
垣ハ神の前にありける垣なれハ神ハ伊勢にあり
けりせハ彼垣とも名つくる事あまたよめり
同ニ高野姫の天皇の御たいの事に本集ニ有
又作者の名あれ哥也

播磨ハ玉藻かりしほやくとよめる所に梅○ニある所にて善哉
け哥とのよくハよめる神のれ前にありとある
ともきこえしを　若彼垣ハ垣の中にありし二
くいえる哉垣なれハ神の御前にありとあるハ御
門のれにありけるなふハよめる哉三梅○とハ
もあまた又名あまたいへるいはれをしるへきなれし

百十　陸奥ハいつくハあれと塩竈の浦こく舟のつなてかなしも

百十一　眞金○吹きひの中山おひにせるほそたに川のおとのさやけさ
眞金○鐵也　吉備山にて鐵○をとりて梅さわハ
しはや吹○吹くといふ也　吉備の山のこしあたりのほそたに川
のさやけさハ常にせかるとハなるも備中國也

百十二　をとめこさなすへの人あつハ都人ハいさしいはきしと
是ハ小野篁とも云所のうたなれとさかなて者し
ても人あまかつ御ハ都人ハ行ても石見ノ國
とよめるにとくハ万葉にハ田舎とよめり
けくこをとこる申し旨人御をいひくハつくこよめ
御きされるをぬ中なよる大宮となりてこそ

人みなかくるといふはしらぬ人のはしめにいひし也

百十三 もかみ川のほれはくたるいな舟のいなにはあらすこの月はかり

此哥一首通ハ、ミかりしゆへにかくいへるなるへし もかミ川は

稲ふねとはてくるそのおれ舟のいりいりとおりてくる

くるわいな舟とはいひし 然れとも あかりわかはしらん

しかれとはまた我か出羽国の住人のいひし

ハ稲川とて在りし事なり 共てさかのほりける坂

のやうにて上らるゝて流れくるわの舟のゆく

それはまことにまことなきハことしも世なれ稲植をと

最上川のほれはくたる稲舟の心をもて思ふわれし

とありし先ハきたの哥の心にて作る川ハさる

ものなれハ哥にいへるもことなりけれ

百十四 君をおきてあた心をわかもたはすゑの松山浪もこえなむ

あたし人とハ他人を君をゝきてこと心を

もたしとある也 萬葉にハ夫意とかけり 未定の哥たに

擬古ノ作なるなれハ猶しらすおほつかなく

とある末の松山浪もこえなとは若男女よ

末の松山をさして彼山に浪のこえん時うつる心ありとさ

し契られ絶すく思ひけれハ人の心替

とハ浪こえし事 彼山に海より浪のこゆる

みちのくにてわするゝの海のみならすのきにたれ立

浪の彼松山の上にうつりこしなれハにかわらぬ

契りをなすへき事なれハ誠にあるまし事と山まて

阿わたしていへる也

百十一 一 頭ねさし乃旅たちおもしろき事にあそびわかれを惜み
せうしとハ國土乃いたる所とそありけれこゝ
行あめ人の方なからハこそあるとそしるとあり
あまたわかれの人なるにや

百十二 かひ乃〇とさやにも見まくほしけれとけゝれなくよこほりふせるさや乃中山
けゝれ 音通なりよこほりふせるとハよこたはるにて
人云さや乃中山ハ佐野郡に侍りてあれハよこほり
こゝろと云ハあたりよこほりくゝとうきを云な
ハむかしハよこほりと云事なりと云も
王代日記に見えたり のるに山乃よこほり備を
見ハやまのこゝろと云かなと讀れたる詞をあれ
すみれ山の郡に行てまれたる見えたり

むかしきみもわかし 但ささにかよこゝろ
こゝろとこゝろなりやしたるか云く頭ねさハ
伊勢乃と云詞たる乃國の風俗とも見てな
くとハ心なくとなきことハ乃國の風俗の詞と侍る
さとやある人 但あまりかたい風ハかなと
むの事にかれしひ〇とさやかたみまたえ
あまた人なくよこほりの伊勢の山かさとしるハ今
かよくきよめ人なく歌なりけてゐるを

一 かひの〇をねこし山こし吹風を人にもかもや言つてやらん

短哥

讀人家

一 くれたけハ是ハ云われて伊勢の言葉

くちくくさわの中にこくちくへるさとの代
れくろうえこくれりうさよよそり

同寄云

二 いはのみちわいすいつまん

貫之寄云

三 つらくさのゆふのれに

万葉ふくハ多稜とうきてつらくさとある

忠峯寄之

四 きえかし雲ふゆえんちて

淮南王ハ薬を服して佛ふ成て乃星る人
その仙薬のあふつさへ飛とりへうし犬鶏
すをも仙ふ成て元ふの月りし雲の上ふそ

わしなり事也

同寄之

五 左右もしハ秋のたかるゝにおもかさねさいそく
穗のたかくくとハ一頭ともへ也右ハ左ハなわい
左兵衛門府生西あかくあつかさねてとハ
すなわしと云事也譲の字ハをきさ

同寄之

六 とさくしくとあとのしまて

とさくしとハ優也すてい字也躬恒の供
名の床かくあるしれとさくしなわいとかし
く位あしさうとのもの伊勢物語にはとしまて
わかれの梅ニハとさくしつきて二ととえと

いひをてもとゝなり

同哥に云

七 あしめきのとしはくおいとしまれてかなりとつ

文集云中有三神山三上多生不死薬又云

蓬莱今但聞名このこゝろ

詞

八 めとにつる花さかりなれと

物名部 康秀哥乃詞云

むしハ草の名にも蓍にもいあけつる花を

ゑとの文字のなきみさしおもしろきされは

草乃名にもあさの哥になり

恋部云

九 たとのゝ隠れひとりのひ

まゝのまゝ牛絵の日にも五月めかしけ日ハかなる

ことりをひさとうされハひとりのひとハ云なり

とう春菖蒲かやしなれともわろてれひのひ

の日とにもとかしとおかしつなり

小町哥の詞云

十 あるみえいてたゝしや

何となハ縣ハ国に史記にみてゝる文なれ

の日記なりしわるこのなとせいつとせさてなり

十一 人名

女の名にも人云ことはいろくとよむにも人なる

ちれなそなくて君のおもしろきもしろきなり

くもいにたちくらしゝ義なれはおもひてよめるなり
て霧たちくらしてくれはなにもしらぬと今たにみ
えしたる事なり堀川の右の大臣の藤
まいらせし大宮の大いとの、ゆうしとき一条の
のおほせらるゝまゝなれは歌のとはすかいはむと何
なれは又此人に為房朝臣いかにてんと
つまとしりしとよみしにはいとむ地なり

十二 衣通姫（ソトヲリヒメ） 序云

日本紀云雅淳毛二派皇子の女也允恭
天皇八年春二月藤原におはしまして
衣通姫のかたちを見そなはしけり又衣通
姫みもとを立さりて一人かたわらの

みしかき事なきてよむ哥
かゝる月のさやけき夜也みかとの名をかゝすして為房も
住吉の神は皇后の御事なり又衣通
姫は玉津島明神としてまつる津守国基は
将作を講しける

十三 天神孫（アマツカミノミコ） 真名序云

彦火々出見尊也日本紀云ひこほゝてみ
のみことは兄のみことゝ豊玉姫をめとり
海の宮にすみつゝ豊玉姫のくたり
くつかへしてうみたまふ御子
事なくてかへりて後ひさしく姫さわらぬ
このみこ所に新におはしてのく海に

秋よろ力をさて海しかハ海へのわたつみよみて
令ころかころもとあら海上にてみえるには
うまめしてつむつまきんとなるとなりて
草をとらてみことつくミて海の底よ出て
海のこゝらとそらてまゐるみことよミた
まつる書

一 沖津ちろ色にぬく妹よわかの寐し宮に逢ふれよ風よくよ
豊御ハ鶴よくせあきらかと思ふとなる方にきて
契りきる中とに待つるに中つ風尾のゑてけにせ
それハもれくとこえつく妹かよるかわる我寐
一とハ同集の宰府とまて寐しとよあり

壱 海童女（ワタツウミノムスメ）

豊玉姫之同記之上に依し大わたつみのみこと
らくしき事をときこてわかそて文よりて
中なる人と見えとよろしと契りて常に依姫
と逢ひて中なるをすすめ豊玉姫のみこと
をあや姫のと也てよみのする歌書

一 わたつみの光ハあわりと人ハいへと君かよそひすたふとくありけり
わかゐとハ事こ御ハ玉よ依て色いろとくハ
きよくえとハいわるとえ

同記之伴に贈答二首ハ貴ひ峯歌又こゝにみ
ころよくおもゐ豊玉姫と依姫と為妃之とこの皇子ハ
神武天皇の父彦波瀲（ニコナギサ）武鸕鷀（タケウガヤ）草葺（フキ）
不合（アハセズノ）尊こけ也るうミ依まて屋小うれ羽根の色

まり彦(?)ハうりゆやとうさし
於けしきを者和歌肝心目(?)之非灌頂之
人者恢不可開仲灌頂撰異量及
并藤可授(授之)之
玉津嶋姫明神御并猿東之可恐之

下巻余
問答

一 ひとつや　　二 ひらち箒　　三 浦風
四 さしあみ　　五 二百八有只　　六 ともしを家(?)のさ(?) 付玉
七 うなゐ(?)　　八 うへのきぬ(?)さ　　九 小車のあしさ
十 めかりさ(?)　　十一 せりつみし　　十二 ふつき
十三 さゝさくさ　　十四 たえを楊わけし　　十五 花(?)のつゝ
十六 かの中ろ 付紙(?)　　十七 もとのこなる 付車(?) まし　　十八 めつらさくし
十九 排諧哥　　廿 旋頭(?)哥　　廿一 長哥 短哥
廿二 反歌　　廿三 旋頭歌　　廿四 混本哥

一問云寄ニかはいやとよめるハ何事ぞ
答云かはいやとハ井の中の蛙をいふてよめることなりハ井に
はすといふことハ井の中にはいはゆる内の清ゝ
蛙の夜ともすれハ井よりいでゝまつり
啼きてうたの集るところ鳴すて蛙のいかなる聲さ
てうたハおもふ人にもたくあはいつくのおぼえて啼ける見えて
人ともしてもゆかしとひとつ人ぞ井のもとめうらやましきこと
しても草ハのゆかしけさもれはけ蛙ハかはいやとはいまで
なく人ハ梅にすけるといふ心をとりつくろうめし　万葉集云
朝霞かひやか下に鳴蛙聲だにきかハわれ恋めやも
問云朝霞とよめる歌の寄ニとはかなるからやくが云かう
あれハ又先にみえたることくいはまほしう

答云かはやとよめるハ霧のたちこめたるかはの
こなたの夕霧ハかすみなる事にたとへ朝霞とハ
いふべきをたゞ霞とよみてかはやのかはづの
名所にし朝霞のうつろふ所也と云又萬葉集に霞を
青山とよめりともかはづとよめり
朝霧よハ葦山越て何ならぬの花ちりて鳴てなくなり
又云
秋の田の穂の上にきりあふ朝霞いづくの方にうつろひ行なん
又人の云寄霞云山のかげより出る霞をハ
まれに待わびて打ながめつゝ
三条太政大臣寄霞ニかはやかハよ霞なりけり
風ふけば霞のつゞきつけしかのまきにほのかにけり

是ハ業平のうへなり
二向ニ親くら帯の事なりける海の御許の家月
けさうしける人おもきおり女ハ其の男のもとに参る
の帯ありきあつかて神の御子に逢ひしかハおいて
よりける男の名を付る帯いとあはれなりとまう
て結ばうそせたるとさとし思ふ男の名書てあれは
やうて神の御前にあゐ掛帯のやう小折かしハさねと
申て男のこゝろかくるまてくぬねしもあり万葉に
東路の道の奥まつの親くら帯のことにおもひそめけん
此事たゞ見えたる物とす又のよくいふ
ことゝおもひつゝ
昔元服人の見えし是ハひとの事も親くら帯の国なる

男女のするいとまおもひそへとといふ物と云ふ
して親くら帯名とつきたるなり男の名とつきて
女神の前よて帯とおもひ之して中に
之し帯まいねさぬむとハすることにしよるへ
こうるにハ帯わくかむまたしけるれハきハ掛帯
のやうよまるむとハいつるなりとさとし思
男のやうそかけ帯のやうよう掛つ出ぬける
おもあやらぬ出るそうし但之しくぬて作られ
ありもくりハ二河と云事也又帯をとくこと
いふわハそへあらめつきの夫まつらへれいなくこそ
とえつなき小やうてい物と作なき物の名なら
小ちわの帯ねかてあつミとをしつるをさわハ帯の

あらはれたまふにおほしとよめる也この帯の
名ある名なるへきこと
高云神風伊勢と云ハいふ事なり
義云〳〵ミ風ハかくのことしおほくハみなとあまり
川に神風と云流れある五十鈴宮のわきなるなかるゝ
所をも申しなと一説ニ五十鈴川とつゝきといふなれハ
よみ侍るもさるへき神のめくみをたのしとも申せとも此文
ある説に二の義あるやうに見ゆ人ハあまた有
みな神風とよみてこゝさの人よまれたる儀なり日本
記云垂仁天皇廿五年三月朔天照大神を豊
耜姫命を離て倭姫命にこれをまかせたまふ倭姫命
神をしつめまゐらせむ処ともとめて菟田の篠幡（サヽハタ）

み禊さまたけらんて近江の国より入来廻奉還ていせの
国にいたる時天照大神倭姫命をゝしへて日く
きくこの神風伊勢国ハふかくよせる浪の重浪帰
国ニ傍（カタ）国（クニ）の可怜国也此国に居らんと思ふ故大神のをしへ
へのまにくいそのみやゐを伊勢にたてたまひて斎宮
を五十鈴川の上にたて是をいそのみやと云則天照大神
神のはしめてあまくたりますところ也と云りとなむ
事ニそよめる万葉に云
神風や伊勢の浜荻折ふせて旅ねやすらんあらき浜辺に
たゝいふハつミとかなミとかいふことし浜荻を為也
又同云ハつミとかなミとか云事又いふに
蒼云日本紀云天智天皇ちかつの宮にましまして

阿佛ちりは建立の地にしまして勝地と承まはり
六年二月ころの夜の夢に将門奏云いはくの山より
霊崛ありて其ゆへに帝勅して甚高の山に
又[illegible]ありさまれ走りかゝくの霊ありしに
人とはりしてさる日まてに伏伽して奏之先りよ
あるは猶不知り小山る寺ハ小揚寺あり又優婆塞あり
て經行念誦ともなへとこゝてよもの操行を
又是は寺傳者といふ所ー帝勅の下に重優
婆塞ゆそりひきまりこの山の名にさいのすて奏云
古仙霊崛伏蔵の地にて名を長等山といふ
う後は甚下に伽藍とゝて今の崇福寺
是之是よりさてあまるとはしもけ人ゆめてはあり

の山をうりといふ也といふ事は万葉にも
さて我ある山風の御神は錦をみる御世の神の命なる
とあり又ありつるもあることもさてあみの国とそあり
あることのうちにいふことにもとにく所なりとて

又

向云凡寿二二尺八とあるは何となり
黄云二尺八寸あれ每人をくれしもかゞ究道の人にて
あるいふ人きこえりしもこえしもに二尺八寸あるまことに
事也其はい鶏とそやましきのあるしい夜やましき帰
礼也あるに八声なくあしいかれも暁あるよし聞えれ
あるしいよりしみしとうなくなさるもあかるなれ
やまき帰るまいは鶏の鳴かよるあなて座り出て
とあるのとあるも二尺ともいふかいふ八といふ字の意

かはい家なく鶏犬ともしくさし鶏二声八と云つけの字を
こゝろ一ゝつけの字八こゝろ〇こゝろと鶏なる
鶏の名とすむとらかへり鳴とよりこゝろ〇のかく
いひかけしくとなるゝ万葉云
かり鳴とこゝろにしまれける二声八とこゝろとらかへりなく

三 鶯之聲之の事なと

とらへり声にはけれど何鳥二声八とかへりしこさこゝ花
とらへりとらかへりと八万葉なくの百千鳥也とろ
のなる又かし二又かさ鶯へ又鳴と云声と
又其とこゝへいくとおもはゝ二月情の声よ
とらかへりいひは鳴と色わるゝいひと百千と
いひすなはち百千鳥の後八こゝとたいの継成云

之 新云八山にありては八菴ともしといふ吏
おはいなおもくとハこゝに寄くと身をとなる

六 向云 鴨の羽くさハほう

若云むしたとこ秋にはほ女のおもはれとつくるゝひ
つきて其の家と早つよ女ことゝその中なるくさ霧とさ
してふくわの家ハ名のくさくさてまちなかにあるなる
男にあるとしとも母男のちよるすゝれあはくさよし
とらへりて時さまるね其後人をはまいひまかや
けなれつまつわくらしとゝるかなる程よいとまり
たくて時なとありね流にのとしみたまふくわれし
めでに行てそし一くさしと刀なりよるも春なとく
かのきてしよくて刀てもと記〇色もに添て母すし海なね

といへり是故将作の心なり　万葉云
ましらは時のくさ〳〵もとも我か大君の人君のわくらかと
或人後撰に将作のこゝろもとく倫寄云
是つれはまくらのかはらなれとも其の葉さきかへるこゝろ
将作是と見てもとの草木をいかに老つて
くるゝ小つとめくさ悩わたる我読るに本葉
葉あまりて春の草見てもとも言葉あはれは
是は我の人にまかするやたしくしもはさりまと
言と云新古の風情也
七句云　言ひ上云顔はいかに後ふてみる
拾見ての言は媚ふるふしさや後撰所選ならはりし
への人はしめ言云ひとふもしけるとおもへり又古今集も

常ならぬかくかいまうかともまくさひとかりし
ろいかなさけとおもふてなりしかり　向云けるやひと悔れ
まいとる古き人ともかくいはす　拾遺万葉云
梅花のちかよかくて言はるなるとも思ひなさけなるはしなる
又補親の寄云
言ひその歌つれとなかりくるさまに心にも山下もと庵あれ
けるとしはやしいたる心の実見て悩み程心ある
とも思ひまたんまのかまひ役いもと又なやの
言葉はそよりてとかりとわれは哀とくるまさる
やるし文集にもとも春の字とそへひらあらとよ
かり因果にてこともやさしくこひなる人にや深
氏物語にもけ顔なるなり

八向に左哥はらへてやさしくあるハ何事そ
答云家々龍甲の御亦しき事ありお部乃
式のとのくろのさめあらあのこりとやさしてうまき
又しなよるやうの鹿のくろ紅仏やさしてうたる事
あり萬葉云
むさしのにうらへてかやこ後てあきにからねき見ありにしてある
或説にあらくのふるいその鹿ろくのあ見をやさして
こゝろにとまちやとヒヒしきろ
四耶谷哥に云
玉くしけふたゝらやまてやさしきかなけ色にこせける
しふかりもかいさくやまたるのなのとねきて
やけいそろわくとハあるなや

九問云をくるまにはきいかなる義にあるらう
答云かそらさかしきに不弥宮のみゆきとらかる
かしこし又は車のふるのちらけし　古哥云
小車のかさの色ともときなれはあはれを待ちまさる見ん雅て
十問云めくることいふハ新しからう
答云或文云瀬けるとめくることいふ又瀬隆る
とかわり或おもへ日御をいふりて古哥云
かなさめくるそもてまちのおもへなかしいそいのよふ本よ
しうれしく常木のつくさしものたらのとくハ
峯よりまとと或はかはくまり又とのくちる
ところハめくあつめくるさハ故将作の哥
かくし伝てたり

ふと之をみてたゝねとなりて神仏をうやまひけるか
土間にせうれうしたる人とい百寿とある人の
きたりしかれと底にくちのそこかへりてきたる
て思ひそめてかしこのそれにとつきて仏備をもて
ありなかし事のわかちといふあはれ献れとて
年文の人のまいらせんといひ入ありけれは人ゝ
参らいひまいてさゝめかして但馬人の語りけるは昔
大和国に極者ありけり家まつしく山に行て薪を拾て
いとなみ事とせしとなくありけり門守の姫のこたり
かれをかいのまかてさゝくとみたりけり池の辺
よらせて行とれにかれをかくは極者のいひしこのひと
君かそこにわたりたると見てありけり童はあかりきさん

此さて病にふして其の事ともなく悔のつかれいたく
ありしこそ粉とある事ならすあはれいはんとすれはつけし
と濃めきく人あはれつきしき事なりけれ新子のことし
ありのとなけく泣よ母も又病に伏ねてありける
の家の女房この人とまかのかりよ立いまそかれ
けり悔くみしとのやうに悔せまいと見えておもしこそ
よまうかのいとくさ世にしれは病にわかりとてよくく此事あ
るると思ひけくなりて親子のものへとあるを言
女房とものいひけれは姫君を濃かる君によりてし
ありて宿を此事とてか病とやめるといひけれは
らいとおもひとしつゝ雨のよそにいて出きてわかれ
ありしてまゐのそくかぬね姫君のいつの事ありて文

なとしてよ給へめてくさん人たち行して御世下しろ
のたまひて一二月めくりいつ又いふく我父母我身を
ちり其後は仏事をさゝとさす八さいより志て
きんまう学問をしわつは学問して物見わつかを
経よめ又いふく書いてうよ手をならいて文人なれ
しおりしよめへしとれはらかわ又いふくるのてく
あさおりしたちつゝしあるし一心経大般若すなはよ
是しいのりせられやのおとりて書きしいはまる
ありてよき又いふくうけいさつ沙汰せよ護摩を
もるへしあちらつく経しも又て法門よ教え姫君
わるわさて御ちのの後とてもしてそうとかくちんさ
とんふつかいふ学をとさて沙汰しおくれしとり

姫君のしなくわは其後しゆへて道心にをこしてなし
すし様々にほかなをあるとき、志このむかし持経
者にて清夏に行基菩薩と寺師に法かた
礼盤にのまりていふくまつるの仰ら経よし
ねかしても晦といいて事ありてかくといふそと
おはしますに口あそみて云わは云有智光はかたりと
法ましまさはわりともあそひしまされは世間に貪
着して悪道にゆかん人をもしかは利益身あめかくて
こうしふ道にゆかしらんするたれ姫君は行基の化身
行基は文殊のうまれかはり智光は智光頼光とて
法をしるものは是の道は大きそうをもんてとわれと
人の五種法奏れしれ遺事師にて仁海僧正のかし

なをさて
恋つらむ人をわするゝ人よりもなかはさすかまさむ
と云哥を詠しも付哥ハけんともあるとみえ
乃なしけれ
十二月云 みまいらせつきのともなる哥ハいつよとみえつう
菅云 文選文賦云心不耐煩而害事鞅掌
又云 或清虚以婉約毎除煩以去濫
弘仁格序云
鋪設雜器切程多少等類事既歴
砕臣等窮従折中不煩上聞
煩惱両字釋云
煩ハ 咲才 惱ハ 哦イ

文集云
繚繞金輿之背 費園ニわつらはしきをと
いつきとあり
法花經文云
生疲労那 是佛を念しめなをあはれやと
同し
大和物語ニいくたの女の詞ニ
人のほけきことをいなきことも男子いとこ
とし月ころあるさりとも思はれもとある
ハ男のいつきつきすかりし 是ホまて心から
又いつき煩煩ハ惱之 君ニ 古哥云
嘆きをかへいつきつきて我ちき哥にいかなるにしかはるとしらそて

十三問云さかきといふ木ハかハ
答云或説ニ榊なりといへり又されとも家々ニ
云実ナりそれハ榊の葉ニ似たる物さしあるへしされハ
まつりと云　古哥ニ
二氏のハ山人とよめるさかき葉のたちつゝありけり
屋根ニ植木やみつゝれたるにて得心
問云或説ニ和名ニさかきさし云草なり葉
草ともいふ又三枝草ともいふ三枝と云ニ
其て云ふしかんといふかなしみの事とそ
んすしけれハよや家ならんと云実なりけれ
まつしいふすみゆのよしすてと云之されハ
よそれかうさ○しかんとあり葉あれ

さき之れハさか山人ニよせてるとしやうハいか
答云以是をといふわきにたるとは人さるを
十四問云きくわさといふ事何事ぞ
答云ましの鹿まて川きに人とよみてとも人上
まわりしまくとんと足されて中ハ世て鳴とんと
ゆくとハ云鳴と云鳥の鳴に似たる故也　古哥ニ云
夕されは鳴て秋の暮なくて也わか人といへるはかるそ
又曽丹哥ニ云
まつら鳴て秋の山人ハとよみと家とまさせぬるにとる
わきもとしとよめるハ鹿の秋ハ行しとまつ人すわハ留
まてよそ留ゆくまての聲ときま○めて独隠て待すへき
十五問云たか神とハすまさめしきさと云さまも当神と

のまうよ盗人となりていさしらぬむさし野へ行
時の事なり
盗人ハ国のミこにとらはれしと人あらしつまなし
とよめるいへり
草ハ君のこミハ当時ともまうしつる事のとりつるへし
これハ見えけりしとしも今からる事とも今よりかたい
てむかしあまり又和歌にいく其の海よりおはり
女のあるとはとその事をいふらくさへれとも
当時のあるくゆかり事をもわりたる事り
十三段なるへしかと云ハまことなり
草ハうやしくのあてさ海く不かゝれと落りまし
是ハ業平のまくし朝臣わか見とてもあれけり

よろまうこと申く高をしも河のみことりの
とらハくもら川の風よさゝら宿もと云てみな
ころしめく其の行をたまよりさてされハ神宿とそ
なみ人とかやしうとハ言をさて人にゆゑ
かゝるおりにやあはれなる人ハいかにも思へ
と云事しとそうてけり業平朝臣に
まりの家より神まうでもまりしよりまへしこと
向云業平朝臣の宿よりめくりしに小野にて
是之業平朝臣にかのつさにけり業平とて
かみハいへり 草よれハの神業ハ神代より
わかて寄わし寄よみそれかなくさりけるよれ
云ともみなかくそれはよくて人のこゝろ

えしかるによりハされと斎部氏ハもとよりも
おのれも寿とのふる人のこゝろにかなへれ
いとふる人備馬氏の綴ハ一条おほ臣の時より
はしめて律呂の寿ときこえあらはれけれとけ
たまはれ男之らに斎部氏のハ志まゝん
そかきの書にもしハその志すこれひとつにしも
やまと人是ハ神のさ寿よく知りかゝる内容
うたゝしふるしよるしのとふえくるうこに
ろといふ　蒼生の出とりかけていふ
小されは志のもろくとしえらいはなせ
ならなわるひきらんとしてすさましと熱
て志けり神宗の事又経摩凡の寿なし

斎部氏ハ忌事にあつかるを名におへる由
小里の寿しあかしあきよより忠之伊集又内達
祈年の祭にハこれら宮のハ祭とともにかゝる寿は
是をも志まかれ斎部氏と名つくる
神宗乃おこりハ日神の天岩戸にかくれ給ひし時
あらさるをもつて天照大神をまつるに今
思兼神をもつて思ひはかる河国のうちにかゝ
みとめてまつるのことはとりてまつる
やそよろつの神たちあつまりてはかりて
あまのかく山の銅をとりて日像の鏡を鋳
て麻をうゑてかしこきてかし穀（カヂノ）木をうゑて
白和幣（シロニキテ）青和幣（ニキテ）木綿をもつくる一夜小しきく

さしわかのたかくにはじめの神女のこころ
とくらきにて天窟小窟のうちにこもりて隠蔽と
つくりてかみたち天香山の五百箇真賢木を掘
にしてかみ一枝には玉をかけ中つ枝には鏡
をかけしもつえには青和幣しろにきてをかけて
ともにかけて太玉の命ともにてさゝけもち
おほまへにさしむけて天兒屋の命ともに
おほんくにいのりまうしむまつるをとりて
鬘にしひかけをとりてたすきにして竹の葉
をとりて中草をもて石窟の前に立て
ましで覆槽をふみならせて庭火をたかせ
俳優をなしてあひともにうたひまひしとこよの

長鳴の鳥をあつめてなかしむるなと太玉の
みことまうしをさしいくわさしけるなり
窺わきにいれかしことおもひてみそかに
手もちて天照大神のおほんかほなほしく
あめのしたもふたゝひあかるくなりて
乃たのしみのしかるにおもしろとのてこれは
あそひにはしめてなれるとの神楽のはしめなりと
申伎にいふところの小をしもつかたをは
あかるきとひさしにかみのおもてみな明白し
てそのうちにしてあはれといひけるか
あなおもしろあなたのしさやけ有魚とはあなて
しやしと云面白といふことはしまれる事とそなのと

いつれのを残し又ありけりといへは木の名の枝
と云ひし竹讃人をめでていろいろいさくてんよ
るかは是ハ紀伊の国の日前の社也つきにおほろ
ハおのおかならはし是ハ紀伊の宮也 古語
拾遺にみえたり
大内裏図考證中ね処に使可車に風流にかわりたる御車
とうそでも夫とそ知らぬとこからまこてあるところも
或ひとありし時云
是はなからさおかは光君のかは車と申のに風流あらは
といふありけれハ何事そ
答云 車と書に月毎あるかなとわれてといさにお
ほえん 此さにかは御車に見ると云事のありし馬にのれハ

あきらかなれと字はたかひ御車にあらんかし 又賀茂女集
ふとむとくとせし月日のかれなきにはなそめにけりて御と
みえたり 又狩衣ちかきの類と云とあり 是又とりきの義也
御車に月毎といふハ的のまとをかはれ其の物と云なるへし
園の字にハ御と云も又まとのかはりによはいなる哉よう
されとおもひにつきて的おハしませとあり 梅君の乳はある事
ら神の車と御と書とあり 是につきとハ十列のもいふ
乃ちしあるかもやけ寄にさかきてもりなるかしれ
大武三位寄に云
是につけにてはありしかなる今又とへ一つよ神とかきたるも
又賀茂女長寄 ふとくに是につきてよ神のまへにし
そへてきつる梅のこの花をさもきよある是おハしと

一十烈とあり 同じく車を申にたとへ
事ハ日本紀にあるよしあり小へ竹取と云お
月夜よいふ二月と云ハ祭田のみさきのお
にく赤なるけ生れわりあるとよふ
よくよろしわかむきとなりておもひとりとし
とれあかいと時に駿馬の竹取の〇〇
人もありて其申てらは天あさりね竹取のもて
給ふ力ある小ちたるとあるしとてりと〇〇ま笑言
田のみさきにゆかる太るの同しおわりさまて
帝の大馬をとさてと以外けんしやわりねつる
のちたる人とお猿ると〇のさ也ハ申さく
事ハ的よ在あ君の道ハ車と申たる

とよめるよし申さハ庵ににりしと云ふ臭しれて
や十烈のみる〇〇とたくわへん 前之ハ〇〇
あるる〇〇文のたにると十烈の馬なれや
あらむ但以上とさるある事也

大内之陽明の門ほとりハいつれいろう
前之日本紀云すさのおのみことハ出雲国え
くたりける時ハ哭泣の声あり〇ハ一人の老翁老
婆ありに小女をへきてうさきてなく尊とひて乃
たりくるに哭をかこて之かいくわれハ国の神也
脚摩乳と云ふ手摩乳と云ハ我の奇
稲田姫と云ふさきに八つ子八人ありしかに八岐
大蛇のみてきけ小女又乃ことあるに哭てる

のくさりくむとあとおもふたてまつりてや其にてなましみ
をたちあひて小女と以つかれはらみなうちてれ髪よ
きしろ父母ともに八醞酒と醸併度八間と以ひて
名を此のさる桟敷とくさて酒とらしてまつる大蛇
きたまり頭尾ともに八つの杖柄せなかにおひたり
八岳八谷の中にはひわたりて酒をのみて打ちふせ名
ひとつのさる桟敷におちし今その尊は御佩せる刀にて
これら大蛇を打きて蛇とはさくよきりつ尾すみ
て剣のなとこしくきれ給ひ刀のは中にあて刃の毀わつ
是ハ神剣といふくあやしとて安せんとてこれハ天
神に上献とは剣とは天叢雲と云蛇上に常
に雲気ある故也後に草薙剣と名つく倭武

尊東征の時伊勢大神宮より給ハりて東夷を
征ニ此国にの野火の難にあひて此剣にて草を薙
て逃れたまひし故也今熱田社にまつる尊ぶの剣
是天羽々斬と云大蛇を斬し剣也今石上宮に
おハします此のおはしける女はそれより妻となし
玉ひて宮つくりしていまそかりける其後日本紀に
見えたるは此のちに素戔嗚尊はみな
くなれ人のわさなりとおほしめして尊より
やすく事はまつる少彦名の神とともに醫療の道
遍くいひひろめ給ひて病の助とはしめ
給ふ御神なりて又悠紀主基といふとも此さいはひ
まつり主基ハ此の御のちに伝へたる御代の

又く御嫌之新式詳行の時常新式のはいかいは撰
ときこての夜とりこゑや二月をあくるまでなきこ
れハけ歌よみ出せり　是故太神宮の御神ハ
うらとる俳作ハ日よ出文殊の御影ハ右補摠追
のこりさわとこくうりて　向云けニの義いふまに
れく捨さる　荅云くのよくき事悔くようにて
さすがなる文日本紀と云ふいかひさるる事
あわハ笑蓮とさこゆくしくいひたりけて蛇に
乃世しと志すひるれみや作らへしかわしきとのくお
つれしとみあゆるありて同記にもまゐるおぼかれてみ
らかとのはいなくて神しこゑよりはなくてと云いて
らかく甚可しこかしいさしてくるなくしいかなか

しこあハ男之又とたなくたてとつかとてなまおよく
をさせとも新書乃義をと思ふ故あり今此世の人の哥ニ
讃つゑわとあ興云さいさとまり以のつけくていくきた
是ハみなことのはみつらをさんとて乃ての大日本紀
おんめ偶体杖出まとくる事ともあり

九問云誹諧歌義趣思何
荅云漢書之誹諧者滑稽也　滑ハ如なし稽ハ詞之書ゝ
史記滑稽傳ノ考物云滑稽ハ滑乱也言能優
者出口成章詞不窮竭若ニ滑稽之吐ㇾ酒ㇾや
傳云
大史公曰天道恢ㇾ豈不大哉談言微中亦可
以解紛優孟多弁常以談咲風諫

優旃善爲咲言合於大道
郭舍人發言陳辭雖不合大道然令人主和悦
是等滑稽之意也
誹諧乃字ハひきよくして色あらはれて又人倫
不敵言と思ひなからとも亡殃人令家ト
滑稽のそれハ非道ーしてこゝも成道若也又誹
諧ハ非王道ーして志こそ述所ハ義をもる事也故是を
准滑稽ニ爲趣弁説利口なれとも如言語出是
あらはれ事也或ハ狂言なしあ所義をもよほひ此
中又人のよこ妄語をしらるゝあるかれ也ー
傳云
齊威王時楚發兵加齊之王使淳于款之趙請
兵齎金百斤□□□□髡仰天大咲曰少之乎髡四
何敢王曰咲有説乎髡曰臣從東方來有禳田者
見其所持者狹而所欲者奢咲之於是王益
齊以黄金千溢□□□□
古今誹諧哥云
総而よるうて待とれるといさゝハ稀とかくはなくし
是等心弁説也
齊王使淳于髡獻鵠於楚道中其鵠徒揚空
籠造詐往見楚王曰使臣獻鵠過於水上不忍鵠
之渇出而飲之去我蜚也已吾欲判腹而死恐人
之議吾王以鳥獸之故令士自傷飲吾欲買而代之
是不信而欺吾王欲赴他國奔已痛吾兩主使不

通故來脤遍受眾大王楚王四善齊王有信士若
此共厚賜之賊信鵲在吠也
古今哥云
世の中のうきたひことに身をなけはふかき谷こそあさくなりなめ
是等詞弁説也
魏文侯時西門豹為鄴令豹到鄴會長老問之民
所疾苦長老曰苦為河伯娶婦以故貧豹問其故
對曰鄴三老廷掾賦斂百姓收其錢得數百萬用
其二三十萬為河伯娶婦與巫祝共分其錢持歸
當其時巫行視小家女者為河伯婦〃〃〃〃治齋
宮河上張緹絳帷女居其中〃〃〃〃共粉飾之如
嫁女牀席令女居其上浮之河中行數十里沒其人
家有好女者以故多持女遠亡以故充人又困貧
豹曰為河伯送女告之吾亦往送女〃〃〃〃其時
豹往會之河上〃〃〃〃其時巫老女子也從弟子女
十人來豹曰呼河伯婦來視其好醜女來豹曰是
復日送之即使吏卒抱大巫嫗投之河中有頃曰
巫何久也弟子趣之復以弟子一人投之〃〃〃〃凡投
三弟子豹曰巫嫗弟子女子也不能白三老入白復投
三老豹簪筆磬折嚮河立待久豹顧曰巫嫗
三老不來還欲復使廷掾趣之皆叩頭破額血如
死灰豹曰諾狀河留客之故若皆罷去歸從是以
後不敢言河伯娶婦
古今哥云

庵のうちや山ぶきこころ見るとしなしも見てあそぶなくて

是等心利口也

齊威王置酒召淳于髡賜之問曰先生飲幾何醉
髡曰臣飲一斗亦醉一石亦醉王曰先生飲一斗
而醉悪能飲一石哉髡曰賜酒大王之前執法在旁御
史在後髡恐懼俯伏而飲不過一斗徑醉口口口口口日
暮酒闌合樽促坐男女同席杯盤狼藉口口口口堂
上燭滅主人留髡而送客羅襦襟解微聞薌澤
當此之時髡心最歡能飲一石故曰酒極則乱樂極則
悲萬事盡然言不可極極之而衰以風諫焉王曰
善乃罷長夜飲

古今奇云

此ことをきこつきしにくはゆくえんといくハ秋乃夜かしもよハ

是等詞利口也

始皇議欲大苑囿東至函谷南西至雍陳倉優
旃曰善多縱禽獸於其中、寇從東方來令麋鹿
觸之足始皇以故輟止

古今奇云

夜ハいかに長しと思ても心こそらるる人よりえられ是ハ

是等心在也

優旃者秦倡朱儒也秦始皇之時置酒而天雨陛
楯者沾寒、旃哀之曰汝欲休乎皆曰幸甚旃曰我呼
汝應曰諾有頃殿上上壽旃臨檻大呼曰陛楯郎、曰
諾旃曰汝雖長何益幸雨立、我雖短固幸休居於是

始皇使陸楨者得半相代

古今哥曰

是所は古き萬葉のつぎにいれ飛たる雑体なりといへく

是等詞狂也

あるものはたとへばなにはずをきさめるめんのたくし

年説利口くるしくいへるにしたることなき也

向曰誹諧の趣此釋ハおもしろし古今に此部あるは誹諧乃

ハあはれ哥ありてうたれいへく

若云よくわかりましたり其の以上は誹諧の心ある哥

をとりていはれ彼部をたておかれけるにや

きこえたり此ハあまりにいまへる也 雑部まで

付佗釋ハあはれ事也

又向云擬云喩哥と云義の風比興等歌とハなる

若云毛詩并萬葉集ある文にも風比興なる擬云

喩哥也但そこの分別ある故六義を別之と風ハ喩

をあつさみとして物にかへて言葉にしたる也

比ハ物を取て其にたとへる歌にあらせよ其にならぬ

其ならむへ其題の心にかふは也 又賦雅ハ其にもあるらし

とかくしたくし雅はそこ〳〵にあたりて其歌ある故之

義よ別あ仍も有風雅頌と釋して賦比興と云未

釋大意あるかきかさく其此の哥ハ其に六義よみたる

又向云卅一字歌と長哥と名付五七あるを短哥と名る

若云歌ハ本作ハ勒字ハ閑（つさ）卅一字哥ハ有之

句ハ此字を為初勒并為の此字を為此勒ことを云

事長歌を長哥と名付るも七哥ハま二句の絶
字ハ為一韻す四句乃汎字ハ為二韻なせ侍る韻とそれ
事短歌を短哥と名くいにしへ喜撰式とよい
新撰髄脳古今集などにも有
向云志つゝ旋頭歌ハ韻字ハ用ハ古事記萬葉などよりこ乃
こハ入ても短哥と上古の濱成式とよい萬葉集
なとハ卅一字の哥を短哥と名付る七句を長哥と名く
中古の喜撰式なといひハ新撰髄脳古今などハ長七哥を短
哥と名なる者　答云濱成式云　古長乃求韻なせ二句為一韻
新長の求韻なけれし古の二句を為今句古乃寫となる
今二句飛字をはしから為一韻云と
なせ者以後ハ韻をみくおり濱成式ハ韻をもそれ歟

初むきの歌旋頭の所の式とよい万葉集すべて卅一字ハ
短哥と名付る又七哥を長哥と名るを
向云旋頭歌し濱成式の内よりこれらハ式後の説とそし
さて韻をかくとれ志つると喜撰ハ以後の式さつまて注者
よ僕して韻を短くりて長哥と称て短哥と名見ハ答
答云二の式のいくをへつもと自漢迄魏文称三変
和歌何ゝ万代同称兄諸事変異非此事者歟
向云新長短者旋頭今以哥韻字を不用して韻よ
よりてあとる事なる
答云今ハ韻字を不用とい文章句字ハ是より前
よ准擬してあとまるまさろすしいもんや韻とせる事
いふ未其人歟

廿二問云雑躰に入たる卅一字の哥ハ反歌歟其謂如何

答云仲実の朝臣或ハ反哥とも或ハ短哥ともいへり

或人云文撰ニ反離騒と云ものあり屈原か離騒を

騒人楊雄之所作也反字ハかへすといふこゝろなれハ故ニ反離

騒と号るハ反哥ともいへり一と云又人云反離

騒ハ屈原か離騒を返してなしたる故なりといへハ

しかし是を案するに人のあけし反哥とかくる事ハ雑躰

ハ旋頭誹諧の次ニ雑哥のおかれたるとて卅一字に

詠し出したるハ返しとなかりける哥をとなかりける又の雑躰

とやゝきこえに同しからんと詠ハかならす義もおはしかる

らせしいかゝや返反の哥詠かへりて返てなる

ある我故人の家々の説これに違事おほかるとも

古今ノ序ニ逮ニ素戔烏尊到ニ出雲国ニ始

有卅一字之詠今反哥之作也八雲哥也然ハ卅一

字哥を返哥と可稱也

廿三問云旋頭哥を旋頭哥と名るか

答云旋頭ハ上のくをしもに未に返す心なれハ

故ニ旋頭とも或ハ此哥を雙本と名く是より他

と以てしとりし小也成のかさり古今序にハ此哥

を混本哥とまたよまるとしるさる様に同し

問云若返歌なる

答云神代ハ哥の章句不定されハ哥の名とも

乃ち今の詠ものハ卅一字哥なり其

後定之すゐ此哥を或為字に旋頭卅一字の長らに

ふさしつきさる所ある歌詠ましむ身（不備旋頭以歌也）注
旋頭の歌ハ旋頭に似られぬよりて旋頭歌の心
あくこよく見ゆれ名くといへども義趣いひつくさ
孫姬式云混本歌と義撰歌 頭作本式 杖病歌と
稱事歌其名也
喜撰式云若不叶句者後悔病と稱す又云五七ゝ二句
の中たりハさしつきてとゝのへハ二句ともそく
詠之旋頭の体にあらぬ故是を混本歌と名く
和ま或くくともいへ是又旋頭にくたるの絶義趣旋
頭歌ハ其身ハ或書云以旋頭歌混本歌と稱
文選序云
重於今之作者異乎古昔古詩之体今則全取賦

名
又唐家来且求哀賦序云
賦古詩之流詩蓋志之所之歌又世経歌古
歌之流歌志之所之旋頭混本同古歌之
流也

110x
635
1

正和五年應鐘七七以清輔朝臣自筆中之
本書写比校

花鳥次第定家卿作

正月 柳 鶯　二月 桜 雉子　三月 藤 雲雀　四月 卯花 郭公　五月 橘 水鶏　六月 撫子 鵜

七月 女郎花 鵲　八月 萩 雁　九月 刈萱 鶉　十月 菊 鶴　十一月 ヒハ 千鳥　十二月 梅 水鳥